



平成 26 年度

日本文理大学  
「地（知）の拠点整備事業」年次報告書



おおいた、つくりひと

日本文理大学COC事業

## NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。

### おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、  
素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

NBU日本文理大学が取り組むCOC事業

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。

お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。

日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。

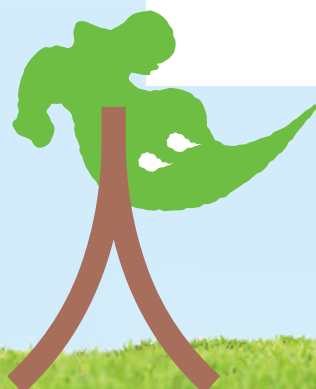
だからこそ今、私たちは動き始めます。

そのステージは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。

私たちは自分の力を信じて未来を拓く

そんな、『おおいた、つくりびと』になりたい。



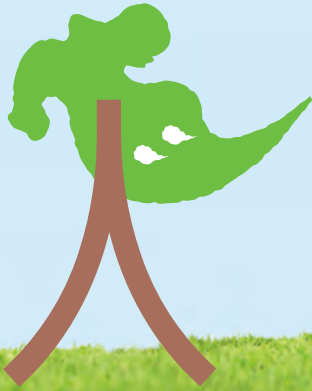
文部科学省

地(知)の拠点



NBU 日本文理大学

## 1. 事業概要・目的・事業計画



## 【事業概要】

日本文理大学における地（知）の拠点整備事業「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」は、本学の建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」「社会・地域貢献」を加えた教育理念に基づき実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へ発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する事業である。県内の少子高齢化が深刻である地域での「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を可能とする教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげるものである。

## 【目的】

本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することであり、具体的には、以下の通りである。

### I. 教育

大分県内の少子高齢化が深刻であり、本学から30分圏内の大分市佐賀関地区及び1時間圏内の豊後大野市での「体験交流活動」＋「課題解決に必要な知識の修得」＋「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修のサイクルとした教育体系に再編、確立する。また、これらの学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（副専攻制度）、連携ゼミ活動を可能とする体制を合わせて確立する。さらには、正課外学習活動も本学における人材育成（ディプロマポリシー）においては重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設する。以上の取り組みにより、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を実現し、地域創生人材を輩出する。

### II. 研究等

本学の限られた研究資源（人材、研究時間）の中で、地域の課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを「産学官民連携推進センター」を窓口として完成させる。地域ニーズに対応できるよう大学が持つシーズをチームプロジェクトとして編成し、

必要としている企業・地域とのマッチングを図る。これらの取組により、研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域の課題解決につなげる。

### Ⅲ. 社会貢献

学生の正課活動と正課外活動をリンクさせ、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、学生ボランティア活動がさらに有効なものとなるように発展させる。また、地域貢献活動や公開講座を拡充し、行政と連携し、「地域創生人材」育成のための「県民参画講座」を開講する。これらの取組により、地域との実践的協働活動の体制を実現し、地域再生・活性化を推進する。

### Ⅳ. 全体

以上の取組を統括し、学長のリーダーシップのもと、教育改革・改善の調整・推進にあたる学長室を有効に機能させる。学内の全学部・学科及びセンター・部局の連携を促進、調整するほか、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、本事業目的を実現するためのそれぞれの強みを活かした「実践的協働学習体制」を構築し、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。

## 【平成 26 年度事業計画】

平成 26 年度では、以下の 17 項目を計画する。

### I. 教育

- ① 時間割における「実践型教育実施枠」の確保、地域づくり副専攻の開設
- ② 正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行
- ③ 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の試行  
(大分市佐賀関地区での活動：②③共通)
  - ・ 1 次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動
  - ・ 商店街での地域活性化活動の実践
  - ・ N P O の経営支援
  - ・ さがのせきローカルデザイン会議の拡充及び定期的な実施（学生と地域の意見交換）  
(豊後大野市での活動：②③共通)
    - ・ 1 次体験活動（林業）、集落におけるコミュニティ維持活動（福祉支援活動）
    - ・ エコパークに関連した観光資源発掘活動
    - ・ 学生グリーンツーリズム協会の設立準備

### II. 研究等

- ④ 産学官民連携推進センターが中心となり、地域研究のシーズとニーズを調査、整理
- ⑤ 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択
- ⑥ 地域志向プロジェクト研究の実施

### III. 社会貢献

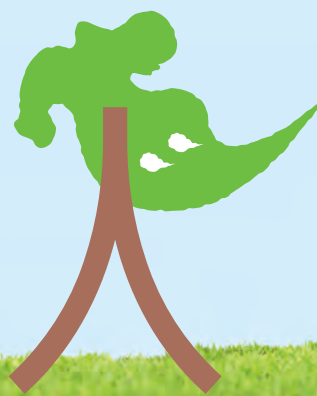
- ⑦ 未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施
- ⑧ 地域企業向け地域創生人材講座の実施

### IV. 全体

- ⑨ 学長室に事業推進ワーキンググループ（WG）を設置、事業推進・統括（各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、次年度実施の地域志向科目内容の確認）
- ⑩ 事務補佐職員 1 名の採用
- ⑪ 地域志向活動推進のためのアクティブラーニング設備の充実
- ⑫ 特任教員（地域コーディネータ） 1 名の採用

- ⑬ 連携推進会議の開催
- ⑭ 事業パンフレット・ホームページの制作・公表、シンポジウムの開催
- ⑮ 本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート調査の実施
- ⑯ 地域志向活動推進のためのFD／SD研修会の実施
- ⑰ 事業検討・評価委員会の開催・年次成果報告書の発行

## 2. 大学 COC 事業 リーフレット



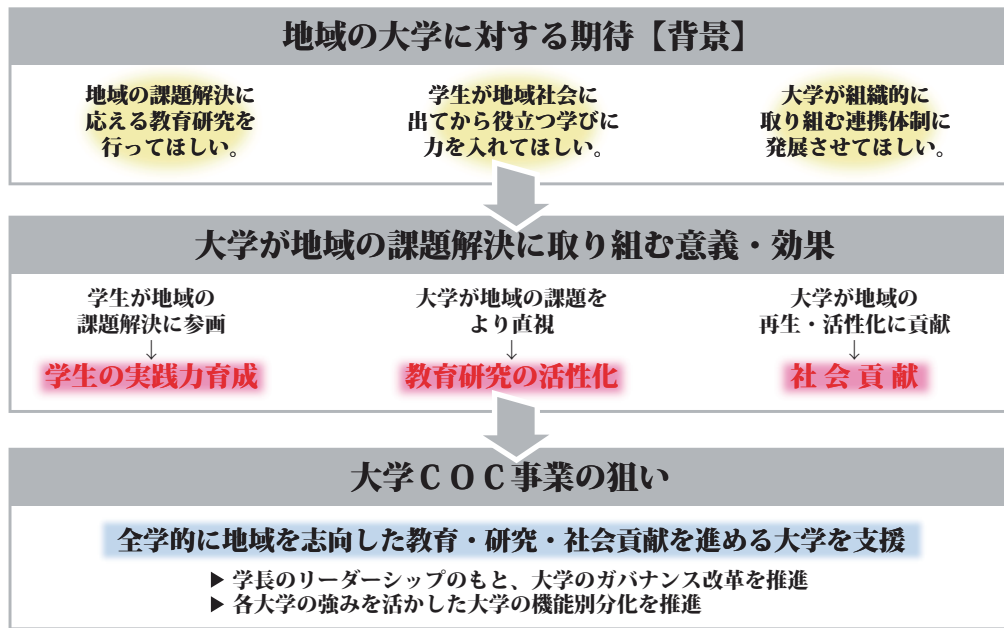


NBU日本文理大学 取組事業名称

# 「豊かな心と専門的課題解決力を持つ おおいた地域創生人材の育成」

文部科学省が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援する「地(知)の拠点整備事業 Center Of Community【大学COC事業】」に、本学が申請した取り組みがこれまでの人間力教育の成果とともに評価を受け選定されました。平成26年度の本事業には、国公私立大学等から237件の申請があり、25件のみが選定されるという狭き門でした。

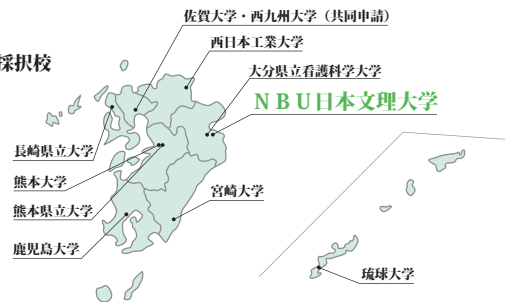
## 文部科学省「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】」とは



● 申請件数と採択件数

	申請件数	採択件数	採択率
平成25年度	319	52	16.3%
平成26年度	237	25	10.5%

● 九州地区の採択校



日本文理大学  
教育理念



NBU日本文理大学は、前身である「大分工業大学」の創設(昭和42年)以来、一貫して受け継がれている「産学一致」を建学の精神に掲げ、私立大学が持つ柔軟性・自主性・創意工夫を強みとして、地域産業の発展に貢献する有能な人材を育成することを使命としてきました。

本学では創立40周年となる平成19年に「中期将来計画 チャレンジ40」を策定し、建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」「社会・地域貢献」を加えた3つを教育理念として再編し、「大分」が有する特色の中で、「人間力と専門能力・職業能力を兼ね備え、地域経済社会の発展のリーダーとなる産業人を育成する」ことを目標とした教育改革に取り組んできました。

そのような中、文部科学省「平成26年度地(知)の拠点整備事業 Center Of Community【大学COC事業】」に本学が申請した取り組みがこれまでの人間力教育の成果とともに評価を受け選定されました。今後も3つの教育理念をより強固につなげ、今の社会に必要とされる、地域に愛着を持ち発展を担うことのできる人材である「地域創生人材」の育成に地域や産業界と協働して取り組みます。

# 「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」

## 1. 本事業による狙い

本事業では、本学がこれまでの産業界・地域社会を意識して取り組んできた「人間力教育」をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成するためのカリキュラムへと全学的に発展させ、地域との実践的協働活動により、地域活性化に貢献する人材を育成します。

## 2. 地域の課題解決による再生・活性化の7つの視点

- (1) 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
- (2) 人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”
- (3) 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
- (4) 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
- (5) 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
- (6) NPO法人の活動・経営支援
- (7) 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）

## 3. “おおいた地域創生人材”の必要性と育成ビジョン

上記の課題を総合的に課題解決していくためには、課題を主体的かつ実践的に解決でき、ノウハウを共有できる人的ネットワークを持った人材を継続的に輩出していく必要があります。

本事業では、「地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者と課題解決に取り組むことができる人材」である「地域創生人材」を、「教育」「研究」「社会貢献」の観点から育成していきます。

### 教育



- 「地域創生人材」育成のための根幹科目の全学必修化
- 地域での実践活動教育の推進
- 地域創生に必要なジェネリックスキル育成のための学部協働型の「地域づくり副専攻」の開設
- 正課外体験学習「大分チャレンジ・アワード」の導入

※「チャレンジ・アワード」とは、文部科学省が推奨する青少年体験活動奨励制度であり、「自然」「運動」「ボランティア」「教養」の4つの体験活動を計画的・継続的に取り組んだ実績が評価され、文部科学省からの修了証を獲得できる顕彰制度です。本事業では、「おおいた」を学びのフィールドにして4つの体験活動を促進するための「大分チャレンジ・アワード」の確立及び修了者数を増やすことを目指します。

### 研究

- 地域・地域企業との課題共同研究の推進（学生の参画）
- 複数教員によるプロジェクト型研究を推進



### 社会貢献

- 学生活動による社会貢献
- 地域向けの公開講座及びセミナーの開催
- 地域貢献度の評価



大学COC事業キックオフシンポジウム  
(平成26年11月開催)

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」

4. 連携自治体



5. 「地(知)の拠点」整備に向けての数値目標

分野	項目	平成26年度 現在	平成30年度 目標値
教育	地域志向科目数	26科目(5%)	200科目(40%)
	正課外体験学習「大分チャレンジ・アワード」修了者	3名	100名
	連携自治体内での就職率	31.6% (H26.3 卒業生)	35%
研究	地域との共同研究を行う教員数	8名	20名・4チーム
社会貢献	地域向けボランティア活動数	675名(のべ)	800名(のべ)
	地域向け公開講座数	3講座	7講座

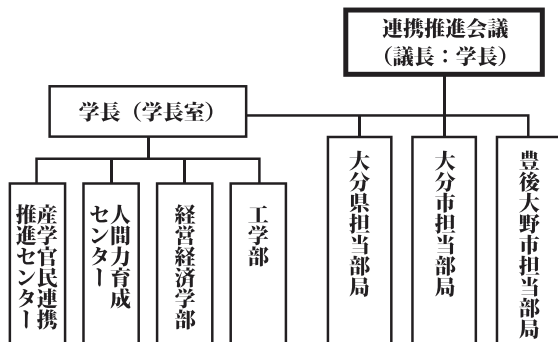
6. 学内の実施体制・連携自治体との連携体制・評価体制

■学内の実施体制

本事業では学長のリーダーシップのもと、学内の全学部・学科、各センター及び部局が連携し、地(知)の拠点としての体制を構築していきます。

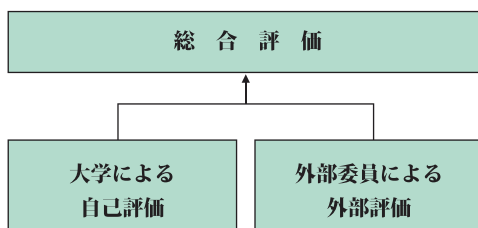
■連携推進会議

本事業にかかる地域課題の共有、人材育成と政策課題に対応した地域振興のための具体的な取り組みと、その進捗状況を把握・共有することを目的に連携推進会議(年2回開催)を設置しています。本会議は本学学長を議長とし、各自治体担当者、本学学長室、各学部長、センター長等で構成されます。



第1回 連携推進会議(平成26年10月開催)

■事業検討・評価委員会



《委員会構成》

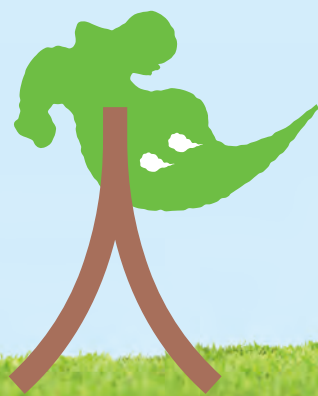
大学

学長、各学部長、産学官民連携推進センター長、人間力育成センター長、大学教育長、進路開発センター長、環境科学研究所長 他

外部委員

大分県関係者、大分市関係者、豊後大野市関係者、日本財団学生ボランティアセンター長、(一財)セブン・イレブン記念財団関係者 他

### 3. 平成 26 年度 COC 事業パンフレット



## 日本文理大学

連携自治体：大分県、大分市、豊後大野市



### 事業名：豊かな心と専門的課題解決力を持つおいた地域創生人材の育成

#### 事業の概要・目的

##### (地域の課題)

- 高齢化率が九州圏で最も高い県
- 規模が小さい集落が比較的多い
- ⇒「人口減少社会を見据えた特徴ある地域づくり」が必要

##### 特徴ある地域づくりのために取り組む課題

- 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ再生による地域活動の維持・活性化
- 人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」
- 観光・教育分野に地域自然を積極的に利活用した地域活性化
- 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
- 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
- 地域課題に取り組むNPO法人の活動・経営支援
- 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)

##### (課題解決のための大学の取組)

教育	「地域体験交流活動」+「課題解決に必要な知識修得」+「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルを確立し、上記地域課題に主体的に取り組める人材を育成
研究	●地域・企業との上記課題の共同研究の推進 ●複数教員によるプロジェクト型研究を促進
社会貢献	●学生活動によるボランティア等の社会貢献 ●地域向けの公開講座及びセミナー開催

#### 人材育成の取組

##### (人材育成像)＝「地域創生人材」

地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者と共に地域の課題解決に取り組むことが出来る人材

##### (目指す人材育成のためのカリキュラム改革)

##### ■「地域創生人材」育成の学修サイクルを確立

- Step1: 地域に愛着を持ち、地域の魅力を感じるための『体験交流活動』科目を導入(1年～2年次)
- Step2: 教養基礎及び専門教育科目を『課題解決能力獲得に必要な知識の修得』を根幹に再編(1年～3年次)
- Step3: ゼミナールや卒業研究で地域の課題に取り組むこと
- により『実践的課題解決型学修』を実施(2年後半～4年次)

##### (人材育成に地域の声を反映)

- 地域との協働体制構築の「チャレンジOITA人材育成フォーラム2014」を開催(参加者数:186名)
- 大学と連携自治体担当者が一堂に会した「連携推進会議」を開催(連携自治体参加者数:19名)

人材育成の方針と地域課題解決の取組内容について意見交換の場を設け、地域の声を取り込んで本事業を推進していく協力体制の構築を行った



##### (現在の取組)

- 学修サイクルの確立に向けて、正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」を試行
- 正課外学習活動も重要な役割を果たすことから、「大分チャレンジアワード」制度を創設、試行

事例1(卒業研究/6単位/実施学生数10名)

##### 「集落支援のための農業支援等のロボット製作」

地域のニーズが高い農業収穫支援ロボットや環境観測へ活用できる水探査ロボットを地域課題解決実践として実施。自治体との共同実験、ロボットコンテスト等で優秀な成績を収め、また地元紙等の取材を受け、その活動を地域住民に広く周知。



事例2(正課外活動/参加学生数15名)

##### 「大分チャレンジアワード\*」の実施(自然体験編)

豊後大野市をフィールドとして自然体験活動を実施。地理、歴史、文化的背景から地域を考え、民泊等の異世代交流も行い地域愛を育んだ。



事例3(教育・研究活動/参加学生数48名)

##### 「地域創生人材講座/活動報告会」の実施

(大分市佐賀関地区)これからの地域づくりを題材に地域住民と学生のワークショップを実施。今後の地域づくりのための学生活動計画を協働で立案した。(豊後大野市)地域での活動取組成果を学生4グループ、教員5名が市長、地域住民に報告。成果をもとに地域



この次の具体的な課題解決に向けた活動。\*大分チャレンジアワードとは大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に参加し、設定した基準をクリアした者について大分チャレンジアワード修了者として認める制度を確立。

##### (卒業後の学生のイメージ)

- 地域との関わりを通じ、身につけた技術や地域課題解決や地域社会に役立つものづくり等に活かせる技術者(一般企業、自治体職員、コンサルティング会社等)
- 地域をマネジメントする力と経営・経済の知識を備え、実践的な活動を通じて地域に活力をもたらす人材(一般企業、自治体職員、団体職員、NPO等)

##### カリキュラムマップ＝学修サイクルの確立

学 年	1年	2年	3年	4年
教養基礎科目	「大分学」			
	地域での体験交流活動			
専門教育科目		課題解決に必要な知識の習得		
		地域での課題解決型学修		
副専攻		学部協働型「地域づくり」副専攻		
正課外活動				大分チャレンジアワードへの参加

##### (地域志向カリキュラムの特徴)

- 1年前期全学教養基礎科目「大分学・大分楽」(2単位)を必修化(受講生450名)し、体験交流活動をはじめのための基本的知識を獲得
- 経営経済学部における「ゼミナール」(2～4年に開講。全科目必修・各2単位)の教育内容を見直し、地域実践活動を中心としたゼミを全体の半数以上に設定
- 工学部における「プロジェクト系科目」(1～3年に開講。選択・各2単位)において、地域実践活動を行う取組を拡充し、「卒業研究」(4年必修・6単位)において地域の課題解決を扱うプロジェクト研究を全体の半数以上設定
- 時間割に「実践型教育実施枠」を確保し、まとまった時間で地域活動が行いやすい教育環境を確立

##### 課題に対する大学の取組

	26年度(申請時)	27年度(予定)	30年度(目標値)
地域志向科目数	26科目(5%)	50科目(10%)	200科目(40%)
正課外体験学習「大分チャレンジ・アワード」修了者	3人	15人	100人
連携自治体内での就職率	31.6%	32%	35%

#### 地域課題を解決する力を持った人材の育成



大分県 企画振興部長  
日高 雅近

大分県では、県民誰もが夢と希望を持ち、心豊かに暮らせる県づくりを目指して、人口減少社会を見据えた特徴ある地域づくりなどを推進しており、地域づくりの担い手となる新たな人材の育成が課題となっています。本事業を通じて、学生が地域コミュニティに入り、小規模集落や地域商店街の活性化等に地域の方々と共に取り組むことを通じて、地域課題を解決する力を持った人材が育成され、卒業後も大分に残って地域で活躍することを期待しています。

#### 恵まれた自然環境をフィールドとして「人間力」を育成

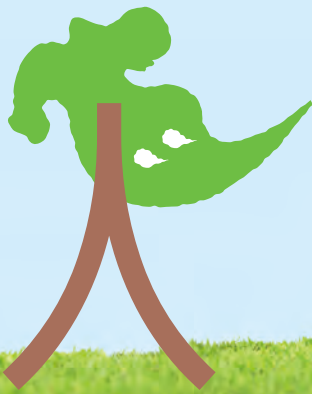


日本文理大学 経営経済学部 経営経済学科 2年次  
日野 満之

私は過疎や高齢化等の課題を抱える豊後大野市で、里山保全・農業・文化継承等の活動に携わり、多くの地域社会の方々や協働作業を経験しました。そこで得たものは、新しい価値観です。なぜなら、地域に必要とされる事に対するやりがいと使命感が、私の将来の仕事に対する考え方を大きく変えたのです。故郷である大分県の多くの人と関わる事で、さらに新しい自分を発見し、今後は地域の「未来」を支えていける人材を目指したいと思います。

## 4. 第1回 連携推進会議

平成26年10月29日 開催



日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）  
平成26年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成26年10月29日（水）10：00～12：00

場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションルーム

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介

3. 連携推進会議の目的及び運営ガイドラインについて 資料1

4. 議事

I. 本学大学COC事業の概要説明 資料2

現状と目的、

対象とする地域課題と具体的な取組、教育カリキュラム改革方針、

年次計画、連携推進方法 等

II. 意見交換等

III. 今後の進め方及びスケジュールについて 資料3

5. その他

I. 本学大学COC事業キックオフシンポジウムについて

6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成26年度 第1回 連携推進会議

<出席者名簿>

平成26年10月29日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹(総括)	渡辺 康志	本学との連携・調整窓口
	研修生	布施 覚弘	
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課	課長	高橋 基典	ユネスコエコパーク認定推進活動
企画振興部 観光・地域局 集落応援室	室長	高屋 博	過疎地域の集落維持・活性化活動
	副主幹	武藤 祐治	
生活環境部 消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	河野 雅弘	NPO法人との協働・経営支援活動
商工労働部 経営金融支援室	室長	工藤 典幸	学生起業家マインド育成活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	主査	木付 佳代	商店街と連携した地域活性化活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	主幹	那須 祐介	地域ブランド発掘による6次化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	塚崎 一孝	総合型地域スポーツクラブ支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	参事	平松 禎行	本学との連携・調整窓口
	主査	足立 威士	
市民部 佐賀関支所	支所長	太田 宏	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	課長	滝口 裕朗	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	課長	有馬 徹	健康で活力に満ちた生活支援活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課	課長	佐保 正幸	本学との連携・調整窓口
	参事	堀 克則	
まちづくり推進課	課長	藤元 篤夫	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	大野 真寛	エコパーク認定推進活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之
学長室長/人間力育成センター長	吉村 充功
工学部長	安田 幸夫
経営経済学部長	橋本 堅次郎
大学教育長	島岡 成治
産学官民連携推進センター長	後藤 幹雄
FD委員長	近藤 正一

所 属・役 割	氏 名
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介



## 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）連携推進会議の目的

日本文理大学は、文部科学省 平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業」に採択された（事業期間 5 年）。本大学 COC 事業の趣旨は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決等の取組を進めることである。これにより、大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を育成するとともに、大学のガバナンス改革を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学を形成することを目的としている。

本学の事業では、これまで実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へと発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する。すなわち、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげることを目的としている。

本事業の円滑な推進にあたっては、本学と連携自治体各部署との実質的な連携協力体制の構築が不可欠である。そのための「連携推進会議」（年 2 回開催）を設置し、本事業にかかる地域課題の共有、人材育成と政策課題に対応した地域振興のための具体的な取組とその進捗状況の把握・共有、改善を図り、取組の実質的な成果が得られるよう連携を強化することを目的とする。

## 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 連携推進会議 運営ガイドライン

（趣旨）

- 1 このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。）地（知）の拠点整備事業（以下、「COC 事業」という。）の推進にあたり、本学と連携自治体とで構成する「連携推進会議（以下「本会議」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

- 2 本会議は、COC 事業の円滑な推進のため、本学と連携自治体各部署とが本事業にかかる地域課題を共有し、人材育成と政策課題に対応した地域振興のための具体的な取組とその進捗状況を把握・共有、改善を図ることを目的とする。

（議事進行）

- 3 本会議の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

(開催時期)

- 4 本会議は年間2回の開催とし、開催時期は4月および10月とする。ただし、平成26年度は10月のみの開催とする。

(構成員)

- 5 当初構成員は以下のとおりとし、各自治体担当部署の課長または室長または支所長の参加を求めるものとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

【日本文理大学】

- 学長（事業推進代表者） ○学長室長／人間力育成センター長（事業推進責任者）
- 工学部長 ○経営経済学部長 ○大学院工学研究科長 ○大学教育長
- 産学官民連携推進センター長 ○FD委員長 ○学長室WG担当

【大分県】

- 企画振興部 政策企画課 ○企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課
- 企画振興部 観光・地域局 集落応援室
- 生活環境部 消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室 ○商工労働部 経営金融支援室
- 商工労働部 商業・サービス業振興課 ○農林水産部 おおいたブランド推進課
- 教育庁 体育保健課

【大分市】

- 企画部 市長室 ○市民部 佐賀関支所 ○商工農政部 産業振興課
- 教育部 スポーツ・健康教育課

【豊後大野市】

- 総務課 ○まちづくり推進課 ○商工観光課

- 2 事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合、適宜、部局の変更および追加を認めるものとする。

(事務局)

- 6 本会議の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

(その他)

- 7 このガイドラインに定めるもののほか、本会議の運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各自治体担当部署と協議の上、決定する。

地(知)の拠点 平成26年度 第1回 連携推進会議 2014.10.29 10:00~12:00

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY

資料 2

## 日本文理大学 地(知)の拠点整備事業 (大学COC事業) 取り組み概要

豊かな心と専門的課題解決力を持つ  
おおい地域創生人材の育成

学長室

地(知)の拠点

## 2 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

地(知)の拠点

## 3 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

地(知)の拠点

## 4 文科省：COC事業とは？

1. 背景く地域の大学に対する期待>
  - 地域の課題解決に應える教育研究を行ってほしい。
  - 学生が地域社会に出てから役立つ学びに力を入れてほしい。
  - 大学が組織的に取り組む連携体制に発展させてほしい。

↓

<大学が地域の課題解決に取り組む意義・効果>

- 大学が地域の再生・活性化に貢献 地方創生の  
一環
- 大学が地域の課題をより直視 → 教育研究の活性化
- 学生が地域の課題解決に参画 → 学生の実践力育成

地(知)の拠点

## 5 文科省：COC事業とは？

地域のための大学へ  
Center Of Community

教育 研究 社会貢献

全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援

→ 学長のリーダーシップのもと、大学のガバナンス改革を推進

→ 各大学の強みを活かした大学の機能別分化を推進

事業期間 最大5年

地(知)の拠点

## 6 文科省：COC事業とは？ ～2つの目的～

- 教育カリキュラム・教育組織改革が必須
- 「地域志向科目」の実施
- 自治体との連携を必須
- 実質的な連携

7 全国の採択校の状況

	申請件数	採択件数	採択率
H25年度	319	52	16.3%
H26年度	237	25	10.5%

8 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 年次計画と達成目標
6. 連携推進方法

9 本学が育成を目指す「地域創生人材」とは？

教育 社会貢献

地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者と課題解決に取り組むことができる人材

この実現に必要な科目を「地域志向科目」と定義

10 これまでの取組と目指す人材像＝人間力の発展

これまでの取組

建学の精神 産学一致 実践科目の拡充 教職協働 地域での教育

教育理念 人間力の育成 社会・地域貢献

人間力能力要素 こころの力 + 社会人基礎力 + 職業能力 + 専門能力

大分に貢献するロボットの提案と開発 (PBL) 商店街活性化のための打合せ 里山保全活動 地域との交流

“大分”という恵まれた環境の中で、「人間力と専門能力・職業能力を兼ね備え、地域経済社会の発展のリーダーとなる産業人を育成する」

11 本事業の連携自治体

連携自治体	H22国勢調査人口	高齢化率
大分県	1,196,529	27.6%
大分市	474,094	22.3%
豊後大野市	39,452	38.1%

佐賀関地区の高齢化率は45.2%  
※高齢化率はH24年10月またはH25年10月の数字

12 重点的に取り組む地域（フィールド）

- ◎ 大分市佐賀関地区 ※一部の活動は大学周辺でも実施
 

【可能な学習内容】1次体験活動（農林漁業）、環境保全活動・技術開発、地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動）、商店街組合・NPO・商工会との連携による活性化策の実践・職業体験活動、6次化活動、総合型地域スポーツクラブの支援、NPOの経営支援（財務診断等）など
- ◎ 豊後大野市
 

【可能な学習内容】1次体験活動（農林業）、集落におけるコミュニティ維持（祭の継承、福祉支援活動）、エコパークの観光資源発掘・環境保全活動、学生カイト育成、学生コミュニケーションの開設、6次化活動、地域での高齢者向け学生庁講習会の実施、高齢社会に対応した支援ロボットの開発など

県内他地域での活動を排除したものではありません

13 本学のCOC事業の目的

◎ 地域課題である**少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成・輩出**（地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続）

◎ **地域課題への取り組みを強力に進めるため、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、地（知）の拠点を実現**（地域の実態に即した社会貢献活動、研究プロジェクト活動による地域への還元）

14 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. **教育カリキュラムの改革方針**
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

15 取り組み1ーカリキュラム再編（学修サイクルの確立）

◎ 「地域創生人材」育成のための学修サイクルの確立

体験交流活動 → 課題解決に必要な知識の修得 → ステークホルダーとの協働による課題解決型学修

16 取り組み2ーカリキュラム拡張

◎ 学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（**副専攻制度**）を導入

◎ **連携ゼミ活動・プロジェクト研究活動を推進** → **地域課題への取り組みを強化** 教育 研究

◎ 正課外学習活動も重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「**大分チャレンジアワード**」制度を正課外プログラムとして創設 教育 社会貢献

地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげる

17 正課外活動「大分チャレンジアワード」制度について

◎ 文部科学省が首都圏で実施する事業の大分版として構築

自然体験活動、運動・スポーツ、ボランティア活動、科学・文化・芸術活動

チャレンジアワード修了証

目標設定 → 活動の継続実施 → アワード獲得

リーダーによる指導・助言、各活動の指導者・コーチ等による指導

4分野全てに組み込み、3ヵ月以上の継続した地域での主体的な活動が必要

地域でのフィールドが多数必要

18 学修サイクルを基にしたカリキュラム体系のイメージ

	工学部	経営経済学部
4年	卒業研究（課題解決型学修） 知識修得科目E	協働型 【拠点】豊後大野市 知識修得科目J 知識修得科目K
3年	知識修得科目D 知識修得科目C 知識修得科目B	ゼミナールIV（課題解決型学修） 【拠点】佐賀県地区 知識修得科目S 知識修得科目R
2年	知識修得科目A 知識修得科目F 知識修得科目G	ゼミナールIII（課題解決） 知識修得科目N 知識修得科目M 知識修得科目P
1年	体験交流活動科目A 体験交流活動科目B	知識修得科目L 知識修得科目O 知識修得科目Q 知識修得科目H 知識修得科目I 知識修得科目G

副専攻、社会参画実習（課題解決）、大分チャレンジアワード（自然体験活動、運動・スポーツ、ボランティア活動、科学・文化・芸術活動）

19 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

20 想定している地域課題と教育研究フィールド【工学部】

県内の少子高齢化が深刻である地域を主な対象に、少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な地域課題の解決を目指す

1. 高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
4. 地域ブランド発掘による交流人口増・産業活性化（6次化）【経と連携】

5年間の事業で取り組みを進行させながら、取り組みを定着させ、事業終了後も取り組み地域の拡充を目指す

21 想定している地域課題と教育研究フィールド【経営経済学部】

県内の少子高齢化が深刻である地域を主な対象に、少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な地域課題の解決を目指す

1. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
2. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
3. NPO法人の活動・経営支援
4. 地域ブランド発掘による交流人口増・産業活性化（6次化）【工と連携】

5年間の事業で取り組みを進行させながら、取り組みを定着させ、事業終了後も取り組み地域の拡充を目指す

22 佐賀関地区での取り組み 1

関あじ開さば通りを核に


- ◎地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動）
- ◎商店街組合・NPO・商工会との連携による活性化策の実践・職業体験活動
- ◎NPOの活動参画と経営支援（財務診断等）
- ◎学生拠点の開設（H27年度～）
- ◎地域との対話・交流の場の設定（ローカルデザイン会議の拡充）



教育 社会貢献

23 佐賀関地区での取り組み 2

- ◎1次体験活動（農林漁業）
- ◎環境保全活動・技術開発
- ◎6次化活動
- ◎総合型地域スポーツクラブの支援（当面は大学周辺地区で実施）など



教育 社会貢献 研究

24 豊後大野市での取り組み 1

大野町北部地区を中心に

- ◎1次体験活動（農林業）
- ◎集落におけるコミュニティ維持（祭の継承、福祉支援活動）（地域公共施設の運営補助）
- ◎地域での高齢者向け学生IT講習会の実施
- ◎高齢社会に対応した支援ロボットの開発など




教育 社会貢献 研究

25 豊後大野市での取り組み2

清川町井崎地区、三重町駅前通を核に

- ◎1次体験活動(農林業)
- ◎集落におけるコミュニティ維持(祭の継承、福祉支援活動)
- ◎エコパークの観光資源発掘・環境保全活動
- ◎新たな学生ガイド育成
- ◎学生コミュニティショップの開設(H27年度～)
- ◎6次化活動



教育 社会貢献

26 地域志向プロジェクト研究の実施

研究

- ◎ 地域志向プロジェクト研究の学内公募，採択
  - ◎ 年度毎に3件公募。次年度以降は4件予定
  - ◎ 地域からのニーズ，課題に基づいて分野を設定 → 事前に自治体と調整
  - ◎ 3名以上の教員からなるプロジェクトチーム

27 重点的に取り組む地域(フィールド)

- ◎ 大分市佐賀関地区
 

【可能な学習内容】1次体験活動(農林漁業)、環境保全活動・技術開発、地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動)、商店街組合・NPO・商工会との連携による活性化策の実践・職業体験活動、6次化活動、総合型地域スポーツクラブの支援、NPOの経営支援(財務診断等)など
- ◎ 豊後大野市
 

【可能な学習内容】1次体験活動(農林業)、集落におけるコミュニティ維持(祭の継承、福祉支援活動)、エコパークの観光資源発掘・環境保全活動、学生ガイド育成、学生コミュニティショップの開設、6次化活動、地域での高齢者向け学生IT講習会の実施、高齢社会に対応した支援ロボットの開発など

県内他地域での活動を排除するものではありません

28 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

29 主な数値目標(H30)【教育】

教育

- ◎ 地域志向科目数：全科目の4割(200科目)
- ◎ 地域での実践活動教育の推進
  - ◎ 経営経済学部における「ゼミナール」で地域実践活動を中心としたゼミを全体の半数以上設定
  - ◎ 工学部における「プロジェクト系科目」において、地域実践活動を行う取組を拡充し、「卒業研究」において地域の課題解決を扱うプロジェクトを全体の半数以上設定
- ◎ 「地域づくり」副専攻修了者年30名
- ◎ 正課外活動「大分チャレンジアワード」修了者年100名
- ◎ 県内就職率35.0%、希望地域ミスマッチ割合0

30 主な数値目標(H30)【研究・社会貢献】

研究

【研究目標】

- ◎ 地域との共同研究を行う教員数20名4チーム

【社会貢献目標】

- ◎ 地域ボランティア活動数800名(延べ)
- ◎ 地域向け公開講座数 7講座
- ◎ 本学が地域貢献していると実感する人数の倍増

社会貢献

31 今年度の主な実施内容1  
—教育

◎ 正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行

◎ 大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の試行

◎ 大分市佐賀関地区での活動：
 

- 1次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動
- 商店街での地域活性化活動の実践、NPOの経営支援
- 学生と地域の意見交換会

◎ 豊後大野市での活動：
 

- 1次体験活動（林業）
- 集落におけるコミュニティ維持活動（福祉支援活動）
- エコパークに関連した観光資源発掘活動
- 学生グリーンツーリズム協会の設立準備

教育

32 今年度の主な実施内容2  
—研究等、社会貢献

【研究】

◎ 地域研究のシーズとニーズを調査、整理

◎ 地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択（10月）
 

- 3件公募予定
- 地域からのニーズ、課題に基づいて分野を設定
- 3名以上の教員からなるプロジェクトチーム

◎ 地域志向プロジェクト研究の実施

【社会貢献】

◎ 市民対象公開講座「大分学・大分祭」の実施（12～2月）

◎ 地域企業向け地域創生人材講座の実施（1～2月）

研究

社会貢献

33 平成27年度以降の主要な取組

【平成27年度】

◎ 教養基礎科目である「大分学・大分祭」を必修化

◎ 正課教育における学修サイクル体系の試行

◎ 地域活動拠点の開設、運営開始（佐賀関、豊後大野）

◎ 正課外活動「大分チャレンジアワード」の本格運用

【平成28年度】

◎ 正課教育における学修サイクル体系の本格運用

◎ 地域創生リーダー制度（履修証明制度）の整備、試験運用

【平成29年度】

◎ 正課教育における学修サイクル体系の拡充

【平成30年度】

◎ 正課教育における学修サイクル体系の完成

【各年度】

◎ 地域志向プロジェクト研究の学内公募、実施、地域への還元

34 本事業の実実施計画と期待される効果

H26 H27 H28 H29 H30 H31以降

学長室を中心とした事業推進（各学部・人間力育成センター・産学官民連携推進センター）／連携推進会議（+各自治体担当部局）／事業検討・評価委員会（+有識者）

期待される成果

【大学】

- 学修サイクルの定着（おいたモデルを全国へ発信）
- 地域創生人材の継続的な輩出

【地域】

- ひとまちも元気な地域の実現
- 教育力の高い地域の実現

学修サイクルの確立

体験交流活動・課題解決学修の試行	拠点の開設	拠点の運用	拠点事業拡充	拠点の完成
チャレンジアワード試行	学修サイクルの試行	学修サイクルの本格運用	学修サイクルの拡充	学修サイクルの完成
チャレンジアワード実施	チャレンジアワード運用	チャレンジアワードの拡充	チャレンジアワードの拡充	チャレンジアワードの完成

学びの場づくり 教室整備 学修評価方法の検討・試行・確立

学修成果発表会・FD/S D研修会・地域への還元（社会貢献実践）

35 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題と具体的な取組
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

36 連携推進方法

◎ 事業の推進にあたっては、全体進行を学長室が統括しつつ、連携自治体との調整に努める

◎ 個別の取り組みについては、担当主任教員を中心に、連携自治体各部署担当者が必要に応じて直接調整を行いながら取り組みを立案、実施

- ◎ 具体的な取組計画があるもの
- ◎ 年次進行に応じて企画を立案するもの



## 日本文理大学 大学COC事業 今後の進め方について

- ◎事業の推進にあたっては、全体進行を学長室が統括しつつ、連携自治体との調整に努める。
- ◎個別の取り組みについては、以下の担当主任教員を中心に、連携自治体各部署担当者と必要に応じて直接調整を行いながら取り組みを立案、実施する。

## 大学COC事業 担当主任教職員一覧

## ○事業推進担当者：

- 事業推進代表者（統括）：平居学長
- 事業推進責任者：吉村
- 全体：吉村、釘宮、特任教員
- 教育：工学部：吉村  
経営経済学部：鍋田
- 研究：池畑
- 社会貢献：高見
- 事務統括：釘宮、西野

## ○設定地域課題別担当主任者：

## 【工学部が主に対象とする地域課題】

- (1) 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化・・・ 池畑・高見
- (2) 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり・・・ 川崎・河邊
- (3) 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）・・・ 杉浦

## 【経営経済学部が主に対象とする地域課題】

- (4) 地域商店及び商店街の活性化による地域振興・・・ 本村
- (5) 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持・・・ 竹田・堀・河村
- (6) NPO法人の活動・経営支援・・・ 吉本

## 【両学部協働により対象となる地域課題】

- (7) 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）  
・・・ 福島（工）・工藤（経）

## ○カリキュラム改革担当主任者：

- 工学部：近藤＋各学科より後日選出
- 経営経済学部：鈴木（＋コース責任者）
- 教養基礎教育：吉村
- 正課外活動：高見
- FD推進：近藤
- SD推進：釘宮

○自治体部署別窓口担当主任者：

【大分県】

担当部局	連携取組内容	担当教員
◎企画振興部 政策企画課	本学との連携・調整窓口	吉村
企画振興部 観光・地域局 集落応援室	過疎地域の集落維持・活性化活動	高見
商工労働部 商業・サービス業振興課	商店街と連携した地域活性化活動	本村
教育庁 体育保健課	総合型地域スポーツクラブ支援活動	竹田
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課	ユネスコエコパーク認定推進活動	杉浦
農林水産部 おおいたブランド推進課	地域ブランド発掘による6次化活動	福島・工藤
商工労働部 経営金融支援室	学生起業家マインド育成活動	池畑・河邊
生活環境部 県民生活・男女共同参画課 県民活動支援室	NPO法人との協働・経営支援活動	吉本

【大分市】

担当部局	連携取組内容	担当教員
◎企画部 市長室	本学との連携・調整窓口	吉村
市民部 佐賀関支所	地域と連携した地域活性化活動	吉本・高見・本村
教育部 スポーツ・健康教育課	健康で活力に満ちた生活支援活動	竹田・堀
商工農政部 産業振興課	地域ブランドを活かした6次化活動	福島・工藤

【豊後大野市】

担当部局	連携取組内容	担当教員
◎総務課	本学との連携・調整窓口	吉村
まちづくり推進課	集落維持・活性化活動	池畑 高見・川崎・河村
商工観光課	エコパーク認定推進活動 (学生グリーンツーリズム活動) (商店街活性化)	杉浦・工藤・本村

(敬称略)

平成26年度COC事業スケジュール

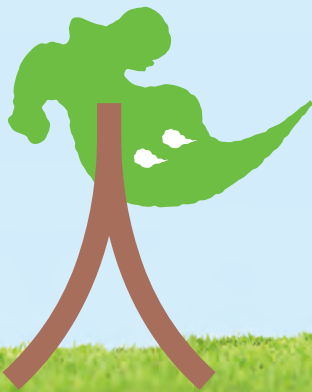
平成26年10月29日

作業内容	9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
<b>【全体】</b>																					
COC学内説明会			●																		
教職員案内	■	■																			
資料の作成	■	■																			
事業推進ワーキンググループ (WG) 設置				●	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
WGメンバーの選定	■	■																			
WG会議の実施				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
事務補佐員の採用			●																		
学内手続・募集	■	■																			
特任教員の採用				●																	
学内手続・募集	■	■																			
連携推進会議の開催							●	10/29													
日程の調整	■	■																			
議事次第の作成	■	■																			
案内状作成・送付	■	■																			
参加者の調整	■	■																			
COCフォーラムの開催									●	11/11											
企画書作成	■	■																			
フォーラム運営委員会の実施				■		■															
外部講師調整	■	■																			
後援依頼	■	■																			
広報・告知			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
運営について各部署との調整			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
事業パンフレットの作成									●												
原案作成				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
広報との打合せ				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
印刷業者の選定・印刷							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
パンフレット発送									■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
HPの作成									●												
原案作成				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
広報との打合せ				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
地域貢献度調査(ニーズ調査)													●								
委託先の選定				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
調査内容の検討									■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
地域志向活動推進のためのFD/SD 研修会の実施																				●	
企画書作成													■	■	■	■	■	■	■	■	■
研修内容打合せ													■	■	■	■	■	■	■	■	■
教職員案内													■	■	■	■	■	■	■	■	■
外部講師日程調整													■	■	■	■	■	■	■	■	■
事務処理、謝金等準備														■	■	■	■	■	■	■	■
事業検討・評価委員会の開催																					●
日程の調整										■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
議事次第の作成										■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
案内状作成・送付														■	■	■	■	■	■	■	■
評価委員の調整														■	■	■	■	■	■	■	■
年次成果報告書の発行																					●
原案作成													■	■	■	■	■	■	■	■	■
報告書とりまとめ																			■	■	■
印刷業者の選定・印刷																				■	■

作業内容	9月			10月			11月			12月			1月			2月			3月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
<b>【全体】</b>																					
先進事例 視察																					
訪問大学の選定																					
訪問大学との日程調整																					
メンバーの選定																					
アクティブラーニング設備の充実																					
管理部打合せ																					
設備計画の作成																					
<b>【教育】</b>																					
正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行																					
科目の選定																					
教員との打合せ																					
「大分チャレンジアワード」試行																					
運営体制の確立																					
<b>【研究】</b>																					
地域研究シーズとニーズ調査																					
調査方法																					
地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択																					
公募文章作成																					
教員への案内																					
選定																					
地域プロジェクト研究の実施																					
地域プロジェクト研究の実施																					
報告書作成																					
<b>【社会貢献】</b>																					
未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分案」実施																					
日程の調整・会場の確保																					
講師の調整																					
企画書作成																					
学内手続・原義決裁																					
ポスター作成・印刷																					
案内状作成・送付																					
地域企業向け地域創生人材講座実施																					
日程の調整・会場の確保																					
講師の調整																					
企画書作成																					
学内手続・原義決裁																					
ポスター作成・印刷																					
案内状作成・送付																					

## 5. 平成 26 年度 事業検討・評価委員会

平成 27 年 3 月 23 日 開催



日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）  
平成26年度 事業検討・評価委員会 次第

日 時：平成27年3月23日（月）14：00～16：00

場 所：日本文理大学 情報センター7階 第3会議室

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介

3. 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 事業検討・評価委員会の  
目的及び運営ガイドラインについて 資料1

4. 議事

I. 本学大学COC事業の概要説明 資料2

II. 本年度の事業成果について 資料3

III. 来年度の事業計画について 資料4

5. その他

6. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業  
平成26年度 事業検討・評価委員会

<委員名簿>

平成27年3月23日

○ 外部委員

所 属	職 名	氏 名
大分県 企画振興部	部 長	日高 雅近
大分市 商工農政部	部 長	吉田 茂樹 (代理：参事 村上 博士)
豊後大野市	副市長	赤嶺 謙二
日本財団学生ボランティアセンター	センター長	西尾 雄志
一般財団法人セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代 表	川野 智美
日本政策投資銀行 大分事務所	所 長	武田 浩
大分県中小企業家同友会	代表理事	佐藤 貞一

(敬称略・順不同)

○ 学内委員

所 属	職 名	氏 名
【事業推進代表者】日本文理大学	学 長	平居 孝之
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室／人間力育成センター	室長／ センター長	吉村 充功
日本文理大学 工学部	学部長	安田 幸夫
日本文理大学 経営経済学部	学部長	橋本 堅次郎
日本文理大学 大学院 工学研究科	研究科長	河邊 博康
日本文理大学 産学官民連携推進センター	センター長	後藤 幹雄 (代理：副センター長 池畑 義人)
日本文理大学	大学教育長	島岡 成治 (欠席)
日本文理大学 進路開発センター	センター長	林田 和隆 (代理：経営経済学部 就職委員長 板倉 理友)

<事業担当者>

所 属・役 割	氏 名
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
COC事業特任教員	市田 秀樹

所 属・役 割	氏 名
経営経済学部・准教授	舛田 佳弘
事務局	西野 麻美
事務局	一丸由紀子

## 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業） 事業検討・評価委員会の目的

日本文理大学は、文部科学省 平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業」に採択された（事業名：豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成、事業期間：5 年）。

本大学 COC 事業の趣旨は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決等の取組を進めることである。これにより、大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材（地域創生人材）を育成するとともに、大学のガバナンス改革を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学を形成することを目的としている。

本学の事業では、これまで実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へと発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する。すなわち、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげることを目的としている。

本事業の推進にあたっては、文部科学省の補助事業であること、また、地域の期待に応える社会的使命の大きな事業であるとの観点から、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施と改善を図り、事業最終年度には設定した目標を達成する必要がある。そこで、上記目的を達成するため、外部委員を含めた本「事業検討・評価委員会」を設置し、毎年度末に委員会を開催することで、適切な PDCA サイクルの機能を担保することとする。

### 日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 事業検討・評価委員会 運営ガイドライン

（趣旨）

- 1 このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。）地（知）の拠点整備事業（以下、「COC 事業」という。）の推進にあたり、外部委員を含めた「本学 COC 事業 事業検討・評価委員会（以下「本委員会」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

- 2 本委員会は、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について、定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施の確認と必要に応じた改善指示を行い、もって事業の適切な推進に寄与することを目的とする。



(議事進行)

- 3 本委員会の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

(開催時期)

- 4 本委員会は年間1回の開催とし、開催時期は毎年度末とする。

(委員)

- 5 委員は連携自治体委員、外部民間委員を含むものとし、当初委員は以下のとおりとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

**【外部委員】**

- 大分県 企画振興部 部長      ○大分市 商工農政部 部長      ○豊後大野市 副市長
- 日本財団学生ボランティアセンター センター長      ○日本政策投資銀行 大分事務所 所長
- 一般財団法人セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校 代表
- 大分県中小企業家同友会 代表理事

**【日本文理大学】**

- 学長（事業推進代表者）      ○学長室長／人間力育成センター長（事業推進責任者）
- 工学部長      ○経営経済学部長      ○大学院工学研究科長      ○大学教育長
- 産学官民連携推進センター長      ○進路開発センター長

- 2 事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合や、より適切な検討・評価を行うために必要と認めた場合には、適宜、委員の変更および追加を認めるものとする。

(事務局)

- 6 本委員会の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

(その他)

- 7 このガイドラインに定めるもののほか、本委員会の運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各連携自治体と協議の上、決定する。

地(知)の拠点 平成26年度 事業検討・評価委員会 2015.03.23 14:00-16:00

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY

資料2

## 日本文理大学 地(知)の拠点整備事業 (大学COC事業) 取り組み概要

豊かな心と専門的課題解決力を持つ  
おおい地域創生人材の育成

学長室

地(知)の拠点

## 2 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

地(知)の拠点

## 3 文科省：COC事業とは？

1. 背景＜地域の大学に対する期待＞
  - 地域の課題解決に応える教育研究を行ってほしい。
  - 学生が地域社会に出てから役立つ学びに力を入れてほしい。
  - 大学が組織的に取り組む連携体制に発展させてほしい。

↓

＜大学が地域の課題解決に取り組む意義・効果＞

- 大学が地域の再生・活性化に貢献 → 地方創生の一環
- 大学が地域の課題をより直視 → 教育研究の活性化
- 学生が地域の課題解決に参画 → 学生の実践力育成

地(知)の拠点

## 4 文科省：COC事業とは？

地域のための大学へ  
Center Of Community

教育 研究 社会貢献

＜大学ガバナンス改革＞＜大学の機能別分化＞  
大学全体として地域を志向した教育・研究・社会貢献を推進

地域の教育力を大学に還元  
＜大学と自治体との対話の場＞  
地域課題について意見交換  
地域ニーズに合った教育研究のあり方を  
協議する自治体と大学との関係による  
大学の社会貢献

自治体 自治体 NPO等 地域産業界

A大学 B大学 C大学 D大学

大学の知を地域再生・活性化に活用

事業期間 最大5年

関係省庁 文科省

地(知)の拠点

## 5 文科省：COC事業とは？ ～2つの目的～

地域で教育 (教育 社会貢献)

地域創生人の輩出

地域の課題解決 (教育 研究 社会貢献)

地方創生

地(知)の拠点

## 6 全国の採択校の状況

	申請件数	採択件数	採択率
H25年度	319	52	16.3%
H26年度	237	25	10.5%

7 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

8 育成するのは「地域創生人」!

地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者と課題解決に取り組むことができる人材

この実現に必要な科目を「地域志向科目」としてカリキュラム再編を実施

9 これまでの取組と目指す人材像＝人間力の発展

これまでの取組

建学の精神 産学一致 実践科目の拡充 教職協働 地域での教育

教育理念 人間力の育成 社会・地域貢献

大分に貢献するロボットの提案と開発(PBL) 商店街活性化のための打合せ 里山保全活動地域との交流

人間力能力要素 こころの力 社会人基礎力 職業能力 専門能力

“大分”という恵まれた環境の中で、「人間力と専門能力・職業能力を兼ね備え、地域経済社会の発展のリーダーとなる産業人を育成する」

10 本事業の連携自治体

連携自治体	H22国勢調査人口	高齢化率
大分県	1,196,529	27.6%
大分市	474,094	22.3%
豊後大野市	39,452	38.1%

佐賀関地区の高齢化率は45.2%  
※高齢化率はH24年10月またはH25年10月の数字

11 重点的に取り組む地域(フィールド)

- ◎ 大分市佐賀関地区 ※一部の活動は大学周辺でも実施  
【可能な学習内容】1次体験活動(農林漁業)、環境保全活動・技術開発、地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動)、商店街組合・NPO・商工会との連携による活性化策の実践・職業体験活動、6次化活動、総合型地域スポーツクラブの支援、NPOの経営支援(財務診断等)など
- ◎ 豊後大野市  
【可能な学習内容】1次体験活動(農林業)、集落におけるコミュニティ維持(祭の継承、福祉支援活動)、エコパークの観光資源発掘・環境保全活動、学生カイト育成、学生コミュニティショップの開設、6次化活動、地域での高齢者向け学生IT講習会の実施、高齢社会に対応した支援ロボットの開発など

県内他地域での活動を排除したものではありません

12 本学のCOC事業の目的

- ◎ 地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成・輩出(地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続)
- ◎ 地域課題への取り組みを強力に進めるため、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、地(知)の拠点を實現(地域の実態に即した社会貢献活動、研究プロジェクト活動による地域への還元)

13 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

14 取り組み1ーカリキュラム再編 (学修サイクルの確立)

◎「地域創生人材」育成のための学修サイクルの確立

体験交流活動 → 課題解決に必要な知識の修得 → ステークホルダーとの協働による課題解決型学修

15 取り組み2ーカリキュラム拡張

- ◎ 学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系(副専攻制度)を導入
- ◎ 連携ゼミ活動・プロジェクト研究活動を推進 → 地域課題への取り組みを強化
- ◎ 正課外学習活動も重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設

地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげる

16 正課外活動「大分チャレンジアワード」制度について

◎文部科学省が首都圏で実施する事業の大分版として構築

自然体験活動、運動・スポーツ、ボランティア活動、科学・文化・芸術活動

目標設定 → 活動の継続実施 → アワード獲得

リーダーによる指導・助言、各活動の指導者・コーチ等による指導

4分野全てに取り組み、3ヵ月以上の継続した地域での主体的な活動が必要

地域でのフィールドが多数必要

17 学修サイクルを基にしたカリキュラム体系のイメージ

	工学部	経営経済学部
4年	卒業研究(課題解決型学修) 知識修得科目E	協働型ゼミナールIV(課題解決型学修) 知識修得科目J, K
3年	知識修得科目D	ゼミナールIII(課題解決) 知識修得科目N, R
2年	知識修得科目C, H	知識修得科目M, Q
1年	知識修得科目A, F	知識修得科目L, O
体験交流活動科目	体験交流活動科目A, B	体験交流活動科目E, F

副専攻: 豊後大野市, プロジェクト科目(課題解決), 社会参画実習(課題解決), 大分チャレンジアワード(自然体験活動, ボランティア活動, 運動・スポーツ, 科学・文化・芸術活動)

18 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

19 想定している地域課題と教育研究フィールド【工学部】

県内の少子高齢化が深刻である地域を主な対象に、少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な地域課題の解決を目指す

1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ再生による地域活動の維持・活性化
2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
3. 観光・教育分野に地域自然を積極的に利活用した地域活性化
4. 地域ブランド発掘による交流人口増・産業活性化（6次化）【経と連携】

5年間の事業で取り組みを進行させながら、取り組みを定着させ、事業終了後も取り組み地域の拡充を目指す

20 想定している地域課題と教育研究フィールド【経営経済学部】

県内の少子高齢化が深刻である地域を主な対象に、少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な地域課題の解決を目指す

1. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
2. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
3. 地域課題に取り組むNPO法人の活動・経営支援
4. 地域ブランド発掘による交流人口増・産業活性化（6次化）【工と連携】

5年間の事業で取り組みを進行させながら、取り組みを定着させ、事業終了後も取り組み地域の拡充を目指す

21 地域志向プロジェクト研究の実施

研究

- ◎ 地域志向プロジェクト研究の学内公募，採択
  - ◎ 年度毎に4件公募。
  - ◎ 地域からのニーズ，課題に基づいて分野を設定 → 事前に自治体と調整
  - ◎ 3名以上の教員からなるプロジェクトチーム

22 大学の知を活かした社会貢献・学生による社会貢献活動の実施

- ◎ 学生活動によるボランティア等の社会貢献
- ◎ 地域向けの公開講座及びセミナー開催
  - ◎ 地域創生リーダー制度の構築（履修証明制度）
  - ◎ 未来志向型市民対象講座「大分学・大分祭」
  - ◎ ジオ・エコパーク活用のための地域住民向け講習会／エコパークツアー
  - ◎ 実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座
  - ◎ 地元企業の大分CSRプログラム（大分のニーズに合ったCSRの提案）
  - ◎ 高齢者向け学生IT講習会 等

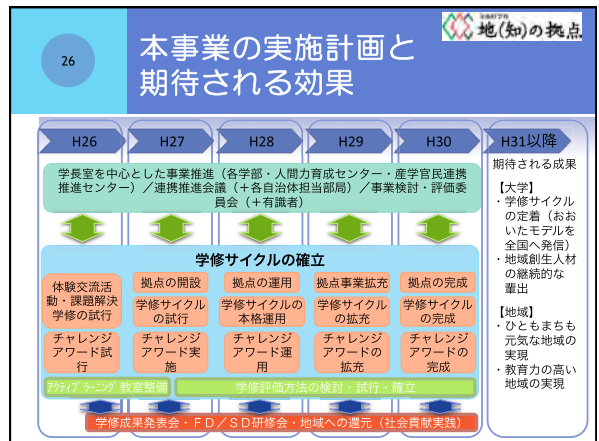
23 説明のポイント

1. 大学COC事業とは？
2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
3. 教育カリキュラムの改革方針
4. 対象とする地域課題
5. 達成目標と年次計画
6. 連携推進方法

24 事業の主な成果目標

課題に対する大学の取組	26年度 (申請時含)	27年度	30年度 (目標値)
地域志向科目数	26科目 (5%)	50科目(10%)	200科目 (40%)
経営経済学部「ゼミナール」で地域実践活動を中心としたゼミ数	(11件17人)	(15%)	50%以上
工学部「卒業研究」で地域の課題解決を扱う研究室	(27件31人)	(25%)	50%以上
「地域づくり」副専攻修了者	—	—	30人
正課外体験学習「大分チャレンジ・アワード」修了者	14人	15人	100人
連携自治体内での就職率	31.6%	32%	35%

25 事業の主な成果目標 <span style="float: right;">研究</span>			
課題に対する大学の取組	26年度 (申請時含)	27年度	30年度 (目標値)
地域との共同研究を行う教員数	8人	4チーム 12人	4チーム 20人
<b>社会貢献</b>			
課題に対する大学の取組	26年度 (申請時含)	27年度	30年度 (目標値)
地域ボランティア活動数(延べ)	675人	700人	800人
地域向け公開講座数	3講座	4講座	7講座
本学が地域貢献していると実感する人数の倍増	(26.8%)	—	(53.6%)



- ### 27 説明のポイント
1. 大学COC事業とは?
  2. 本学が対象とする地域と実施事業の目的
  3. 教育カリキュラムの改革方針
  4. 対象とする地域課題
  5. 達成目標と年次計画
  6. **連携推進方法**

- ### 28 連携推進方法
- ◎ 事業の推進にあたっては、**全体進行を学長室が統括しつつ、連携自治体との調整に努める**
  - ◎ **個別の取り組みについては、担当主任教員を中心に、連携自治体各部署担当者と必要に応じて直接調整**を行いながら取り組みを立案、実施
    - ◎ 具体的な取組計画があるもの
    - ◎ 年次進行に応じて企画を立案するもの
  - ◎ 自治体関係部局との**連携推進会議(半年に1回)**
  - ◎ 外部委員を含めた**検討・評価委員会(各年度末)**

### 29 連携部局【大分県】

担当部局	連携取組内容
◎企画振興部 政策企画課	本学との連携・調整窓口
企画振興部 観光・地域局 集落応援室	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁 体育保健課	総合型地域スポーツクラブ支援活動
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	地域ブランド発掘による6次化活動
商工労働部 経営金融支援室	学生起業家マインド育成活動
生活環境部 県民生活・男女共同参画課 県民活動支援室	NPO法人との協働・経営支援活動

### 30 連携部局【大分市】【豊後大野市】

大分市 担当部局	連携取組内容
◎企画部 市長室	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀関支所	地域と連携した地域活性化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	健康で活力に満ちた生活支援活動
商工農政部 産業振興課	地域ブランドを活かした6次化活動

豊後大野市 担当部局	連携取組内容
◎総務課	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	集落維持・活性化活動
商工観光課	エコパーク認定推進活動(学生グリーンツーリズム活動)(商店街活性化)

# NBUは大分の地(知)の拠点へ!



想いを一つに!

## トマト収穫に向けた プラットフォームの設計と開発

日本文理大学  
工学部 機械電気工学科 武村研究室

### 研究背景

#### 農業就業者の現状

図1: 日本の農業就業者人口  
参考資料: 総務省統計局

- ・農業就業者減少  
平成2年 481万9千人 → 平成24年 251万4千人
- ・後継者不足
- ・生産者高齢化
- ↓
- ・生産効率低下
- ・出荷量減少

### 研究背景

#### 農業用ロボット

○イチゴ収穫ロボット

- ・自律型
- ・レール走行

参考資料: 農業・食品産業技術総合開発機構  
生物系特定産業技術研究センター

○キュウリ収穫ロボット

- ・自律型
- ・フリー走行

参考資料: 岡山大学 農学部  
生物生産システム工学科

### 研究背景

「おおいた農山漁村活性化戦略 2005」における目標指標

目標指標名	H21(基準年)	H22実績	H23実績(見込)	H27目標
トマトの産出額(百万円/年)	2,370	3,224	—	3,000
白ねぎの産出額(百万円/年)	3,406	3,901	—	4,500
いちごの産出額(百万円/年)	2,280	2,327	—	2,400
こねぎの産出額(百万円/年)	2,376	2,703	—	3,500
にらの産出額(百万円/年)	1,041	1,279	—	1,400
ピーマンの産出額(百万円/年)	1,141	1,450	—	1,600
かぼすの産出額(百万円/年)	1,107	992	—	1,200
なしの産出額(百万円/年)	2,614	2,775	—	2,800
ハウスみかんの産出額(百万円/年)	2,899	2,617	—	3,000
トルコギキョウの産出額(百万円/年)	465	431	—	500
パセリの産出額(百万円/年)	1,057	935	—	1,100
キタの産出額(百万円/年)	1,558	1,764	—	2,000
茶の産出額(百万円/年)	794	826	—	1,200

### 目的

トマト収穫ロボットの開発

↓

・収穫果実の状態  
・収穫効率

### トマト収穫ロボットの設計指針


- 走行部
  - ・コントローラ操作
  - ・レール走行
  - ・モータ駆動
- マニピュレータ部
  - ・コントローラ操作
  - ・エアシリンダ駆動
  - ・採果鉞による収穫

参考資料: 響灘菜園



### 走行部の設計

3D-CADによる設計

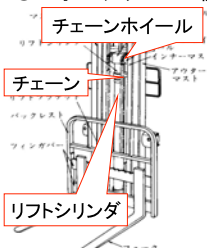


- 仕様
  - WDH: 700×800×563[mm]
  - 質量: 12.6[kg]
- 特徴
  - ・モータ駆動
  - ・脱輪防止フランジ
  - ・アーム及び
  - 機材搭載用天板2段

(九州工業大学提供資料参考)

### マニピュレータ部の設計

○フォークリフトの機構導入



- フォークリフトのリフト機構
  - チェーン片端: フィンガー固定
  - チェーン他端: ボディー下部固定
  - シリンダ上下駆動でフィンガー上下駆動 (例)

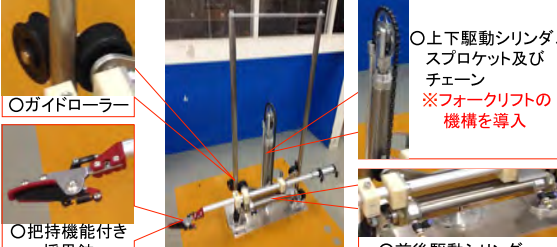
リフトシリンダ: 500[mm]上昇

↓

フィンガー: 1000[mm]上昇


2倍の距離駆動

### 機体説明(マニピュレータ部)

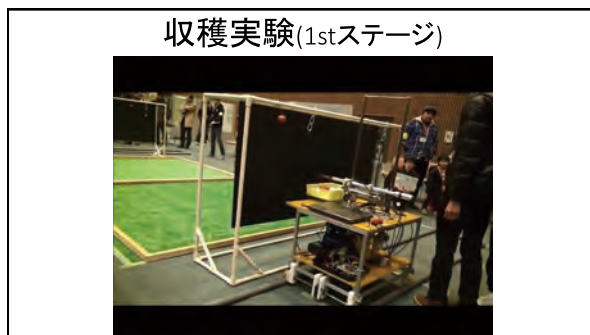
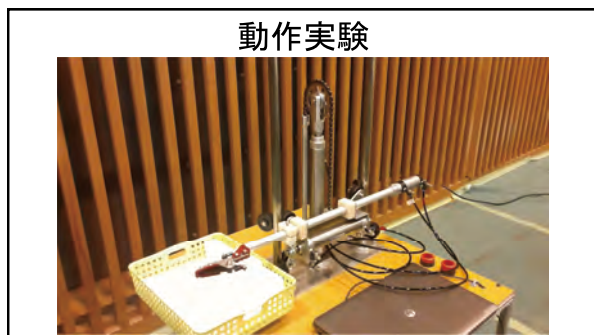


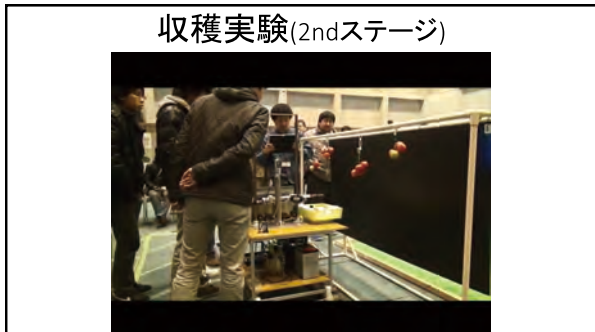
- ガイドローラー
- 把持機能付き採果鉤
- 前後駆動シリンダー
- 上下駆動シリンダ、スプロケット及びチェーン
- ※フォークリフトの機構を導入

### NBU-ATH-ver.0



- 仕様
  - ・WDH: 770×760×1383[mm]
  - ・質量: 42.3[kg]
  - ・マニピュレータ駆動域
    - 上下: 500[mm]
    - 前後: 150[mm]
- 搭載機材
  - ・エアコンプレッサ
  - ・バッテリー(DC12[V]・DC24[V])
  - ・ノートPC

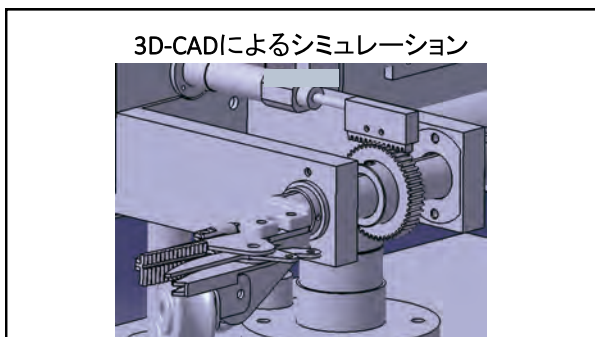
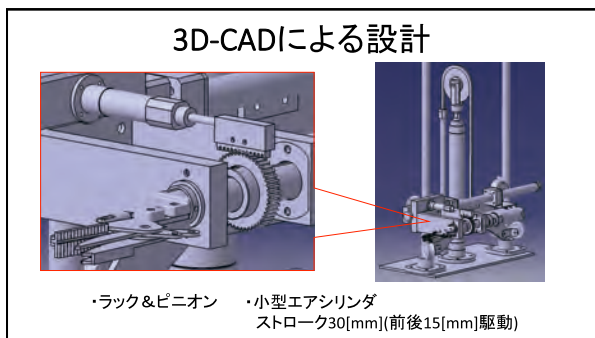




実験結果

	1stステージ (10分間・上限4個)	2ndステージ (10分間・上限10個)	Finalステージ (10分間・上限10個)
収穫したトマトの個数	4個	5個	8個
指定色以外のトマト	無	無	無
トマトの傷	無	無	無
収穫後の茎の傷	無	無	無
平均収穫時間(1個)	22.5[s]	120[s]	75[s]

※人間の平均収穫時間(1個):約5.0[s] → 収穫効率は人間には至らず



まとめ

- トマト収穫ロボットの設計・開発
- トマト収穫実験
  - ・収穫果実の状態
  - ・品質的には問題無し
  - ・収穫効率
- トマト収穫ロボットの改良
  - ・回転機構の設計
  - ・システム簡略化(シーケンス制御)
- 人間の収穫効率には至らず

今後の展望

- トマト収穫ロボットの改良
  - ・回転機構の導入
- 自律化へ向けた取り組み
  - ・カメラの搭載(副島)
  - ・システムの再設計

本年度の事業成果について

A:順調に進んでいる、B:やや順調に進んでいる、C:おおよそ進んでいる、D:遅れている、※密接

資料3

		計画			実施結果			
時期	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	H27年度接続(項目番号)	参考資料
①	9～3月 教育 時間割における「実践型教育実施枠」の確保、地域づくり副専攻の開設	時間割において科目を設定しない時間帯である「実践型教育実施枠」を設定し、地域での実践活動をまとめた時間で実施できるように時間割編成を変更する。また、地域創生に必要なジェネリックスキル(汎用的能力)を育成するための教育カリキュラム改革として、「地域づくり副専攻制度」を全学で導入する。	時間割において「実践型教育実施枠」を設定すること、時間的な制約が緩和され、地域での実践活動を行うことが容易になる。また、「地域づくり副専攻制度」の導入により、学部によらず、地域が誇るべき資源を理解する能力を習得すると同時に、地域住民や関係者により良い地域社会を主体的につくるために必要なジェネリックスキルを持つた人材を輩出できる体制が構築できる。	1年生は月曜・木曜の4・5限、2年生は木曜4・5限を「実践型教育実施枠」として設定し、通常科目を入れないよう配慮した。この枠を利用して地域企業の見学・取材や正課外活動を実施した。	A			
②	9～3月 正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行	学修サイクルを確立するための試行として、正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」を大分市佐賀関地区、豊後大野市のそれぞれにおいて実施し、H27年度の学修サイクル試行へ向けた取り組み改善に反映する。	正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」を大分市佐賀関地区、豊後大野市のそれぞれにおいて実施し、H27年度の学修サイクル試行へ向けた取り組み改善に反映することができる。	ゼミ活動における「課題解決型学修」、地域を題材とした卒業研究を複数実施した。1年次における体験交流活動を建築学科「プロジェクト」で実施した(佐賀関、豊後大野)。	A	②	新聞記事(学修サイクル)	
③	9～3月 大分をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に取り組む、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を試行する。	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に取り組む、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を試行する。	大分チャレンジアワードの導入により、学生個人に対応した地域活動プログラムを確立することができると期待される。	大分チャレンジアワード制度を創設し、実際に学生が正課外活動として実践した。	A	③	新聞記事	
	(大分市佐賀関地区での活動:②③共通)							
	1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動			地域交流イベント「菜・菜マルシェ」の開催(毎月第4土曜日・旧佐賀関町役場)				
	・商店街での地域活性化活動の実践				12/20,27に正課外活動「四季の森プロジェクト」の一環で実施(しめ縄づくり、もちつき等)。			
	・NPOの経営支援			NPO法人さのせき・彩彩カフェとの共同	毎回、建築学科・経営経済学科の学生5名程度が地域住民とともに運営。毎回50名程度の住民・子ども達が参加。			
	・さのせきローカルデザイン会議の拡充及び定期的な実施(学生と地域の意見交換)			上記のマルシェ実施のための定期的な会議を実施。	経営経済学科のゼミ活動として活動支援、経営分析を試行。 拡大会議としてH27年2月14日に佐賀関公民館でワークショップを実施。			
	(豊後大野市での活動:②③共通)				27名の学生が運営スタッフとして参加。46名の子どもが体験。			ケーブルテレビ報道
	・1次体験活動(林業)、集落におけるコミュニティ維持活動(福祉支援活動)			・大野町中土師地区での活動(ふるさと体験村等) ・大野町での民泊	稲川研究室を中心に実施。水中環境観測としてH27年1月～3月で実施。 H27年2月28日に6名参加。佐賀関公民館事業に学生スタッフとして参加。			ケーブルテレビ報道
	・エコバークに関連した観光資源発掘活動			チャレンジアワードの一環で「ジオツアー」を学生が1泊2日で実施。	豊後大野市全域。			新聞記事
	・学生グリーンツーリズム協会の設立準備			学生拠点の開拓	候補地を施設。未決定			
	(全県)			高齢者の見守り支援技術の開発	修士教育研究の一環で実施。			
				トマト収穫支援ロボットの開発	卒業研究の一環で武村研究室を中心に実施。			新聞記事
				子ども職業体験「お仕事体験ランド」の開催(10月18/19日・本学一木祭)	本学学園祭にて学生・教員で運営。			新聞記事

		計画			実施結果			自己点検 評価	H27年度 接続(項目 番号)	参考資料
研究	時期	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果				
	④	産学官民連携推進センターが中心となり、地域研究のシーズとニーズを調査、整理する	産学官民連携推進センターが中心となり大学シーズを整理するとともに、自治体等と連携して地域課題研究のニーズを調査、整理する。これらの連絡、情報共有体制を整備し、取り組みを進める。	地域課題研究のシーズとニーズを調査、整理すること、自治体との連絡、情報共有体制が構築できると同時に、大学シーズと企業・地域とのマッチングを図ることができると期待される。	2月 COC事業担当教員を中心にヒアリングを実施(11名/全教員74名)。	地域志向研究を実施するに当たり、研究課題は存在するが、教員間連携による地域志向型研究を実施する体制づくりが必要であることが分かった。H27年度以降、それを踏まえての教員間連携研究を実施する体制作りを行う。また、H27年度以降も引き続き教員ヒアリングを実施し、学内シーズ、ニーズの調査を行う。	B			
	⑤	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題研究ニーズに基づき、地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。	実施せず。		D	④		
	⑥	地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができる。大学の知を還元することができる。	実施せず。		D	⑤		
	⑦	未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分学」の開催	未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分学」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の市民対象公開講座「大分県・大分学」を実施すること、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	・「わかもの大分がく」を開催。 日時:11月30日(日)13時~16時 場所:ホルトホール大分 参加人数:学生26名、市民多数 ・『チャレンジOITA地域創生活動報告会2015 in 豊後大野』を開催。 日時:2月21日(土)13:00~15:40 場所:豊後大野市役所 1F 保健センター 参加人数:70人	・大分の地域で活動する大学生が、本学から5団体、他大学から5団体発表。前半アイスブレイクをしながらの交流をほかり、後半は大学生や高校生、社会人の方が来場され、自分達の活動紹介や情報交換を行いました。 ・基調報告 1件、成果発表 6件、正課外活動報告 1件の全8件の報告を行った。 質疑応答では、地域の中で活動をしていくヒントが得られるようなものもあり、今後の発展が期待される。	A	⑦⑮	チラシ	
	⑧	地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材講座を開催し、本取組における大学シーズ及び人材育成機会を広く公表・普及するとともに、地域企業等との意見交換を行う場とする。	地域企業向け地域創生人材講座を実施すること、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	地域企業向け「地域創生人材」育成講座を開催(1月7日、14日、21日、28日、2月4日の計5回、ホルトホール大分 2Fセミナールーム) 参加人数:約40人 フォローアップ講座として、「チャレンジOITA地域創生人材講座2015 in 佐賀関」を開催。 日時:2月14日(土)13:00~16:00 場所:佐賀関公民館2階研修室1・2 参加人数:44名	地区の活性化を考えるワークショップでは、時間は短いながら、学生と地域商店街の店主等が佐賀関地区の特徴を活かした地区の活性化プランが発表された。今後、このような場を継続して設けることで、地域住民と共に地区の活性化についで取り組んでいく。	A	⑧	チラシ	
					大分県「地域おこし協力隊」会合におけるアドバイザー	H26年12月に実施された大分県内で活動する「地域おこし協力隊員」の会合に高見助教がアドバイザーとして参加。				
					佐賀関公民館「環境を考える集い」での水中観測ロボットの開発講座	H27年1月30日実施、稲川准教授。			新聞報道	
					佐賀関での水中観測ロボットの観測実施(クロメ)	稲川研究室で開発中の水中観測ロボットを地域からの要望に基づき、クロメの水中観測を実施。			ケーブルテレビ報道	
					木佐上小学校での水中観測ロボットの講演	H27年3月11日に実施。稲川准教授。小学校の閉校記念に地域の魅力を誇りに持ってもらうために実施。児童13名。				
					ものづくり大分産学交流会	市民社会での新しいものづくりについて、参加企業と本学教員の間で意見交換を行い、新たな展開に向けて今後協力を行っていくためのきっかけ作りを行った。				

社会貢献

		計画				実施結果			
時期	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	H27年度接続(項目番号)	参考資料	
⑨	9～3月 学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置、事業推進(統括)が実施される。各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、H27年度実施の地域志向科目内容の地域志向科目内容の体制整理を確認)	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室の活動を本格化する。学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置し、各取り組みが実効性を持つよう組織化する。これらの活動においては、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、H27年度実施の地域志向科目内容の体制整理を確認)	学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置、組織化することで、事業を適切に統括し、円滑に推進することができる。	毎週火曜日に事業推進ワーキンググループ(WG)を開催(期間中計19回)。		A	⑨	議事録	
⑩	10月 事務補佐職員1名の採用	事務補佐職員1名を雇用し、本事業において発生する事務作業の効率化を図る。	地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	H26年10月に1名採用。		A	⑩		
⑪	10月 地域志向活動推進のためのアクティブラーニング設備の充実	地域志向活動推進のために必要なアクティブラーニング設備(グループ学習用デスク・椅子セット、プロジェクトシート、電子黒板等)の導入を図る。	地域志向活動推進のために必要なアクティブラーニング設備の導入を図ることで、地域を題材にしたグループワークやプロジェクトセッション、双方向授業等の導入促進、活発化につながり、全学的な地域志向活動を効果的に推進することができる。	H27年2月にプロジェクトシートを1教室、電子黒板を1教室に導入した。	3月末の地域活動(佐賀県)に向けてグループディスカッション等を実施予定。	A			
⑫	10月 特任教員(地域コーディネータ)1名の採用	自治体、地域住民、地域企業等の本事業におけるスティーブホルダーと密接な連携を取り、活動を効果的に推進するための特任教員(地域コーディネータ)を雇用する。	特任教員(地域コーディネータ)1名を雇用することで、自治体、地域住民、地域企業等の本事業におけるスティーブホルダーと密接な連携を取ることができるようになり、本事業を円滑に推進することができる。	H27年1月に1名採用。	当初10月着任を目指したが、採用選考時期、前任校との関係から着任時期が若干遅くなった。着任後は精力的に学内外との調整を行っている。	B			
⑬	10月 連携推進会議の開催	本学幹部教員と連携自治体の担当部長等からなる連携推進会議を開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることと、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。	H26年10月30日実施。	連携自治体職員19名参加。	A	⑫	新聞記事	
⑭	11月 事業パンフレット・ホームページの制作・公表、シンポジウムの開催	事業パンフレット・ホームページを制作・公表し、広く県民、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信する。また、本事業のキックオフとなるシンポジウムを開催し、県民やステークホルダーに本事業の目的や意義について発信する。	事業パンフレット・ホームページを制作・公表することと、キックオフとなるシンポジウムを開催することで、広く県民、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解を得ることができると期待している。	リーフレット:H26年10月発行。 ホームページ:H27年3月末公開予定。 シンポジウム:H26年11月11日実施	シンポジウム参加者:189名。 事業専用ホームページの公開が年度末となったため、広く情報発信をすところまで至らなかった。	B	⑨⑭		
⑮	12月 本学の地域貢献度や地域ニーズ、課題を把握するための県民アンケート調査の実施	本学の地域貢献度や地域ニーズ、課題を把握するための県民アンケート調査を実施し、現状を明らかにするとともに、H27年度の取り組みに向けた事業内容の精査に活用する。	県民アンケート調査を実施することで、本学の地域貢献度や地域ニーズ、課題を把握することができる。現状を明らかにできるとともに、H27年度の取り組みに向けた事業内容の精査に活用することができる。	・本学が実施する活動への期待度、地域課題への取り組みや地域で活躍できる人材育成の方向性についてアンケートを実施。 実施期間:3月8日～15日 大分県内:200通 大分市佐賀県地区:200通 豊後大野市:600通 計1000通を配布し、郵送にて回収。 ・大分県中小企業家同友会等を経由して地域企業に対してインターネット等に関するアンケート調査を実施。(H27年2月～3月)	・県民アンケート調査182通。現在集計中。 ・地域企業アンケート40通。	-		集計結果報告書(県民アンケートは途中経過)	
⑯	2～3月 地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会を実施し、地域志向科目・活動の実施方法を学ぶ。	FD/SD研修会を実施することで、地域志向の理解を促進するとともに、地域志向科目・活動の実施方法等について理解を深めることができる。	COC事業講演会(研修会)の開催 テーマ:大分県COC事業における西九州大学の取り組み 講師:西九州大学 副学長 井本 浩之 先生 3月24日 13:30～15:00 日本文理大学 プレゼンテーションルーム(情報センター7階)	明日実施。	-	⑬		
⑰	2～3月 事業検討・評価委員会開催、H26年度の事業成果報告書の発行	事業検討・評価委員会を開催し、H26年度の事業成果を総括、評価するとともに、H27年度に向けた取組内容の妥当性について検討する。また、年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表・普及させる。	事業検討・評価委員会を開催し、H26年度の事業成果を総括、評価するとともに、H27年度に向けた取組内容の妥当性について検討する。また、年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表・普及させることができる。	COC事業検討・評価委員会開催(3月23日 14:00～16:00 日本文理大学 第三会議室(情報センター7階)) 外部参加者:大分県企画振興部長、大分市商工農政部長、豊後大野市副市長、日本財団学生ボランティアセンター長、(一財)セブンイレブ記念財団、日本政策投資銀行大分事務所長、大分県中小企業家同友会代表理事	外部評価委員(自治体3名、民間委員4名)を含む委員会として本日実施。	-	⑯		
全体					地域中小企業との連携促進(インターネットインタビュー、キャリア教育、共同研究)を目指して協定を締結(H27年1月23日)			次年度からの活動に幅がで、地域企業とのマッチングやニーズの掘り起こし、社会貢献活動の促進が期待できる。	

計画				実施結果				
時期	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検 評価	H27年度 接続(項目 番号)	参考資料
	全国「道の駅」連絡会との 体験実習協定締結			国土交通省の取り次ぎにより、H27年3月16日に締結。	道の駅での学生のインターンシップや商品開発 型学修等の促進が期待している。次年度は「原尻 の滝」等での活動を予定。			
	大分県信用組合との連携 協力協定締結			地域中小企業との連携促進(インターンシップ、キャリ ア教育、共同研究、けんしん大学)を目指して協定を 締結予定(H27年3月24日)	次年度からの活動に幅ができ、地域企業との マッチングやニーズの掘り起こし、社会貢献活動 の促進が期待できる。			

計画					
	時期	項目	内容	期待される成果	備考
教育	①	4月	教養基礎科目である「大分学・大分楽」を必修化	今年度より全学部1年生を対象に地域学科目である教養基礎科目「大分学・大分楽」(2単位)を必修化し(受講者数:450名)、地域活動をはじめするための基本的知識を習得させる。	全学部の全1年生が地域学科目「大分学・大分楽」を受講し、具体的な地域の魅力・問題を知ること、地域に関する興味がわき、全学で導入する他の地域志向科目の受講者数の増大を図ることができる。また、学生の授業評価等の反応をもとに、次年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映することができる。
	②	4～3月	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修サイクル体系として試行	学修サイクル体系を確立するための試行として、正課教育における「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動等における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の各取組を大分市佐賀関地区周辺、豊後大野市のそれぞれにおいて実施し、次年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映する。また学生活動の拠点を開設し、学生と地域との交流・情報発信の場とする。	正課教育における「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動等における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を試行することで、学生の地域志向性を高め、地域との連携体制構築の足掛かりができると同時に、「地域創生人材」育成のための次年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映することができる。また、学生活動拠点を学生自身が運営することで、地域住民との関わりが促進され、学生の地域志向性が大幅に高まるとともに、豊かな心と専門的課題解決力の成長につながる。また、学生活動拠点を学生自身が運営することで、地域住民との関わりが促進され、学生の地域志向性が大幅に高まるとともに、豊かな心と専門的課題解決力の成長につながる。
	③	4～3月	大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の本格運用	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に取り組み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を本格運用する。	大分チャレンジアワードの導入により、学生個人々人に対応した地域活動プログラムを確立することができる。
			(大分市佐賀関地区での活動:②③共通)		
			学生地域活動拠点の開設、運営	学生拠点を5月に開き開さば通りに開設予定。	学生と住民の交流の場となり、教育の場と住民との信頼関係構築の場とする。
			前年度試行した1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の本格実施	正課外活動及びゼミ活動を中心に、地域連携するNPO等と実施。	農業体験は調整のついた地域で実施する。環境保全活動は6月頃に幸崎地区で実施予定。
			前年度確立した学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施	学生拠点での定期的な住民との会合を予定。	
			地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動、商店街活動)、地域支援ものづくりの本格実施	学生拠点の活動として実施(複数のゼミが連携して実施)	月1回楽楽マルシェを拡大する位置づけで、常設(学生活動は週2回程度を見込む)。フィールド調査、商店街活動の拠点となり、地域交流が促進できる。
			商店街組合・NPO・商工会との連携による職業体験活動	教養基礎科目の一環で実施。	
			総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行	大分地区の総合型地域スポーツクラブ「OZAI元気クラブ」で試行。ゼミ生が主体となったイベント、月1回の会議への参加、教室指導への参加、NBU関係者による教室の開催を予定。	まずはすでに活動しているスポーツクラブの支援を行うことで、実施体制を構築できる。
(豊後大野市での活動:②③共通)					
学生グリーンツーリズム協会(エコパークの観光資源発信活動)の設立、拠点の開設、運営			9月稼働に向けて協議を進める。		
前年度試行した1次体験活動(農林業)、集落におけるコミュニティ維持活動の本格実施	大野町北部地区、犬飼町大寒地区を中心に授業で展開する(通年)。				
高齢者向け学生IT講習会の実施	ゼミ活動の一環で秋頃に開催予定。				
6次化活動体験、地域でのサービスラーニング体験活動、地域支援ものづくりの本格実施	清川町井崎キャンプ場、道の駅等での活動を予定し、里の旅公社との連携で実施する。	夏場に集中講義形式で実施予定。ゼミ活動は別途通年で展開する。			
課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動	大野町北部地区ふるさと体験村の運営に参画する	夏場のハイシーズンで活動を展開する。			
研究	④	4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活発にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができる。
	⑤	5～3月	地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域へ大学の知を還元することができる。
社会貢献	⑥	9月	ジオ・エコパーク活用のための地域住民向け講習会の実施	地域自然環境を活かしたジオパーク、エコパークを推進していくための自然保存の意識向上、対策のための地域住民向け講習会を実施する。	地域の自然を活かした観光資源であるジオパーク、エコパークの保全・活用にあたって、学内研究シーズを活用し、その成果を公開講座を通じて、地域住民の自然保護活動・意識向上に還元することで、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑦	11～12月	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑧	1～2月	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材に関する講座やワークショップを開催し、本事業における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業等との意見交換を行う場とする。	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、また、地域企業との意見交換を通じて、事業改善につなげることで、地(知)の拠点としての取り組みを促進することができる。





## 6. 地域貢献度・地域ニーズに関する県民アンケート調査

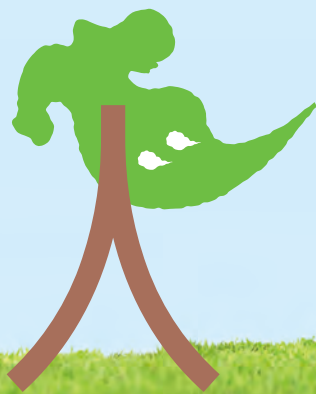
平成 27 年 3 月上旬 実施

大分市佐賀関地区 200 件

豊後大野市 600 件

大分県内地域 200 件

無作為抽出にて配布・郵送にて回収



# 「地（知）の拠点整備事業【大学 COC 事業】 アンケート調査表

問1. これまでに本学の活動を実際に見たり、新聞・テレビ・ホームページなどでの報道をご覧になって、  
本学の地域貢献への取り組みへの感想として、あてはまるものを1つ選び、番号に○を付けてください。

問1-1. 本学の活動をご存じですか。

1. はい	2. いいえ
-------	--------

問1-2. 問1-1で「はい」とお答えおたいた方へ、その活動の取り組みへの感想をお答え下さい。

1. とても貢献している	4. あまり貢献していない
2. やや貢献している	5. 全く貢献していない
3. どちらでもない	

問2. 同封のパンフレットをご覧になって、本学が行っている、または行おうとしている次の分野の活動について、あなたの「本学活動の認知度」、「本学への期待度」をそれぞれあてはまるものを1つ選び、番号に○を付けてください。

活動番号	項目	①認知度			②期待度				
		知っている	聞いたことがある	知らない	期待する	やや期待する	どちらでもない	あまり期待しない	期待しない
1	 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化	1	2	3	1	2	3	4	5
【活動内容】高齢化が進んでいる地区・集落での活動（祭など）へ本学学生が参画します。									
2	 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり	1	2	3	1	2	3	4	5
【活動内容】人出不足を補う農業・林業支援ロボット、環境観測ロボットの開発と実践を行います。									
3	 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）	1	2	3	1	2	3	4	5
【活動内容】豊後大野市ジオパーク構想・エコパーク構想と連携した自然保護に関わるひとづくりや学生活動による観光振興を図ります。									
4	 地域商店及び商店街の活性化による地域振興	1	2	3	1	2	3	4	5
【活動内容】地域の商店や商店街と連携して、学生活動拠点を設置し、人の流れを呼び戻すための地域振興や商店街の活性化に取り組みます。									

活動番号	項目	①認知度			②期待度				
		知っている	がある聞いたこと	知らない	期待する	やや期待する	ないどちらでも	あまり期待しない	期待しない
5	 健康増進および生活支援によるコミュニティの維持 【活動内容】総合型地域スポーツクラブの活動支援や高齢者の生活支援活動を教員と学生が共同して行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5
6	 NPO法人の活動経営支援 【活動内容】地域で活躍するNPO（社会貢献活動等を行う市民団体等）との協働活動と財務改善の提案をしています。	1	2	3	1	2	3	4	5
7	 地域ブランドの発掘による交流人口の増加産業の活性化（6次化） 【活動内容】地域の特産品の発掘をおこない、それをブランド化し流通させることで、地域の活性を推進していきます。	1	2	3	1	2	3	4	5

問3. 本学の地域での活動（教育・研究・社会貢献）に対して協力してみたいですか。あてはまるものを次の中から1つ選び、番号に○を付けてください。

1. 協力したい	4. どちらかというとなら協力したくない
2. どちらかといえば協力したい	5. 協力したくない
3. どちらでもない	

問4. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。あてはまるものをいくつでも選び○を付けてください。また、その中で本学に特に取り組んで欲しい（改善してほしい）課題を3つまで選び、○を付けてください。

番号	項目	地域課題・問題点 (○はいくつでも)	特に取り組んで欲しい課題 (○は3つまで)
1	近所づきあいの希薄化	1	1
2	地域内で互いに支える環境作り（地域力の向上）	2	2
3	地域活動・支援を担う人材の養成・確保	3	3
4	身近な生活相談支援体制の充実	4	4
5	地域活動に関する情報提供の充実	5	5
6	地域ぐるみの防災体制の強化	6	6
7	地域内での雇用数の不足	7	7
8	若者が身近にいない	8	8
9	公共交通が不便	9	9
10	買い物の場所が無い	10	10
11	地域の課題を特に感じていない	11	11
12	その他（ ）	12	12

問5. お住まいの地域の中で今後活躍して欲しい人材として当てはまるものを、以下のうちから2つまで選び○を付けてください。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 向上心をもって、どんなことにも挑戦し続けられる人材</li><li>2. 高度な専門性・知識を活用できる人材</li><li>3. お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材</li><li>4. 価値観を共有することができ、高い倫理観を持った人材</li><li>5. 主体的に考え行動できる人材</li><li>6. 地域に定住してくれる若い人材</li><li>7. 地域住民と率先して関わる人材</li><li>8. 地域に愛着を持ってくれる人材</li><li>9. その他 ( )</li></ol> |
|--|

問6. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものを3つまで選び、番号に○を付けてください。

- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 校風や雰囲気が良い</li><li>2. 就職に有利である</li><li>3. 教育方針・カリキュラムが魅力的である</li><li>4. 研究面で優れている</li><li>5. 学生の面倒見が良い</li><li>6. 国際的なセンスが身につく</li><li>7. 社会で必要な実践力が身につく</li></ol> | <ol style="list-style-type: none"><li>8. 人間力教育に力を入れている</li><li>9. 地域への貢献が大きい</li><li>10. スポーツ活動が活発</li><li>11. 学生が元気</li><li>12. 親しみやすい</li><li>13. その他 ( )</li></ol> |
|--|---|

問7. 本学の教育・研究・社会貢献活動について、取り組んで欲しいこと、ご要望、ご意見がありましたら、ご自由にお書き下さい。(自由回答)

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>
---

<<最後にあなたのことについてお尋ねいたします。あてはまる番号に○をつけてください。>>

問1. あなたの性別は

1. 男性	2. 女性
-------	-------

問2. あなたの年齢は

1. 20歳未満	3. 30～39歳	5. 50～59歳	7. 70～79歳
2. 20～29歳	4. 40～49歳	6. 60～69歳	8. 80歳以上

問3. あなたの職種は

1. 会社員（経営者・役員）	6. パート・アルバイト
2. 会社員（一般従業者）	7. 家事従事者
3. 公務員	8. 学生
4. 農林水産業	9. 無職
5. 自営業	10. その他（                      ）

問4. あなたがお住まいの地区はどちらですか。大分市在住の方は、地区までお答え下さい。

1. 大分市	3. 別府市	5. 日田市	7. それ以外の大分県内
2. 豊後大野市	4. 中津市	6. 佐伯市	（                      ・町・村）

▶（                      ）地区

問5. 今のお住まいの地区には、何年お住まいになりますか。

1. 5年未満	3. 10～20年未満	5. 30年以上
2. 5～10年未満	4. 20～30年未満	

# 「地（知）」の拠点整備事業【大学COC事業】アンケート調査（集計速報値）

(数値 上段:%,下段:件数)

問1-1.活動の認知

サンプル数	はい	いいえ	無回答
100.0 168	29.8 50	67.9 114	2.4 4

問1-2.活動の取り組みへの感想

サンプル数	とても貢献している	やや貢献している	どちらでもない	あまり貢献していない	全く貢献していない	無回答
100.0 50	40.0 20	50.0 25	6.0 3	- -	- -	4.0 2

問2.①活動の認知度

	サンプル数	知っている	聞いたことがある	知らない	無回答
1.小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化	100.0 168	16.1 27	25.0 42	56.5 95	2.4 4
2.人口減少社会を支えるための先進的なものづくり	100.0 168	15.5 26	16.1 27	63.7 107	4.8 8
3.自然の積極的な活用による保全と地域活性化(観光・教育)	100.0 168	17.9 30	21.4 36	56.5 95	4.2 7
4.地域商店及び商店街の活性化による地域振興	100.0 168	12.5 21	18.5 31	64.9 109	4.2 7
5.健康増進および生活支援によるコミュニティの維持	100.0 168	8.9 15	18.5 31	67.9 114	4.8 8
6.NPO法人の活動経営支援	100.0 168	8.9 15	19.0 32	66.7 112	5.4 9
7.地域ブランドの発掘による交流人口の増加産業の活性化(6次化)	100.0 168	7.1 12	18.5 31	68.5 115	6.0 10

問2.②活動への期待度

	サンプル数	期待する	やや期待する	どちらでもない	あまり期待しない	期待しない	無回答
1.小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化	100.0 168	55.4 93	24.4 41	6.5 11	5.4 9	1.2 2	7.1 12
2.人口減少社会を支えるための先進的なものづくり	100.0 168	56.5 95	20.8 35	8.9 15	3.0 5	3.0 5	7.7 13
3.自然の積極的な活用による保全と地域活性化(観光・教育)	100.0 168	54.2 91	23.8 40	8.9 15	2.4 4	3.0 5	7.7 13
4.地域商店及び商店街の活性化による地域振興	100.0 168	48.8 82	24.4 41	7.7 13	7.1 12	3.6 6	8.3 14
5.健康増進および生活支援によるコミュニティの維持	100.0 168	47.6 80	23.8 40	13.1 22	3.6 6	2.4 4	9.5 16
6.NPO法人の活動経営支援	100.0 168	43.5 73	23.8 40	14.3 24	5.4 9	3.0 5	10.1 17
7.地域ブランドの発掘による交流人口の増加産業の活性化(6次化)	100.0 168	50.6 85	20.2 34	11.9 20	4.8 8	3.0 5	9.5 16

問3.地域での活動(教育・研究・社会貢献)に対する協力意向

サンプル数	協力したい	協力しにくい	どちらでもない	どちらかというくらい	協力したくない	無回答	【協力したい】計	【協力しにくい】計
100.0 168	19.0 32	36.3 61	29.2 49	6.5 11	3.6 6	5.4 9	55.3	10.1

問4.地域課題や生活上の問題点

サンプル数	感じていないを特に	地域課題を特に	無回答	その他	買い物場の充実が無	情報提供の充実が無	地域活動に関する	公共交通が不便	身近な生活相談支	地域内の雇用数	薄所づきあいの希	近所づきあいの防	地域の強化	若者が身近にいな	環境作り(地)	地域内での支	担う人材の養成・支
100.0 168	0.6 1	1.2 2	3.0 5	33.9 57	35.1 59	36.3 61	37.5 63	38.1 64	42.9 72	48.8 82	57.7 97	59.5 100	67.9 114				

問4.特に取り組んで欲しい地域課題や生活上の問題点

サンプル数	感じていないを特に	地域課題を特に	無回答	その他	買い物場の充実が無	情報提供の充実が無	地域活動に関する	公共交通が不便	身近な生活相談支	地域内の雇用数	薄所づきあいの希	近所づきあいの防	地域の強化	若者が身近にいな	環境作り(地)	地域内での支	担う人材の養成・支
100.0 168	0.6 1	2.4 4	8.9 15	14.3 24	15.5 26	15.5 26	17.3 29	17.3 29	20.2 34	24.4 41	27.4 46	27.4 46	38.1 64	46.4 78			

「地（知）」の拠点整備事業【大学COC事業】アンケート調査（集計速報値）

(数値 上段:%,下段:件数)

168 1 4 15 24 26 26 29 29 34 41 46 64 78

問5.地域の中で今後活躍して欲しい人材

サンプル数	どんな心をもつて挑	向上な活用できる人	識をな専門性・知	高度な専門性・成	力するを尊重し、協	お互いを重し、高	お互いを重し、高	こがで、高	価値観を共有する	できる人材	主体的に考え行動	れる若い人材	地域に定住してく	て関わる人材	地域住民と率先し	てくれる人材	地域に愛着を持っ	その他	無回答
100.0	28.0	9.5	39.3	14.3	12.5	41.1	31.0	26.2	-	1.8									
168	47	16	66	24	21	69	52	44	-	3									

問6.本学のイメージ

サンプル数	い校風や雰囲気	就職に有利である	キュラムが魅力的	教育方針・カリ	る研究面で優れて	い学生の面倒見が	身につく	国際的なセンスが	力が身につく	社会に必要な実践	入れている	人間力教育に力を	き地域への貢献が大	発スポーツ活動が活	学生が元気	親しみやすい	その他	無回答
100.0	13.7	6.5	8.3	8.3	4.2	10.1	14.9	23.2	29.2	59.5	13.7	10.1	3.0	11.3				
168	23	11	14	14	7	17	25	39	49	100	23	17	5	19				

F1.性別

サンプル数	男性	女性	無回答
100.0	61.3	31.0	7.7
168	103	52	13

F2.年齢

サンプル数	20歳未満	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳	29歳	30歳以上	無回答
100.0	-	0.6	3.6	6.0	16.7	28.6	25.0	11.9	7.7				
168	-	1	6	10	28	48	42	20	13				

F3.職種

サンプル数	役員（経営者・	会社員（一般従	公務員	農林水産業	自営業	パート・アルバイト	家事従事者	学生	無職	その他	無回答
100.0	8.9	13.1	7.1	4.8	10.7	8.3	6.0	-	31.0	0.6	9.5
168	15	22	12	8	18	14	10	-	52	1	16

F4.居住地区

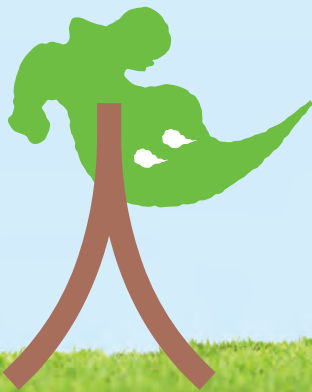
サンプル数	大分市	豊後大野市	別府市	中津市	日田市	佐伯市	内それ以外の大分県	無回答
100.0	26.2	46.4	4.8	1.8	1.8	1.2	10.1	7.7
168	44	78	8	3	3	2	17	13

F5.居住年数

サンプル数	5年未満	5年	10年	10年	20年	30年以上	無回答
100.0	4.2	3.6	10.1	13.7	60.7	7.7	
168	7	6	17	23	102	13	

## 7. インターンシップ及び人材育成に関するアンケート調査

平成 27 年 3 月上旬 実施





# 日本文理大学「地(知)の拠点整備事業【大学 COC 事業】」 インターンシップに関するアンケート調査

問1. 会社名をご記入下さい。(本調査に関しましては、記名式でお願いしています。)

--

問2. 業種をお答え下さい。

1. 農林漁業	5. 小売業	9. 不動産業	13. 公務
2. 製造業	6. 金融業	10. 飲食・宿泊業	14. その他サービス業
3. 建設業	7. 情報通信業	11. 教育・学習支援業	15. その他
4. 卸売業	8. 運輸業	12. 医療・福祉	( )

問3. これまでに大学生のインターンシップ受入(本学に限りません)を実施されたことは、ありますか。

1. はい	2. いいえ
-------	--------

問4. 問3で「はい」と回答された場合、お答え下さい。  
これまでのインターンシップ受入に対する満足度はいかがでしたか。

1. 非常に満足	4. どちらかといえば不満
2. どちらかといえば満足	5. 非常に不満
3. どちらでもない	

<<今後のインターンシップ受入に関してお尋ねいたします>>

問5. 今後、大学生のインターンシップの受入を考えていますか。

1. 実施中または予定である	3. 実施予定はない
2. 実施を検討している	4. 未定

問5で「1. 実施中または予定である」、「2. 実施を検討している」を選択された方は以下の問(問6～問10)にお答え下さい。それ以外の方は、問11. へお進み下さい。

問6. インターンシップ受入可能期間をお答え下さい(複数選択可)。

1. 1日	4. 2週間程度
2. 2～3日	5. 1ヵ月程度
3. 1週間程度	6. その他( )

問7. インターンシップ受入可能時期をお答え下さい。  
(例:7月、夏休み期間、8月及び3月 など)

--

問8. インターンシップ受入時の就業タイプをお答え下さい(複数選択可)。

1. 見学・体験タイプ(実際の職場で業務について説明を受け、仕事を少しだけ体験できる。)
2. 講義タイプ(業界・企業・仕事についての講義の中で、その企業の事業内容を理解し、「働く」ことについて学ぶ。)
3. プロジェクトタイプ(学生でチームを組み、その企業の事業にかかわる課題に取り組む。)
4. 実践タイプ(各部署に配属され、社員の一人として業務を任される。)

問9. インターンシップ受入可能な学年について、すべて○を付けて下さい。

- |        |        |
|--------|--------|
| 1. 1年生 | 3. 3年生 |
| 2. 2年生 | 4. 4年生 |

問10. インターンシップ受入に対して、条件や本学へのご要望がありましたらご記入ください。

問11. 今後期待する若い人材としてあてはまるものを、以下のうちから2つまで選び、番号に○を付けてください。

- |                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 向上心をもって、どんなことにも挑戦し続けられる人材      |
| 2. 高度な専門性・知識を活用できる人材              |
| 3. お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材 |
| 4. 価値観を共有することができ、高い倫理観を持った人材      |
| 5. 主体的に考え行動できる人材                  |
| 6. 進んで報告・連絡・相談し、情報を他者と共有できる人材     |
| 7. 団体の規範やルールを守ることができる人材           |
| 8. 自己の成長のために学び続ける姿勢が身についている人材     |
| 9. その他 ( )                        |

問12. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものを3つまで選び、番号に○を付けてください。

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 校風や雰囲気が良い          | 7. 社会に必要な実践力が身につく |
| 2. 就職に有利である           | 8. 人間力教育に力を入れている  |
| 3. 教育方針・カリキュラムが魅力的である | 9. 地域への貢献が大きい     |
| 4. 研究面で優れている          | 10. スポーツ活動が活発     |
| 5. 学生の面倒見が良い          | 11. 学生が元気         |
| 6. 国際的なセンスが身につく       | 12. 親しみやすい        |
| 13. その他 ( )           |                   |

問13. インターシップ以外で、本学の教育・研究・社会貢献として取り組んでもらいたいこと、その他本学に対するご意見、ご提案がありましたら、ご自由にお答え下さい。(自由回答)

**調査票のご記入、ありがとうございました。**

本調査票は、本学のインターンシップ教育の充実、大学COC事業の推進のみに使用し、会社名を公表することはありません。

**【提出方法】**

**FAX 097-524-2663 または E-mail coc@nbu.ac.jp**

**【提出締切】2015年3月13日(金)までをお願いします。**

日本文理大学「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】」  
インターンシップに関するアンケート調査 報告書

1. 調査目的

本学大学COC事業の推進にあたっては、自治体(大分県、大分市、豊後大野市)との連携のみならず、地域経済を支える中小企業各社との連携が今後ますます不可欠となる。そこで、大分県中小企業家同友会のご協力を得て、会員各社にインターンシップ及び人材育成に関する会員アンケートを実施し、今後の教育改善・実施に活かすことを目的とした。

また、本学・(一社)大分県工業連合会・大分県の主催で行われた「平成26年度 第3回ものづくり大分産学交流会」会場においても、参加企業等に対して同様のアンケートを実施した。

2. 調査期間

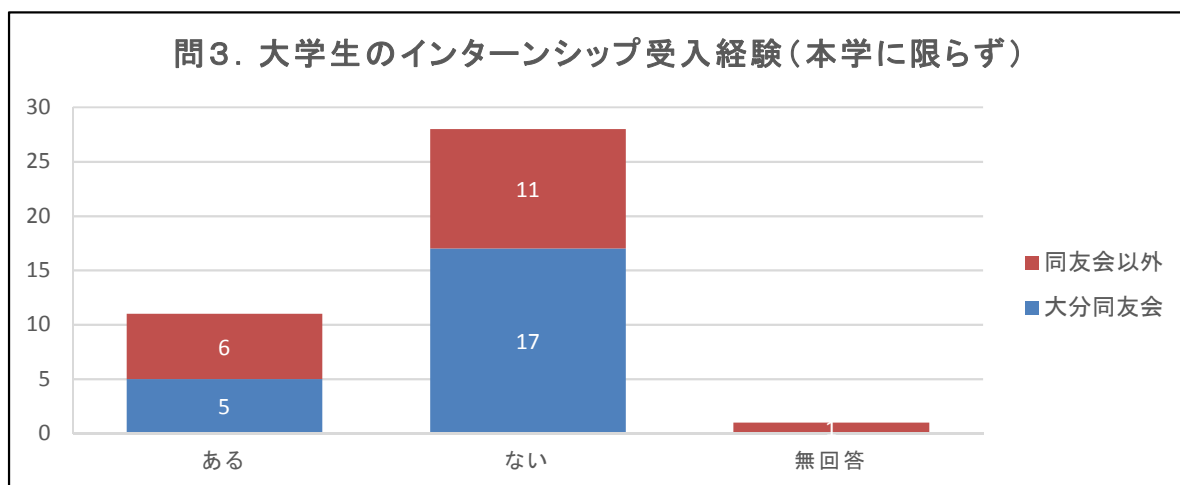
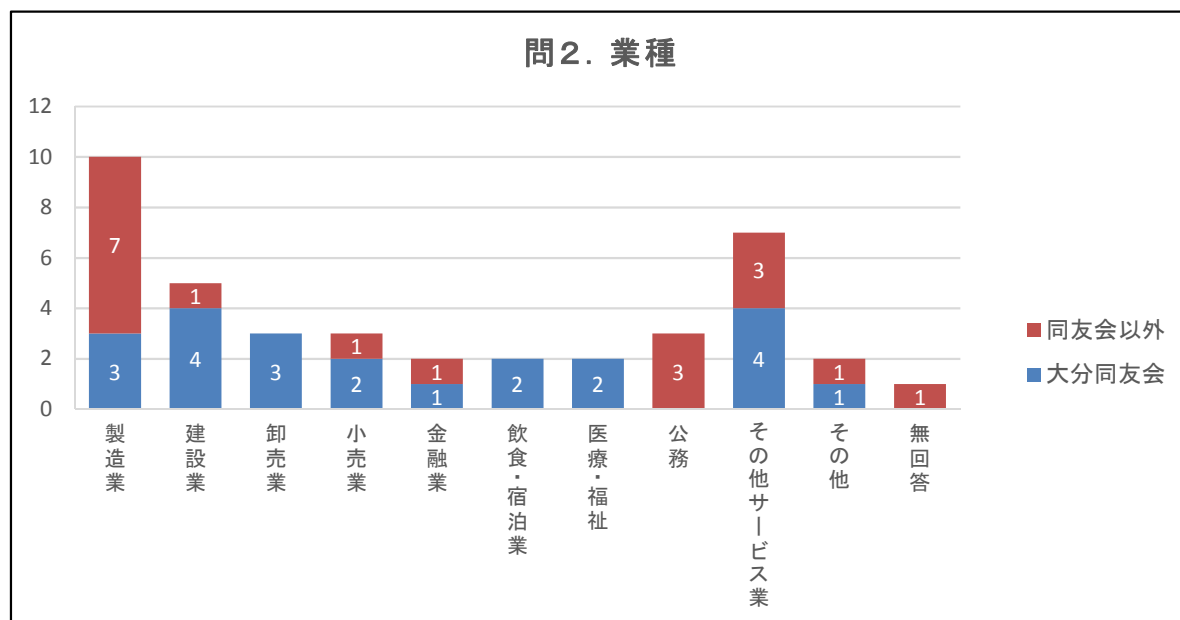
- 大分県中小企業家同友会会員：2015年2月19日(木)～2015年3月13日(金)
- 平成26年度 第3回ものづくり大分産学交流会 参加者：2015年3月17日(火)

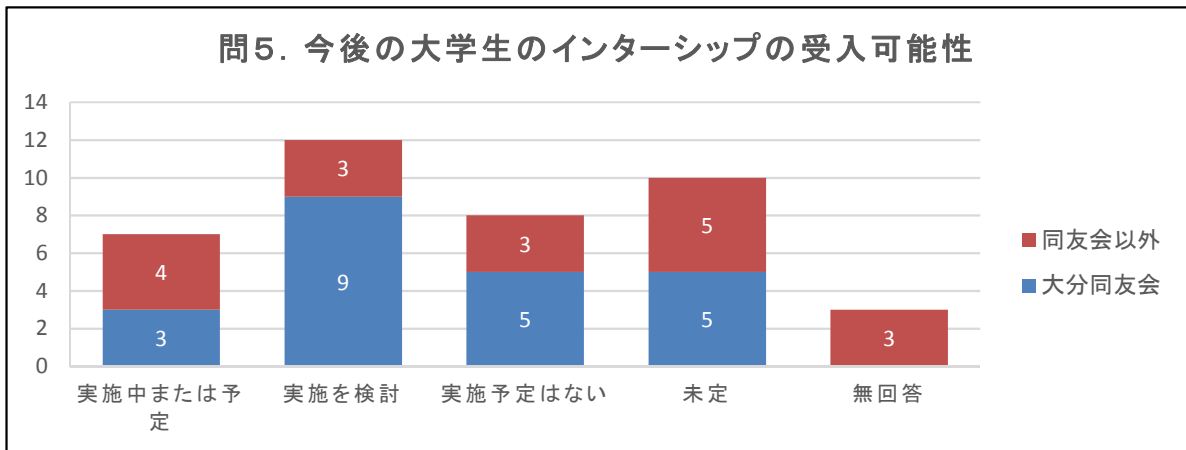
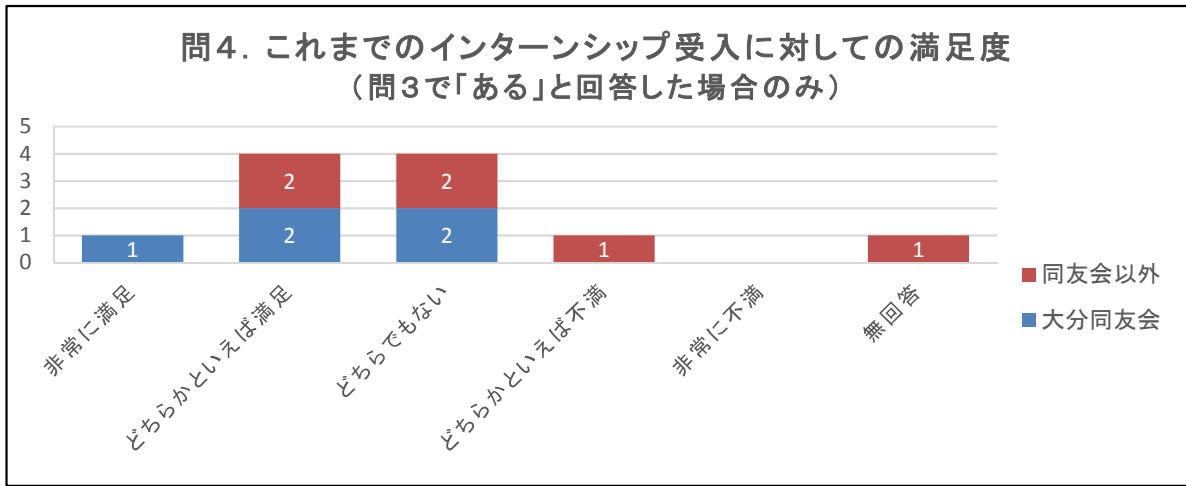
3. 回収数・回答率

- 大分県中小企業家同友会会員：22社／540社(4.1%)
- 平成26年度 第3回ものづくり大分産学交流会 参加者：18社      **合計40社**

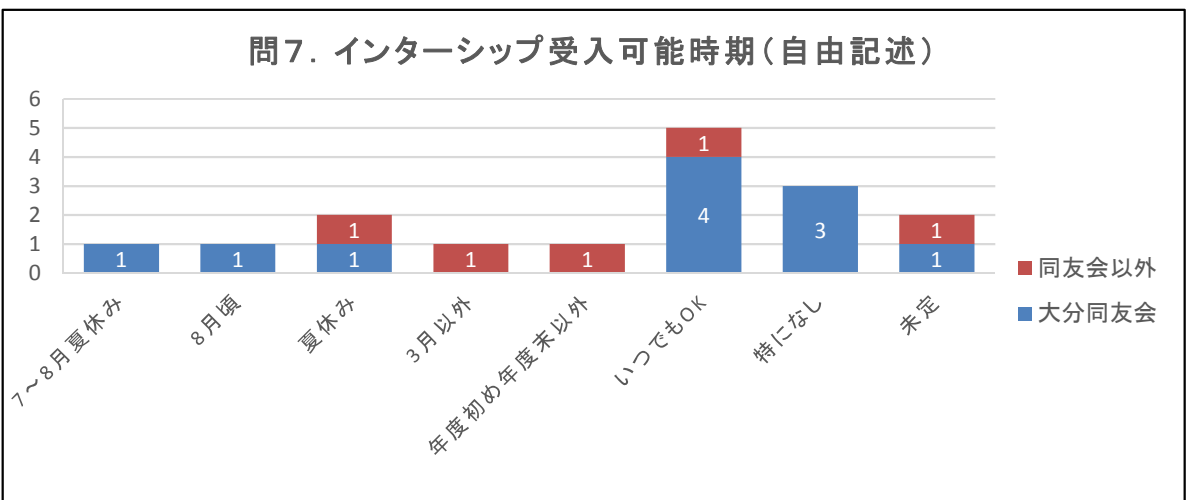
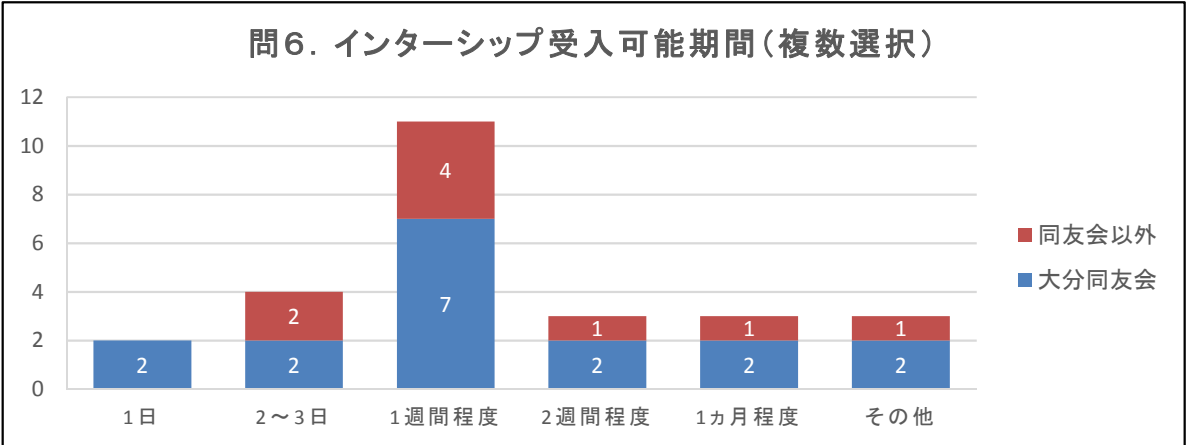
4. 集計結果

以下では、大分県中小企業家同友会(大分同友会)、ものづくり大分産学交流会(同友会以外)毎の集計結果について表記する。

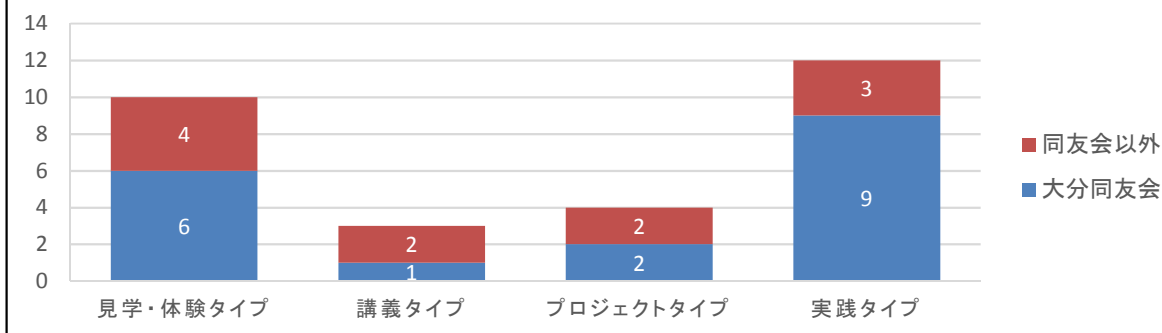




「問6」～「問10」は「問5」で「1. 実施中または予定」または「2. 実施を検討」を選択した場合のみ回答。

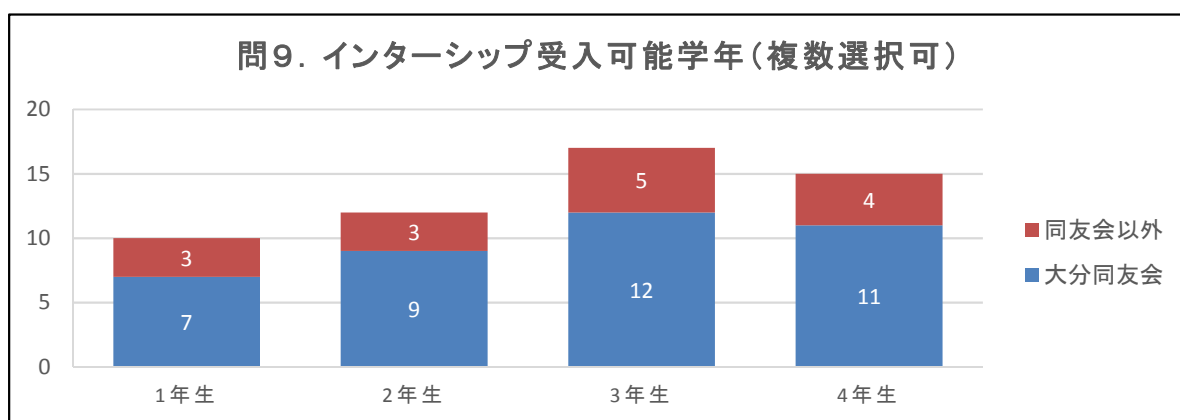


### 問8. インターシップ受入時の就業タイプ(複数選択可)



1. 見学・体験タイプ…実際の職場で業務について説明を受け、仕事を少しだけ体験できる。
2. 講義タイプ…業界・企業・仕事についての講義の中で、その企業の事業内容を理解し、「働く」ことについて学ぶ。
3. プロジェクトタイプ…学生でチームを組み、その企業の事業にかかわる課題に取り組む。
4. 実践タイプ…各部署に配属され、社員の一人として業務を任される。

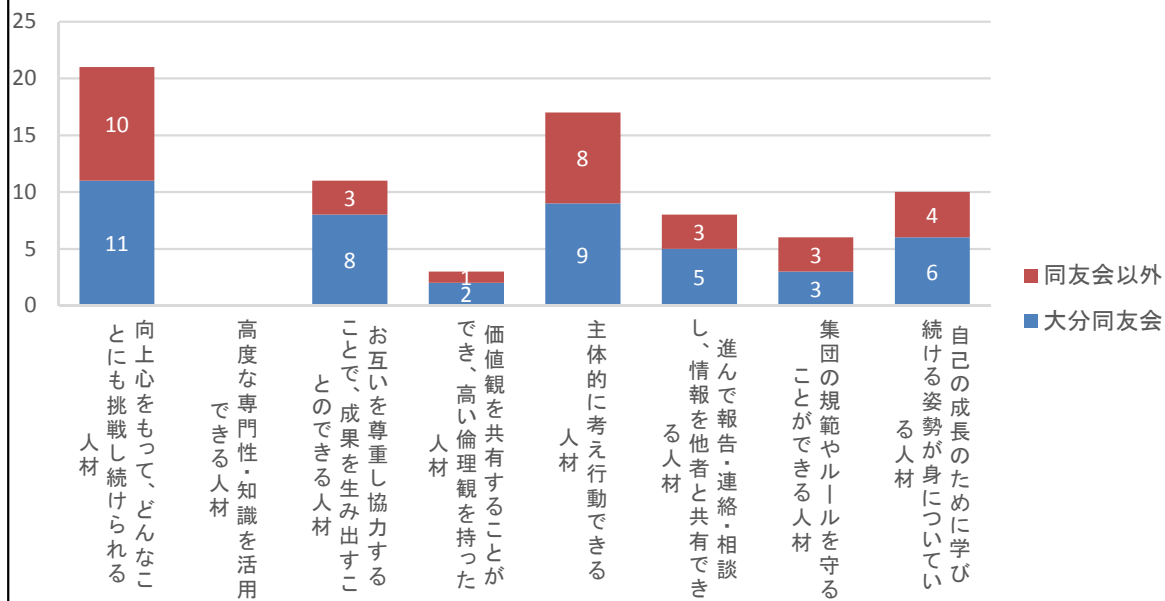
### 問9. インターシップ受入可能学年(複数選択可)



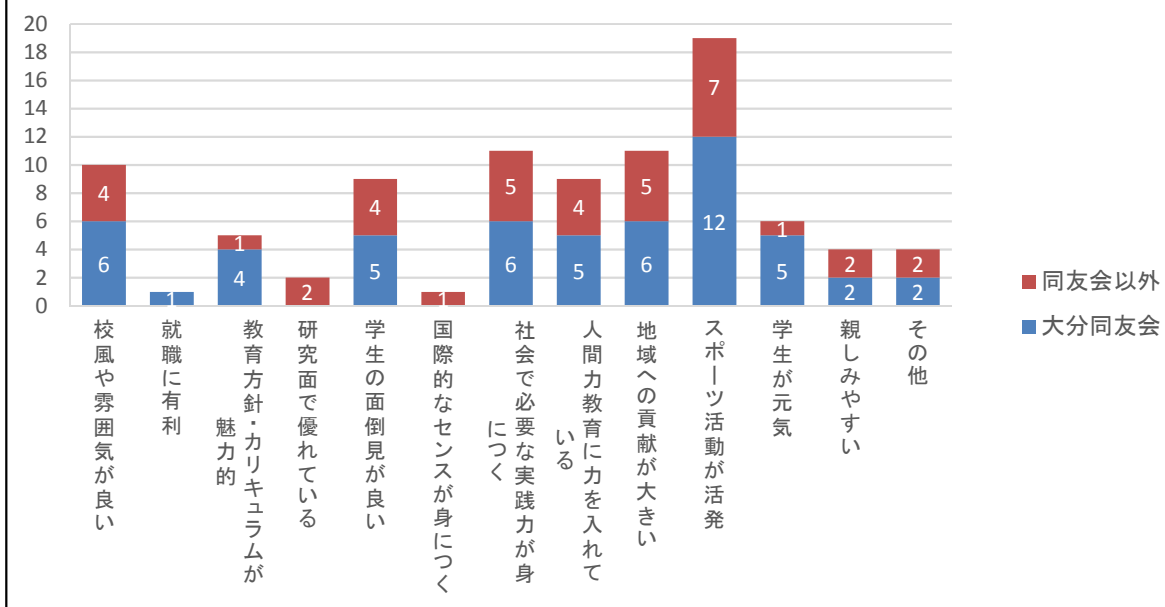
### 問10. インターンシップ受入に対して、条件や本学への要望

- ・インターシップを通して、就職先としてマテハン業界を知ってもらいたい(製造業)
- ・経済を通して自分希望の生涯計画のヒントを見つけてほしい。客との対話が学びの場となります。(卸売業)
- ・ホテル、旅館で働いてみたい人(宿泊業)
- ・情報メディア学科希望(その他)
- ・まじめでやる気のある方(金融業)
- ・やる気のある方・地方を愛している方・向上心のある方・協力的な方・自ら希望する方(小売業)
- ・当社では採用選考の中にインターシップを組み込んでおり毎年期間を違えて数名受け入れております。  
よって現時点に於いては通常の入力が叶わない状態です。(建設業)
- ・業務に興味を持ってほしい。単位のみでインターシップに来る学生がいる。(製造業)
- ・対応可能な内容については職員の状況(業務負荷など)によります(公務)

### 問11. 今後期待する若い人材(2つまで)



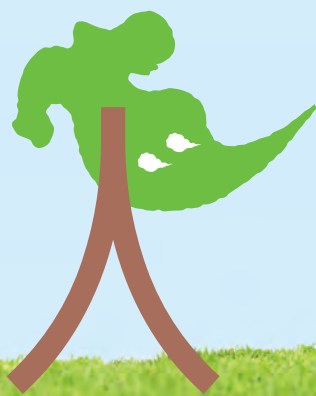
### 問12. 本学のイメージ(3つまで)



### 問13. インターシップ以外で、本学の教育・研究・社会貢献として取り組んでもらいたいこと、その他本学に対する意見、提案

- ・講義の中にマテリアル・ハンドリングに関するものを取り入れていただきたいです。(製造業)
- ・中小企業に関心をもっている若人と出会えて学校訪問に感動し出来れば県内に人材してほしい(卸売業)
- ・本校への出前講座が考えられます。企業内の組織や仕組み、業務のシステム化など、参考となる実際体験談を学ぶ機会としたらいかがでしょう。(その他サービス業)
- ・大学生へボランティアも大事だと思うが大分県は観光都市としての可能性を秘めていると思うので是非、観光について学んでほしい。(宿泊業)
- ・地域企業との雇用マッチングプロジェクトが実現出来れば注目されると思う
- ・様々な分野において期待しています。・学生一人一人を大切に、社会に貢献できる人材を育成してほしい。
- ・特に地方中小企業では学生(大卒)の活躍できる(リーダーシップを発揮できる)場所が沢山あり必要としているのでこの取組みに感謝していますし成果を上げてほしい。(小売業)
- ・基礎学力の養成・働くこととはどういうことかを個々人がそれなりの考えを持つべく指導願いたい。(社会規範や社内規律を守ることも含めて)(建設業)
- ・産学官連携強化!(製造業)
- ・産学官連携事業に積極的に参画していただきありがとうございます。自動車関連産業振興の取組にはこれまでも参画していただいているが医療機器での地場企業との共同研究などにも参画、提案をいただきたい

## 8. 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト



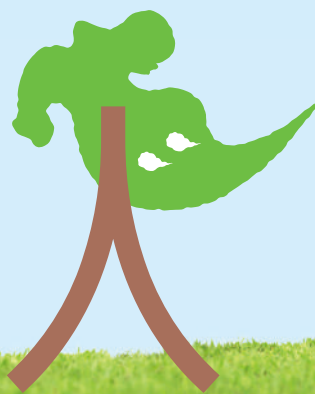
## 平成26年度 日本文理大学 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト

No	学籍番号	卒業研究・論文・設計テーマ	共同研究
1	機械電気工学科	トマト収穫に向けたプラットフォームの設計と開発	
2	機械電気工学科	熱水発電装置の基礎研究 -単モジュール特性-	
3	機械電気工学科	熱水発電装置の基礎研究 -多モジュール化特性-	
4	建築学科	佐賀関地区の少子高齢化の現状と地域づくり方策に関する研究	2名
5	建築学科	河川プールに着目した豊後大野市ふるさと体験村の魅力向上に関する研究	2名
6	建築学科	河川シミュレータを用いた柴北川における流域環境の調査	
7	建築学科	カエルを指標とした里山(竹田市岡本地区)における生物多様性の現状	
8	建築学科	南海トラフ巨大地震を想定した津波避難についての研究	
9	建築学科	コンクリート骨材に利用される川砂および海砂に関する調査	
10	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その1～駅の利用状況について～	
11	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その2～施設改善について～	
12	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その3～カコヲカコウ～保存と再生を繰り返す人々の暮らしをつなげる提案～ (卒業設計)	
13	建築学科	中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクト その4～rising town～四季を感じる憩いの場～ (卒業設計)	2名
14	建築学科	Circle of people 【卒業設計:大分市佐賀関地区】	
15	建築学科	Priceless Space ～人生にちよつとした贅沢を～ 【卒業設計:大分市かんたん公園】	
16	建築学科	海からまちへ、まちから海へ 【卒業設計:大分市住吉泊地】	2名
17	建築学科	分かち合う。～本音と建前の仮面の世界へ～ 【卒業設計:大分市府内町病院】	
18	建築学科	人隣～ひとり～ 【卒業設計:大分市宮裏川団地】	
19	建築学科	三つの道が交錯する駅 【卒業設計:臼杵駅】	
20	建築学科	precious time of mind 【卒業設計:大分空港】	
21	建築学科	station for the people 杵築 (卒業設計)	
22	建築学科	"SANBOU SUNSHINE" ～今後の日本の地熱発電所のあるべき姿の提案～ (卒業設計)	
23	航空宇宙工学科	温泉熱を利用したスターリングエンジン ～設計、製作、稼働～	
24	情報メディア学科	「おおいた豊後大野ジオパーク」の地域活性化を促進させる映像制作	
25	情報メディア学科	映像制作「おおいた姫島ジオパーク」	
26	情報メディア学科	映像制作「国東半島 世界農業遺産認定としいたけ栽培」	
27	情報メディア学科	[OITA DESIGN POWER 2014]Design Caf? 2 -プロアマ同一テーマ作品制作への参加-	
28	経営経済学科	ジオパークの現状と課題～豊後大野市の地域活性化に向けた私見～	
29	経営経済学科	大分駅再開発と九州内の主要駅再開発の検証	6名
30	経営経済学科	大分県地域経済の分析	
31	経営経済学科	東九州における鉄道観光の必要性	
32	経営経済学科	東九州自動車道が大分・宮崎にもたらすもの	2名
33	経営経済学科	トヨタ自動車の経営戦略と大分におけるトヨタディーラーの販売戦略	
34	経営経済学科	別府温泉の歴史と現状	
35	経営経済学科	宇佐神宮の歴史と経済の進展について	
36	経営経済学科	大分トリニータが大分県にもたらす地域貢献に関する一考察	
37	経営経済学科	地方都市におけるJクラブの経営に関する一考察-サガン鳥栖、大分トリニータを事例として-	
38	経営経済学科	日本文理大学学生のアルバイトにおける労働環境に関する研究	



## 9. チャレンジ OITA 人材育成フォーラム 2014

「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」キックオフシンポジウム





文部科学省

地(知)の拠点

# NBU 日本文理大学

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」キックオフシンポジウム  
 チャレンジOITA人材育成フォーラム 2014

## 地方の高校・大学で求められるアクティブラーニング ～地域で活躍できる若者を育てるために必要な教育改革～

2014

日時

11/11 火

13:00 ▶ 16:40

会場

ホルトホール大分

大分市金池南1丁目5番1号  
 TEL.097-576-7555

3階 大会議室

入場

無料

### 少子高齢化やグローバル化の中で 地方に求められる教育改革を考える!

#### 開催趣旨

少子高齢化に伴う社会の活力低下や地域コミュニティの衰退、都市と地方の格差拡大、さらにはグローバル化による産業構造の変化や自然災害の脅威など我々を取り巻く情勢は刻々と変化しています。

そのような中、日本文理大学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(Center of Community: 大学COC事業)」に選定され、様々な地域課題を乗り越えるために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」の育成を地域との実践的協働活動により目指しています。

大学COC事業キックオフシンポジウムとなる本フォーラムでは、「地方創生」を先取りし、地方の課題が山積する中で活躍できる若者を育てるために、高校や大学の現場で必要となる「教育」を理解し、その教育を実現するための取組みや教育手法を議論することで、高校・大学・社会が接続していくための教育改革の方向性を共有することを目的とします。

### NBUは地(知)の拠点として 「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」 に取り組みます

文部科学省が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援する「平成26年度 地(知)の拠点整備事業 Center of Community [大学COC事業]」に、本学が申請した取り組みがこれまでの人間力教育の成果とともに評価を受け選定されました。今年度の本事業には、国公私立大学等から237件の申請があり、25件のみが選定されるという狭き門でした。

連携自治体：大分県・大分市・豊後大野市

#### プログラム

主催者挨拶 13:00

平居 孝之 (日本文理大学学長)

基調講演 13:10

教育に求められている変容：  
 若者を育てるアクティブラーニング

溝上 慎一氏  
 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)

基調報告 14:25

熊本における地域と協働した高校生教育の可能性

八木 浩光氏  
 (一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 事務局長)

パネルディスカッション 15:05

これからの地方の人材に必要な中等・高等教育と  
 社会の接続をどう実現するか？

■コーディネーター

成田 秀夫氏 (学校法人河合塾 教育研究開発本部 開発研究職)

■パネリスト

◆溝上 慎一氏  
 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)

◆佐藤 茂氏  
 (大分県立大分豊府高等学校)

◆吉村 充功  
 (日本文理大学 人間育成センター長)

◆日本文理大学 学生代表

閉会 16:40

#### 活動展示

ホルトホール大分1F展示スペースでNBUの取り組みを紹介しています。是非ご覧下さい。

展示期間 2014年11月4日(火)～11月11日(火)

#### お問合せ

日本文理大学 教務担当

TEL.097-524-2704 (土・日・祝日除く)

Email. kyoumu@nbu.ac.jp

#### 参加申込先

※原則、事前申込が必要です。【申込締切11/7(金)】

席数に余裕がある場合は、当日の参加申込も可能ですが、配布資料が不足することがございますのでご了承ください。

電話の場合 097-524-2704 (受付時間 9:00～17:00/月～金の平日に限る)

ホームページの場合 <http://www.nbu.ac.jp> ⇒ 専用申込フォーム(PC版のみ)

FAXの場合 097-593-3400

郵送の場合 〒870-0397 大分県大分市一木1727 日本文理大学 教務担当

※FAX、郵送での申込の場合は、ホームページから「参加申込書」をダウンロードしてください。

主催/ **NBU日本文理大学**

後援/ 大分県・大分市・豊後大野市・大分県教育委員会・大分市教育委員会・豊後大野市教育委員会・大分高等教育協議会・日本財団学生ボランティアセンター・(一財)熊本市国際交流振興事業団・大分合同新聞社・西日本新聞社・NHK大分放送局・OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送・OCT大分ケーブルテレビコム

## 日本文理大学 地(知)の拠点整備事業 (大学COC事業) 取組概要

豊かな心と専門的課題解決力を持つ  
おおい地域創生人材の育成

お手元のリーフレットと一緒に  
ご覧下さい

日本文理大学  
人間力育成センター長  
吉村 充功

## 文科省：COC事業とは？ ～2つの目的～

- 地域の課題解決に応える教育研究を行ってほしい。
- 学生が地域社会に出てから役立つ学びに力を入れてほしい。

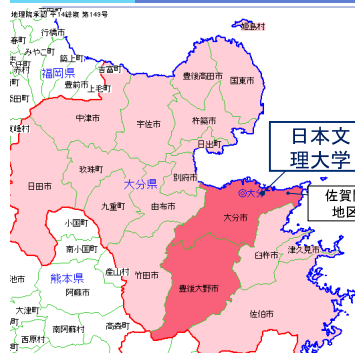


## 本学が育成を目指す 「地域創生人材」とは？

地域への愛着を持ち、  
主体的に課題を発見し、  
専門的なスキルを活用して  
住民や関係者と課題解決に  
取り組むことができる人材

この実現に必要な科目を「地域志向科目」と定義

## 本事業の連携自治体



連携自治体	H22国勢調査人口	高齢化率
大分県	1,196,529	27.6%
大分市	474,094	22.3%
豊後大野市	39,452	38.1%

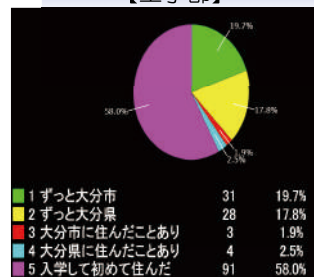
佐賀関地区の高齢化率は45.2%  
※高齢化率はH24年10月または  
H25年10月の数字

## 本学のCOC事業の目的

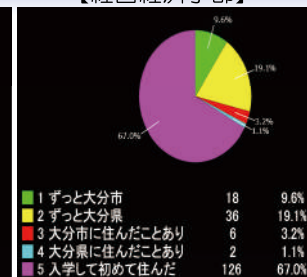
- 地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成・輩出  
→地域志向的教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動の接続
- 地域課題への取り組みを強力に進めるため、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等との横の連携を強化し、地(知)の拠点を實現  
→地域の実態に即した社会貢献活動、研究プロジェクト活動で地域へ還元

## NBU 1年生の状況・意識 Q1. 大分出身？

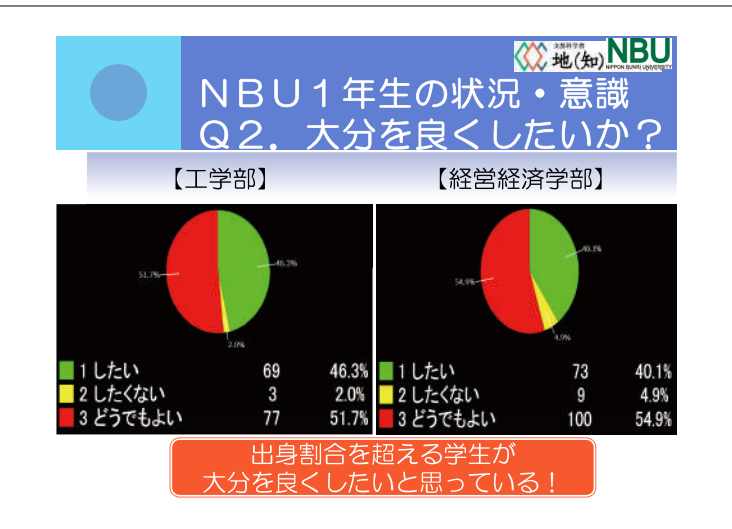
【工学部】



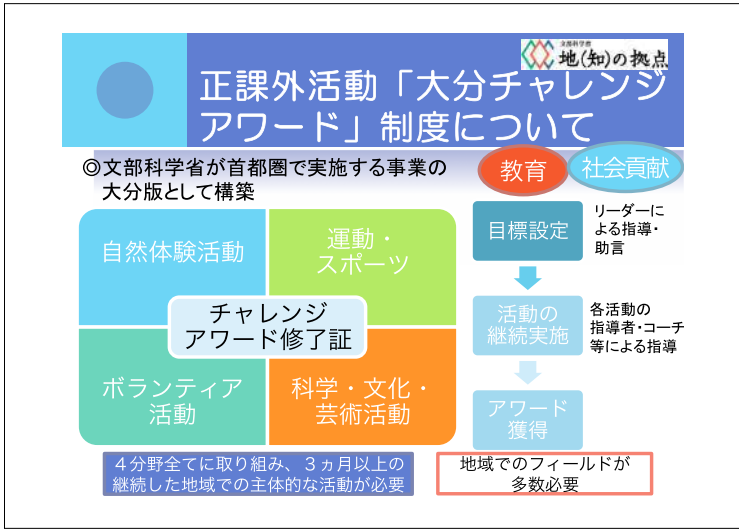
【経営経済学部】



4割弱が大分出身！



- ### 取り組み2ーカリキュラム拡張
- ◎ 学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（副専攻制度）を導入
  - ◎ 連携ゼミ活動・プロジェクト研究活動を推進 → 地域課題への取り組みを強化 教育 研究
  - ◎ 正課外学習活動も重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設 教育 社会貢献



- ### 想定している地域課題と教育研究フィールド
1. 高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
  2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
  3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
  4. 地域ブランド発掘による交流人口増・産業活性化（6次化）
  5. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興
  6. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
  7. NPO法人の活動・経営支援
- 5年間の事業で取り組みを進行させながら、取り組みを定着させ、事業終了後も取り組み地域の拡充を目指す

## 佐賀関地区での取り組み例

- ◎地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動）
- ◎商店街組合・NPO・商工会との連携による活性化策の実践・職業体験活動
- ◎学生拠点の開設（H27年度～）
- ◎地域との対話・交流の場の設定（ローカルデザイン会議の拡充）
- ◎環境保全活動・技術開発
- ◎6次化活動 など



教育 社会貢献 研究

## 豊後大野市での取り組み例

- ◎1次体験活動（農林業）
- ◎集落におけるコミュニティ維持（祭の継承、福祉支援活動）
- ◎地域での高齢者向け学生IT講習会の実施
- ◎高齢社会に対応した支援ロボットの開発
- ◎エコパークの観光資源発掘・環境保全活動
- ◎学生コミュニティショップの開設（H27年度～） など

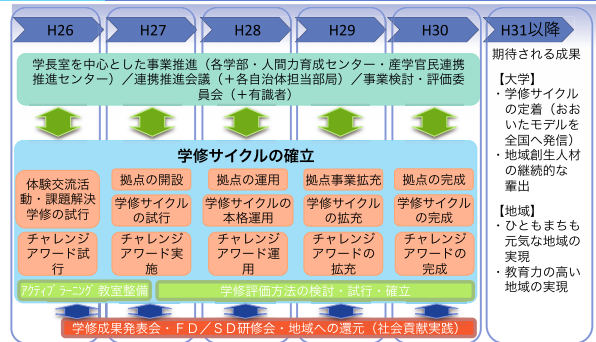


教育 研究 社会貢献

## 主な数値目標（H30）【教育】

- ◎ **地域志向科目数：全科目の4割（200科目）** **教育**
- ◎ 地域での実践活動教育の推進
  - ◎ 経営経済学部における「ゼミナール」で地域実践活動を中心としたゼミを全体の半数以上
  - ◎ 工学部における「プロジェクト系科目」にて、地域実践活動を行う取組を拡充し、「卒業研究」にて地域の課題解決を扱うプロジェクトを全体の半数以上
- ◎ 正課外活動「大分チャレンジアワード」修了者年100名
- ◎ 県内就職率35.0%，希望地域ミスマッチ割合0

## 本事業の実実施計画と期待される効果



### 教育に求められている変容 —(地域の)若者を育てるアクティブラーニング—

溝上 慎一  
(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

http://smizok.net/  
E-mail mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

### イントロダクション 「北陸地方小都市にある工業高校の生徒たち」

- ・人生が家から半径3～5kmで説明されてしまう  
☞彼・彼女にとって学校は必要だったのか？
- ・求人票を見わたして「CA(客室乗務員)はどれ？」  
「私の成績はクラスで28位」
- ・「バスガイドになりたい！」

### Contents

- ①イントロダクション
- ②アクティブラーニングと学生の学びと成長
- ③地域の人材育成と学校教育の役割

### Contents

- ①①イントロダクション「北陸地方のある職業系高校の生徒たち」
- ②アクティブラーニングと学生の学びと成長
- ③地域の人材育成と学校教育の役割

### アクティブラーニングとは

・一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる**能動的な学習**のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

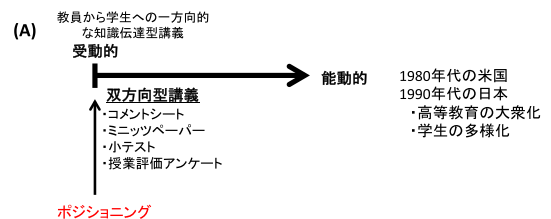
・知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

◆認知プロセスとは  
「知覚・記憶・言語、思考といった心的表象としての情報処理プロセス」  
(論理的 / 批判的 / 創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など)



Reference  
溝上慎一 (2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂

### アクティブラーニングの二つの構図と移行



(B) 教員から学生への一方的な知識伝達型講義

1990年代の米国  
2000年代後半の日本

受動的

双方向型講義

- ・コメントシート
- ・ミニツトペーパー
- ・小テスト
- ・授業評価アンケート

能動的

アクティブラーニング(型授業)

- ・ディスカッション / プレゼンテーション
- ・調べ学習 / 体験学習
- ・フィールドワーク
- ・協同学習
- ・協調学習
- ・LTD (Learning Through Discussion)
- ・PBL (Problem-Based Learning)
- ・PBL (Project-Based Learning)
- ・TBL (チーム基盤型学習)
- ・ピアインストラクション

ポジショニング

学生の学びと成長

Student Learning and Development

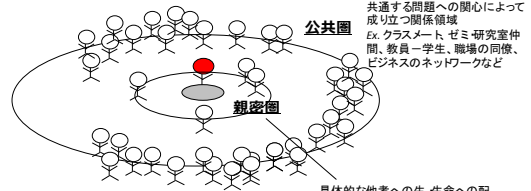
General Tasks

- ・幅広い知識(教養)の習得・活用
- ・汎用的技能・態度(能力)の育成

Specific Tasks

- ・専門知識の習得・活用
- ・患者の良きパートナーとしての医師の育成
- ・社会の中で活躍する女性を育てる
- ・地域の若者育成

## 親密圏/公共圏他者・コミュニケーション



共通する問題への関心によって成り立つ関係領域  
Ex. クラスメイト、ゼミ研究室仲間、教員-学生、職場の同僚、ビジネスのネットワークなど

具体的な他者への生 生命への配慮 傾心によって成り立つ人格的な関係領域  
Ex. 家族、友人、恋人など

- ・公共圏コミュニケーションは、友だちとの雑談・おしゃべり、情報・知識の収集・分析、思考などを伴わないクラブ・サークル、アルバイトではなかなか身に付かない
- ・課題ベースの学習、他者との協同学習(アクティブラーニング型授業)に参加することで磨く

Reference

- ・清上慎一 (2014). 自己-他者の構図から見た越境の説明-アクティブラーニングの潮流に位置づけて- 富田英司・田島亮士 (編) 大学教育-越境の説明をめぐむ心理学- ナカニシヤ出版 pp.221-230
- ・三上剛史 (2013). 社会学的ディアボリスム-リスク社会の個人- 学文社

## アクティブラーニングと地域創生

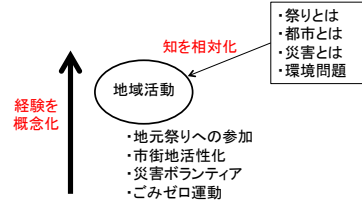
知識の習得だけではなく、  
知識の創造・活用・探求(=アクティブラーニング)



## しかし

・知識があつてこそそのアクティブラーニングであることを忘れてはならない。

・地域課題を経験や直感によって問題解決するのではなく、他の地域やグローバルな状況を学ぶ。知の相対化・概念化が重要。



## Contents

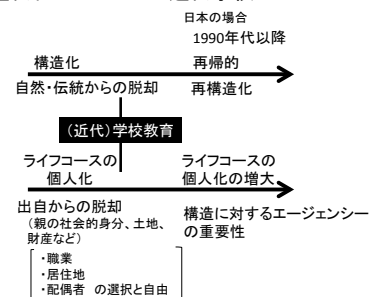
- ① イントロダクション
- ② アクティブラーニングと学生の学びと成長
- ③ 地域の人材育成と学校教育の役割

(例)

- ・半径3~5kmで人生が説明される生徒
- ・私の成績はクラスで 28位
- ・パスガイドになりたい女の子

## そもそも学校とは？

・近代化のプロセスと近代学校



Reference:

- ・清上慎一 (2010). 現代青年期の心理学-適応から自己形成の時代へ- 有斐閣選書
- ・清上慎一・松下佳代 (編) (2014). 高校・大学から仕事へのトランジション-変容する能力・アイデンティティと教育- ナカニシヤ出版

事例に対する私の回答  
「彼らにとって学校とは何なのか？」

- (例)  
 ・半径3～5kmで人生が説明される生徒  
 ・私の成績はクラスで28位  
 ・バスガイドになりたい女の子
- ・学校とはメディア(媒体media)だ:  
 (1) 職業世界を繋ぐ媒体(ライフコースの個人化:職業選択)  
 (2) 居住地を繋ぐ媒体(ライフコースの個人化:居住地選択)  
 \*配偶者選択

弘前大学の授業「津軽学」—ねぶた絵

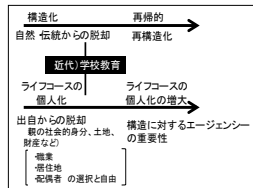


弘前大学21世紀教育センター・土持ゲリー法一(編)(2009). 津軽学—歴史と文化—. 東信堂

受講学生:  
 「私は青森県外出身ですが、弘前大学に来て、弘前の町の規模の小ささ  
 がっかりし、この地へ来たことを後悔することも、弘前に来たことを言うことを  
 恥ずかしく思うことも正直ありました。しかし、今回この津軽学の授業を受け、  
 弘前や青森の歴史・文化などを知ること、弘前の良さを初めて知ることが  
 できました。」

しかし、

- (例)  
 半径3～5kmで人生が説明される生徒  
 私の成績はクラスで28位  
 バスガイドになりたい女の子
- 学校とはメディア 媒体(media)だ:  
 (1) 職業世界を繋ぐ媒体 ライフコースの個人化 職業選択  
 (2) 居住地を繋ぐ媒体 ライフコースの個人化 居住地選択  
 \*配偶者選択



・この「学校」の機能の説明は、近代第1ラウンドのものだ。  
 ・第2ラウンドの「構造(再構造)」化する社会に対するエージェンシーを育てることが必要だったはず。  
 この学校は2015年3月末をもって廃校・統合となる。

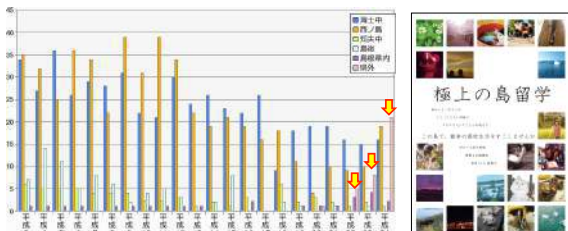
隠岐島前高校(島根県)の事例



2008年より  
 ・行政・議会・中学校・保護者・同窓会から構成  
 ・島外からも生徒が集まる学校づくりを目指す「島前高校魅力化プロジェクト」を開始  
<http://www.dozen.ed.jp/>



2009 33人  
 2010 34人  
 2011 40人  
 2012 59人



「夢探求」出前授業

講師: 横石知二氏(株式会社いろどり代表取締役)

横石さんは、地域で新しい仕事を創ることの魅力や可能性、その方法について自身の体験や身近な例を用いながら「人を活かすためには居場所と出番をつくること」「地域資源を活かすためには舞台をつくること」などわかりやすい言葉で語ってくださいました。

生徒からは「今日まで島に居ることは何事においても不利だと思っていたけど、話を聞いたら、全然不利なんかじゃなくて逆に幸せなことなんだと思いました。」人が喜んでくれることで自分に幸せが返ってくる。みんながお互いのために行動できる人になれば、いい人であふれる場所になると思いました。「できない理由をつけるのではなく、どうやったらできるかという方法を考えていきたい」といった感想が聞かれました。



徳島県上勝町で「葉っぱビジネス」を起業

今後の課題

これまで過疎地には、「産業さえあれば人は離れない」「雇用の場さえあれば若者も戻ってくる」という幻想があった。しかし、今の子どもを持つ20代後半から30代の感覚は違う。特に高学歴層ほど、「子どもにより良い教育を受けさせることが出来るならば、多少の犠牲や負担も厭わない」という意識が高まっており、雇用の場だけでは優秀な人材は定着しない。これからは産業と平行して教育の魅力で、子育て世代の若者の流出を食い止めて、逆に子連れ家族のUターンを呼び込んでいく戦略が必要である。



### 地域の「ライフ」(生活)研究が足りない？

・地域の関係者が、地域の魅力(自然、伝統、産業など)、を精いっぱい伝えても、それでも流出する人たちは決して無くならないだろう。流出する人たちの理由が何であるかを知ろうとしない取り組みが多い(ように見える)。

(例)いわゆる「地方」の暮らしの魅力のなさ

わざわざ都市部に出かけないと得られない娯楽  
(ショッピング、映画、コンサートなど)

(例)地域連携を推進するある高校の校長  
「この地域では年収300万あれば、都市部の大企業に行かなくても、生活をやっている。」

### ソーシャル・ネットワーキング

ウェブサイト、SNS(TwitterやFacebook等)による情報発信・共有  
・娯楽(食べ歩き、ハイキング等など)  
・イベント(学習機会)



京都大学教育学部  
「一般・地域の方へ」公開講座・シンポジウム <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/>  
ニヤニヤ会【大々BBQ大会】in 淀川河川敷 <https://www.facebook.com/events/412691158824119/>

プロジェクトイベントは、見知らぬ人が集まり、知り合う機会を創出する。新しいテーマに基づくコミュニティづくり・発展の一環となり、かつ、参加者のライフコースの個人化の機会をも創出することがある。

### 最後は、人と人との出会い・感動

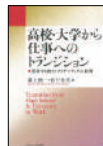
ご清聴有り難うございました

### Contents

- ①イントロダクション
- ②アクティブラーニングと学生の学びと成長
- ③地域の人材育成と学校教育の役割

### 興味があればお読みください

溝上慎一・松下佳代(編)(2014). 高校・大学から仕事への  
のトランジションー変容する能力・アイデンティティと教育  
ー ナカニシヤ出版



この10年、世界的に喫緊の課題となっている学校から仕事へのトランジションを、国際的に定義し、国際的な近年の動向を概説したもの(溝上慎一)。ほか「大学から仕事へのトランジションにおける新しい能力」(松下佳代)、「<移行>支援としてのキャリア教育」(児美川孝一郎)、「アイデンティティ資本モデルー後期近代への機能的適応」(ジェームズ・コテ)、「後期近代における<学校から仕事への移行>とアイデンティティー「媒介的コミュニティ」の課題」(乾彰夫・児島功和)ほか。

溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラ  
ダイムの転換 東信堂



アクティブラーニングを理論的・実践的に包括的に概説した著書。  
第1章:アクティブラーニングとは 第2章:なぜアクティブラーニングか  
(教えるから学ぶへ、情報・知識リテラシー) 第3章:さまざまなアク  
ティブラーニング型授業(ピアインストラクション、LTD話し合い学習法、  
PBLなど) 第4章:アクティブラーニング型授業の質を高めるための工夫  
(ディープ・アクティブラーニング、授業外学習、逆向き設計、反転授  
業) 第5章 揺れる教授学習観(ラーニングピラミッドの功罪など)

### 講師プロフィール

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸  
大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教  
授システム開発センター助手、2000年講師、2003  
年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。  
2014年より教授(現在に至る)。大学院教育学  
研究科兼任。京都大学博士(教育学)。



<http://smizok.net/>

日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、『Journal of Adolescence』Editorial Board委員、『International Conference on the Dialogical Self』Scientific Committee委員。公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、大阪府立大学高等教育開発センターIR顧問ほか、高校のSSH運営指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(大学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学ー他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学ー適応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『大学生の学び・入門ー大学での勉強は役に立つ!ー』(2006有斐閣アルマ、単著)、『高校・大学から仕事へのトランジションー変容する能力・アイデンティティと教育ー』(2014ナカニシヤ出版、編著)、『活躍する組織人の探究ー大学から企業へのトランジションー』(2014東京大学出版会、編著)など多数。

## 熊本における地域と協働した 高校生教育の可能性 「国際ボランティアワークキャンプ inASO」

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団  
八木 浩光  
TEL 096-359-2121  
yagi@kumamoto-if.or.jp

## 報告内容

1. ボラキャンの概略
2. ボラキャンの歴史
3. ボラキャンの成果

\* 国際ボランティアワークキャンプinASOは、  
いつのまにか、ボラキャンの愛称でみんな  
が知っているイベントになりました。

## ボラキャンの目的

- 21世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生等が日々の地域での活動を点検し、「若い人材」の「生きる力」を育むこと
- 1つの学校を越えた多くの学校間の活動
- 大人を巻き込んだ協働

## ボラキャン始動...

- 2006年「国際ボランティアセミナー」として始動
- 一人の教師の熱い思い - 熊本県立玉名高校定時制教師で熊本県高等学校国際教育研究協議会事務局長だった故榊定信氏(享年60、)の思い(教育現場の経験から、若者が生きる力を養う場が、社会から消えていると危惧)

## 第1回ボラキャン

第1回:2006年11月12日(土)、13日(日)  
「国際ボランティアセミナー」として開催

- テーマ:地球市民としての資質を磨く  
(傾聴型のセミナー)
- 「ボランティアから世界が見せる」 興梠寛氏
- 「ブラジル移住100周年と国際化」 藤崎康夫氏
- 「Bangladeshからの報告」 川原一之氏
- ワークショップ「国際人との出会い」  
高校生国際ボランティア報告

## 第2回ボラキャン

第2回:2007年11月23日(金)、24日(土)  
テーマ:「国際」と「ボランティア」をキーワードに、  
自らの暮らす社会を考える。高校生が  
主体となり5つ分科会計画実施しました。

- (実行委員会形式)
- 第1分科会 国際協力
  - 第2分科会 国際平和
  - 第3分科会 国際福祉
  - 第4分科会 国際環境
  - 第5分科会 多文化共生

## 第3回ボラキャン

第3回:2008年10月25日(土)、26日(日)

テーマ:「環境」 - 「思考・討論しあい、知識を深めていく」にとどまらず、「行動する、広めていく」ことを目的に高校生が自ら計画し、プログラム運営までをやり遂げました。

→ アクションプラン - エコバッグを作り福祉施設へ、門松を作り老健施設へ届け、交流

- 第1分科会 ボランティアを一から始めよう!  
熊本県立熊本高等学校
- 第2分科会 日本、世界の森林の現状を知り、私たちにできることを考えよう! 熊本県立芦北高等学校
- 第3分科会 書き損じハガキプロジェクト  
熊本市立必由館高等学校
- 第4分科会 転校生は日本語が分からない。私は日本に来たばかり。あなたははどうする? 外国籍生徒等
- 第5分科会 ボランティア活動を世界へ発信しよう!

## 第4回ボラキャン

第4回:2009年10月24日(土)、25日(日)

テーマ:「好奇心+行動力=チャレンジャー」 - 普段の生活の中で感じたこと、新しい発見を、みんなで持ち寄り、話し合い、出来ることを考えました。そこに行動力が加わり、「かたち」あるものに創り上げました。Smile Station(スマイルステーション)という月1回、高校の枠を超えたボランティア活動の情報交換の場が生まれました。

- 第1分科会 社会マナー ~人との関わり方~
- 第2分科会 思いを形に!
- 第3分科会 ボランティア
- 第4分科会 わたしたちの地元食
- 第5分科会 多文化共生
- 第6分科会 水守になろう!
- 第7分科会 情報発信

## 第5回ボラキャン

第5回:2010年8月1日(日)、2日(月)、3日(火)

テーマ:「Talk + oo = Smile」 - 学校、性別、国籍、様々な違いを超えて話し合い、理解し合い、最後に皆がSmile(笑顔)になれる取り組みをしました。(それぞれのSmile探しの旅)

- 第1分科会 夢 Talk+Dream=Smile
- 第2分科会 日本文化 ~継承されていく文化~
- 第3分科会 外国文化 わたしたちの地球(ふるさと)をもっと知ろう!!
- 第4分科会 環境 CyclingでFeeling
- 第5分科会 Pets can have SMILE ~ぼくらはみんな生きている~
- 第6分科会 多文化共生 世界が一つになるには
- 第7分科会 自己表現 新しい自分探し! コーディネーターになろう

## 第6回ボラキャン

第6回:2011年8月7日(日)、8日(月)、9日(火)

テーマ:「はじける! Teenagers!!」 - 参加した全員が元気いっぱい楽しみ、自分の「夢」、そして社会において必要とされる自己探しをしました。

- 第1分科会 福祉
  - 第2分科会 環境 ~水と共に生きる~
  - 第3分科会 食
  - 第4分科会 ボランティア  
~高校生だからこそできることin身近なボランティア
  - 第5分科会 伝統文化
  - 第6分科会 国際交流 ~多国籍若者交流プロジェクト~
  - 第7分科会 多文化共生
- 報告会に回遊型  
ポスターセッション  
を導入

## 第7回ボラキャン

第7回:2012年8月10日(金)、11日(土)、12日(日)

テーマ:「Let's take action! ~俺が拓げる君と繋がる~」をテーマに、ボラキャンで体験したこと、学んだこと、考えたことを自分の周りの人たちに伝えていくことを心がけました。

- 第1分科会 フェアトレード
- 第2分科会 自己表現
- 第3分科会 多文化共生
- 第4分科会 ボランティア
- 第5分科会 国際協力
- 第6分科会 日本文化
- 第7分科会 防災

## 第8回ボラキャン

第8回:2013年9月14日(土)、15日(日)、16日(月)

テーマ:∞ -Infinity-の可能性 ~私たちは進化しつづける~

- 第1分科会 食糧問題
  - 第2分科会 自己表現
  - 第3分科会 多文化共生
  - 第4分科会 教育
  - 第5分科会 国際ボランティア
  - 第6分科会 地域おこし
  - 第7分科会 食
- 韓国からの高校生  
の参加が始まる。  
  
大学生グローバル  
ワークキャンプが  
始まる。

## 第9回ボラキャン

第9回: 2014年8月15日(金)、16日(土)、17日(日)

テーマ: 思いやりの輪 ～みんな同じ空の下～

- 第1分科会 ふれあい
- 第2分科会 自己表現
- 第3分科会 国際交流
- 第4分科会 多文化共生
- 第5分科会 観光
- 第6分科会 国際ボランティア
- 第7分科会 食育

## ボラキャンの歴史

- 2006年、国際ボランティアセミナーとして開催
- ユネスコ高校生大会の終了、生きる力の育成
- セミナー → ワークキャンプ
- 傾聴型 → 協働型
- 講演中心 → 分科会中心
- イベント参加型 → 継続的活動型
- 2015年、10周年を迎えます。

## 1年間をかけたプログラム構築

8月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	...
ボラキャン開催中に、一般参加者(1年生)より実行委員募集													
登録者へ案内、説明会													
第1回高校生実行委員会 毎月1回程度の実行委員会で、テーマ、分科会活動の企画													
春合宿(阿蘇青少年交流の家)チラシ作成													
一般参加者募集開始(5月) - 事務局													
配布資料作成													
大会運営													
報告書作成、反省会													



## スケジュール

8月10日(金)	8月11日(土)	8月12日(日)
9:30 熊本市国際交流会館 出発 (専用貸切バス)	6:00 起床	6:00 起床
11:10 国立阿蘇青少年交流の家 到着	6:20 清掃	6:20 清掃
12:00 ~ 13:00 朝食	6:45 朝の集い	6:45 朝の集い
13:00 閉会式	7:00 朝食	7:00 朝食
13:30 基調講演	9:00 ~ 17:00 分科会活動/パート2	8:40 ~ 10:40 報告会
14:30 アイスブレイク「世界の挨拶」 [ネームチューン]	17:45 ~ 19:00 夕食・入浴	11:00 ~ 11:30 閉会式
15:40 分科会活動/パート1	19:00 ~ 21:00 未来職道(いろんな活動家と 出会い話し合う!)	12:00 国立阿蘇青少年交流の家 出発
17:45 ~ 19:00 夕食・入浴	22:30 就寝	13:00 ~ 14:00 朝食(阿蘇草千里にてお弁当)
19:30 ~ 21:30 全体交流会		14:00 阿蘇 出発(専用貸切バス)
22:30 就寝		15:30 熊本市国際交流会館到着 (解散)

## 成果

- 出逢い～高校の枠を超えた友人との出逢い、多くの新しい発見
- 劇的な変化～先生に勧められなんとなく参加した自分から、仲間に役立つと行動する自分への変化
- 社会における人の存在を知る～行動が生まれる。自ら行動する人へ
- 日頃の活動(学校が社会に近いところにある) Smile Station(スマイルステーション)
- 高校生の活動を支援する大人(JICA、NPO、企業、学校等)のネットワークの発展
- 日本ボランティア学習協会の「アレック・ディクソン賞」を受賞(2012年11月)
- 自己理解・他者理解 -(発展)→ 自己実現

## 今後へ(1)

ボラキャンのOB・OGのネットワークが社会人へ広がり始めました。色々なところで助け合い、支え合える関係づくりへ発展させていければと考えています。また、広く九州、日本、そして海外からの高校生のボラキャンへの参加を期待します。

## 今後へ(2)

2015年、日本文理大学との連携が本格始動。  
高校生、大学生等の人間力育成をテーマに、  
次の分野で共同で事業を実施します。

- (1)「国際ボランティアワークキャンプ」および「グローバルワークキャンプ」の実施。
- (2)学生ボランティア活動、インターンシップ活動に対する支援および広報。
- (3)多文化共生地域づくりを目的とした共同研究。
- (4)国際教育をととしたグローバル人材の育成。

## 一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

住所 〒860-0806

熊本市中央区花畑町4-18

熊本市国際交流会館

電話 096-359-2121

FAX 096-359-5783

Email [pj-info@kumamoto-if.or.jp](mailto:pj-info@kumamoto-if.or.jp)

URL <http://www.kumamoto-if.or.jp>

<http://blog.goo.ne.jp/smilesta>

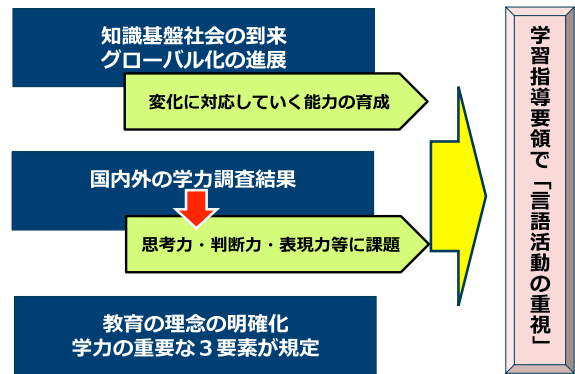
# 「思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善」に係る実践研究

## 『世界標準の確かな学力の育成』

思考力・判断力・表現力の向上を図るため、言語活動を基盤とした学習指導及び系統性ある学習評価の研究

大分県立大分豊府高等学校

## 1 言語活動の充実が求められる背景



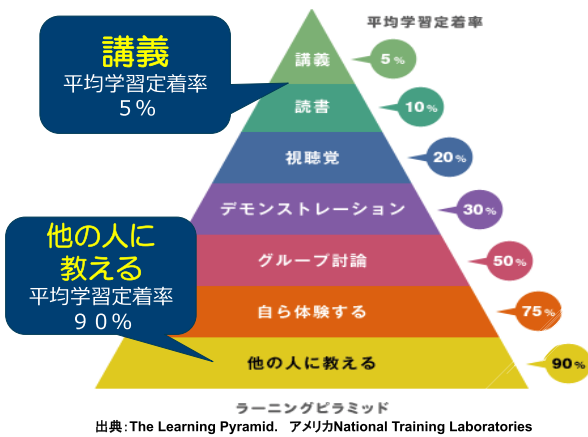
## 2 本研究 研究課題

### 『世界標準の確かな学力の育成』

思考力・判断力・表現力の向上を図るため、言語活動を基盤とした学習指導及び系統性ある学習評価の研究

### 世界標準の確かな学力とは

新しい時代を主体的に生きていくため、問題を解決する力やその過程で獲得していく知識や技能、意欲、思考力・判断力・表現力及びそれらをいろいろな場面で活用し、更に深めたり広げたりしていく力



## 3 研究目的

### ①従来型の講義中心的授業形態

生徒の主体的な活動 言語活動の充実  
関心・意欲を高め、いきいきと学習する生徒へ

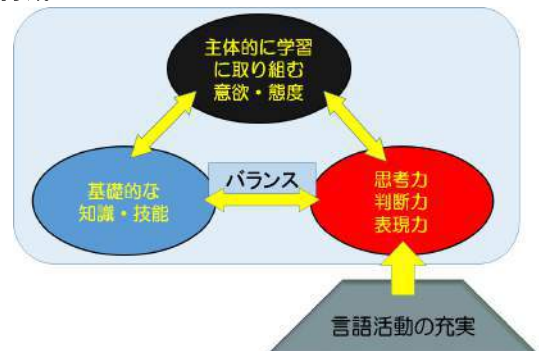
### ②評価規準が不明確

評価規準の明確化 指導の統一性  
授業の目標達成到達度の精度を高める

### ③観点別学習状況の評価が不十分

観点別に、つきたい力の育成に対する評価

## 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランス



## 4 つけたい力

### 大分豊府高校生につけたい力

- ◆主体的に考察する力
- ◆意欲的に探究する力
- ◆他者の考えを受容する力
- ◆考えを深化させようとする力

関心・意欲・態度

知識・理解

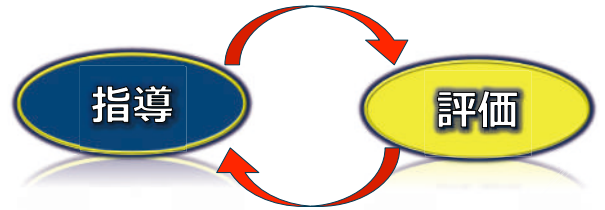
- ◆知識・技能を関連付け・体系化する力
- ◆必要な知識・情報を選択する力

思考力・判断力・表現力

- ◆多面的・発展的に考え行動する力
- ◆目的や場に応じて適切に表現する力

## 5 指導と評価の一体化

目標の実現状況  
指導の成果を評価



指導の改善  
指導の質を高める

## チャレンジOITA人材育成フォーラム2014

パネルディスカッション  
学生事例報告  
2014年11月11日  
～日本文理大学～  
工学部 情報メディア学科 2年  
川口 顕



## 東北復興支援



## 東北復興支援



## 東北復興支援



## 山間地域での ワークキャンプ



## 山間地域での ワークキャンプ





## 山間地域での ワークキャンプ



## 山間地域での ワークキャンプ



## 商店街活性化活動



## 商店街活性化活動



## 地域の魅力再発見と 高齢者の健康維持



## 地域の魅力再発見と 高齢者の健康維持



## グローバルワークキャンプ



## グローバルワークキャンプ



## グローバルワークキャンプ



## 第一次産業の 魅力継承活動



## 第一次産業の 魅力継承活動



## 第一次産業の 魅力継承活動





ご静聴ありがとうございました！



立命館大学  
地(知)の拠点

NBU  
日本文庫大学  
人 間 力  
チャレンジ  
PROJECT



本日の流れ

- 1)はじめに
  - ・正課外の必要性
- 2)豊後大野大寒地区における民泊農業体験
  - ・大人の視点、若者の視点
- 3)おおいたチャレンジアワードin豊後大野
  - ・地域社会への帰属意識
- 4)大人と若者の共生
  - ・現在の若者に必要なもの

1)はじめに  
(正課外活動の必要性)

- ・正課授業 ⇒ 単位認定の対象となっている授業
- ・正課外活動 ⇒ 単位認定のない学生の社会的実践活動

・正課外活動の魅力  
社会的・職業的自立を促すための教育活動 文部科学省HPより

仲間とのチームワーク + 学び(専門力)の必要性

社会での自分の居場所

地域社会に興味を持ち、地元の地域社会で輝きたい！  
と心から思える若者をつくる教育を行いたい。

**人間力教育による地域創生人材**

2)おおいたチャレンジアワードin豊後大野  
(大人の視点・若者の視点)

おおいたチャレンジアワード  
・冒険内容  
開催期間 H26. 12月25～26日  
場所 豊後大野ジオパーク  
人数 6名  
活動詳細 ルートマップを作製、自転車で探索

教育効果  
・計画的な行動  
・チームワーク  
・地域の資源や人に対する興味

学生の声  
地域住民の応援が嬉しかった…  
住民の声  
自分も若返ったきがした！

**相互理解**

3)豊後大野大寒地区における民泊農業体験  
(地域社会への帰属意識)

民泊・農業体験  
・活動内容  
開催期間 H26. 9月25～現在  
場所 大寒地区  
人数 20名  
活動詳細 農業・下草刈り・イベント等

教育効果  
・第一次産業への理解  
・地域コミュニティへの参加  
・地域住民と共に生きる事の喜び

学生の声  
幸せって何か…  
住民の声  
子育てでは出来なかった事…

**共生社会**

3)大人と学生の共生地域豊後大野  
(現在の若者に必要なもの)

仲間とのチームワーク + 学び(専門力)の必要性

社会での自分の居場所

☆2つの取り組みで学生が得たもの、芽生えたもの  
・物事の本質をとらえる目・飽くなき探究心

現在の若者に決定的に足りないもの…3つの間

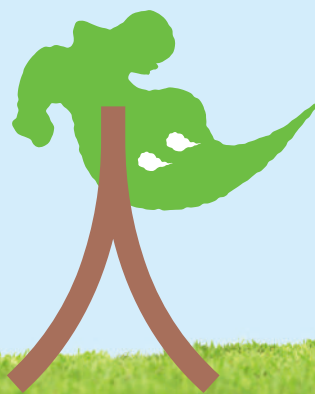
・時間 (チャレンジアワード)  
・空間 (民泊農業体験)  
・仲間 (地域住民)

**若者たちと素晴らしい仲間になって下さい!!**



## 10. チャレンジ OITA 地域創生人材講座 2015 in 佐賀関

「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」佐賀関地区キックオフ講座



日本文理大学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」佐賀関地区キックオフ講座

## チャレンジOITA地域創生人材講座2015 in 佐賀関

### 【開催趣旨】

日本文理大学(NBU)では、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を大分市佐賀関地区、豊後大野市での地域実践を通じて育成すると同時に、地域課題解決による地域力の向上を目指した事業展開をしています。

佐賀関地区でのCOC事業のキックオフに位置づける今回の地域創生人材講座は、地域と学生の協働によるこれからの地域づくりをテーマに、チームの重要性をゲームを通じて理解するワークショップと、それを踏まえてこれからの佐賀関地区の地域づくりを学生との協働を通じて考えるワークショップを実施します。

今回の講座をきっかけに、新年度から本格化するNBUの佐賀関での学生生活動、住民協働の地域づくりを実りのあるものにしていきたいと考えています。

【日 時】 平成27年2月14日(土) 13:00～16:00

【会 場】 佐賀関公民館 2階 研修室1・2

(大分市大字佐賀関1407番地の27 佐賀関市民センター内 Tel:097-575-2557)

【主 催】 日本文理大学

【テーマ】 **地域創生人材の育成で佐賀関地区を元気に！**

### 【当日スケジュール】

○主催者挨拶・開催趣旨:13:00～13:05

○レクチャー&ワークショップ① (13:05～14:15 70分)

テーマ:『ゲームで学ぶマネジメント入門』～地域を元気にする組織づくり～

講 師:日本文理大学 経営経済学部 学部長・教授 橋本 堅次郎

○休憩:14:15～14:30 (15分)

○ワークショップ② (14:30～15:50 80分)

テーマ:『これからの佐賀関地区の活性化を考えよう』～住民と学生協働の地域づくり～

ファシリテーター:日本文理大学 工学部 建築学科 教授 吉村 充功 ほか

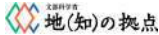
○まとめ:15:50～16:00

### 【申込方法】

FAXまたはEメールに氏名、住所、所属(お勤めの方or学生)、電話番号をご記入の上、2月12日(木)までに下記までお申し込み下さい。

FAX:097-593-3400 Eメール:kyoumu@nbu.ac.jp

座席に余裕がある場合は当日参加も受け付けます。(裏面FAX申込用紙)

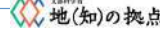

地(知)の拠点

日本文理大学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」佐賀関地区キックオフ講座

**チャレンジOITA**  
**地域創生人材講座2015 in 佐賀関**  
 地域創生人材の育成で佐賀関地区を元気に！

---

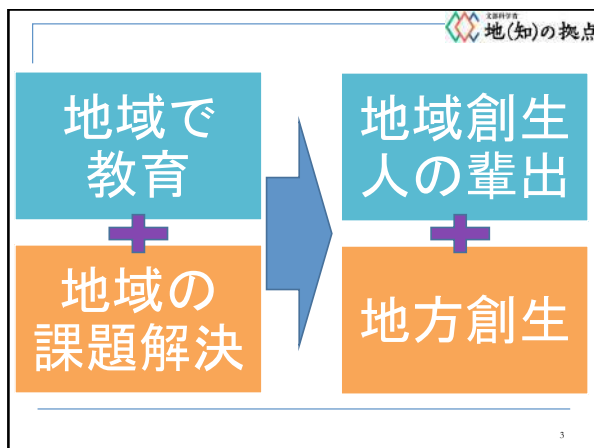
13時より開始します！  
 今しばらくお待ち下さい。  
 各テーブルは7人掛けです。  
 地域の方と学生が混成となるように  
 ご着席下さい。

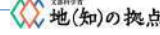

地(知)の拠点

NBUでは  
 人材育成・学生教育と  
 地域課題解決に向けた取り組み  
 の融合を  
 この佐賀関地区で  
 本格化させます！

---

2

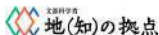



地(知)の拠点

一緒に何ができるか  
 考えてみませんか？  
 想いを一つに  
 一緒に取り組んで  
 みませんか？

---

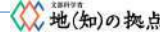
4


地(知)の拠点

レクチャー&ワークショップ①  
 ゲームで学ぶマネジメント入門  
 ～地域を元気にする組織づくり～

---

講師：日本文理大学 経営経済学部  
 学部長 橋本 堅次郎


地(知)の拠点

**休憩**  
**(15分間)**  
**14:40より再開**

---

6



文部科学省  
地(知)の拠点

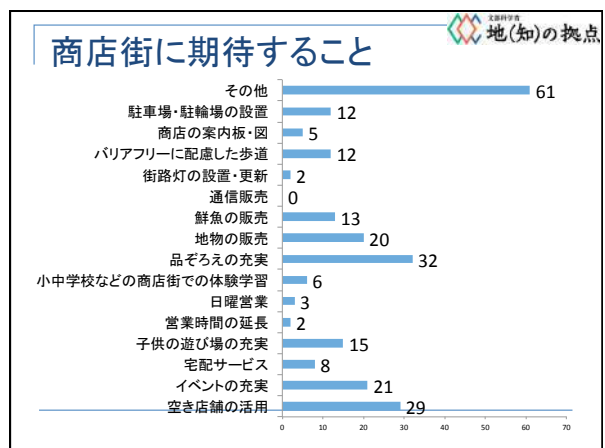
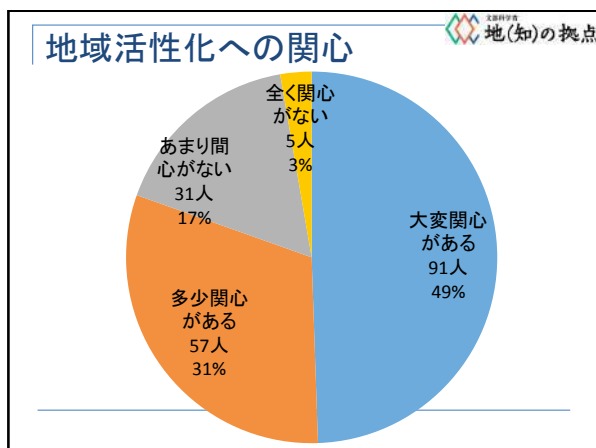
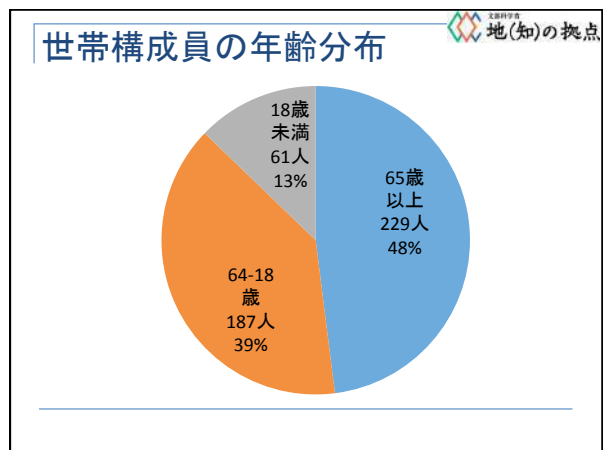
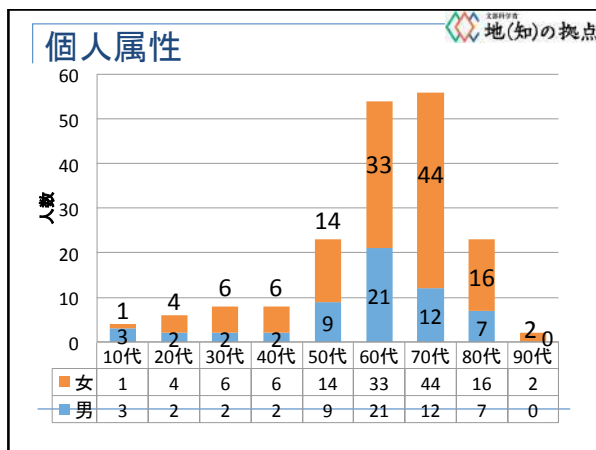
## ワークショップ② (80分)

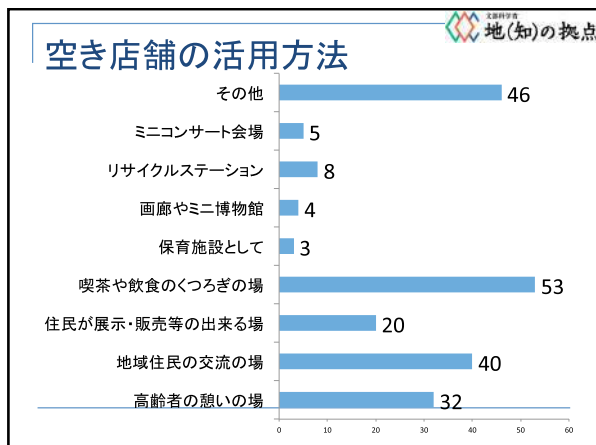
これからの  
佐賀関地区の活性化を考えよう  
～住民と学生協働の地域づくり～

文部科学省  
地(知)の拠点

### 住民アンケートの概要

調査対象	佐賀関地区中心部の住民
調査方法	訪問調査
調査時期	2015/1/10～1/20
回答人数	184人





### この時間の流れ

今のグループで・・・

- 自由な発想で佐賀県地区を元気にするアイデア（取り組み）を出す（約15分）
- アイデアをまとめる（約20分）
- 発表準備をする（約10分）
- 発表する（各チーム4分以内）

- ### テーマ・キーワード
- 地域コミュニティの維持
  - 関あじ関さば通りを中心とした商店街の魅力向上
  - 佐賀県地区の魅力向上（住民・観光にとって）
  - 持続可能な視点で
  - 学生の活動拠点
  - 単発イベント・ゆるキャラのみはNG

- ### 自由な発想で佐賀県地区を元気にするアイデアを出す
1. 独創的で意外なアイデア大歓迎(自由奔放)
  2. なるべく多くのアイデアを出そう(質より量)
  3. 人のアイデアの批判・評価はしない
  4. 人のアイデアにつなげるのも歓迎(連想と結合)
- アイデア

地域の資源や魅力

問題点・課題

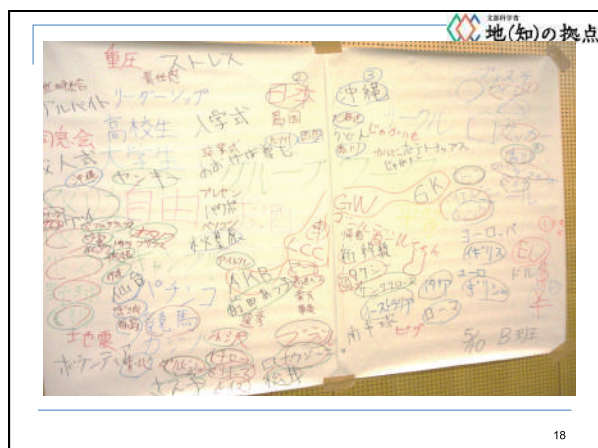
その他気づき

- ### 手順
1. アイデアをポストイットにサインペンで記入
  2. 模造紙に貼り付ける(地図上もOK)
  3. メンバーで話し合いながら、追加のアイデアを出していく
  4. あまり整理をする必要はありませんが、近いアイデアのものは近くに集めておく
- アイデア

地域の資源や魅力

問題点・課題

その他気づき

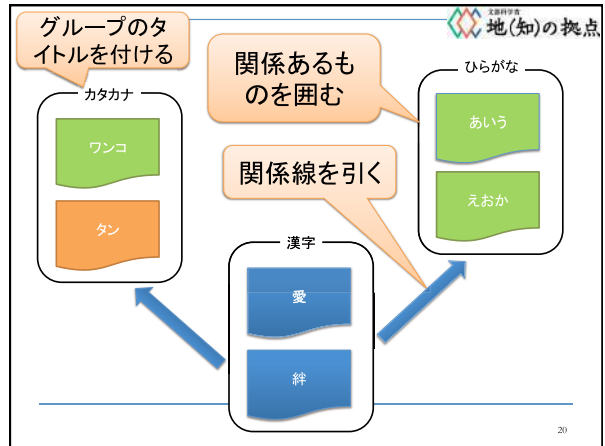


文部科学省  
地(知)の拠点

## アイデアをまとめる・発表準備をする

1. メンバーで話し合いながら、ポストイットを移動し、次第にグループ化する
2. 模造紙に随時コメント・見出しを書く  
地図を使ってもOK
3. テーマを絞る
4. 最終的な取り組みを黄色の模造紙にまとめる
5. 発表のための作戦タイム
6. グループ毎に発表(4分程度)

---



文部科学省  
地(知)の拠点

## アイデアをまとめるヒント

誰が	なにを	どこで
どのように	いつ	なんのために

---

21

文部科学省  
地(知)の拠点

# 発表

---

22

文部科学省  
地(知)の拠点

# まとめ

---

23

佐賀県地区を元気に！

## ゲームで学ぶマネジメント入門

### ▶ 地域を元気にするチームづくり

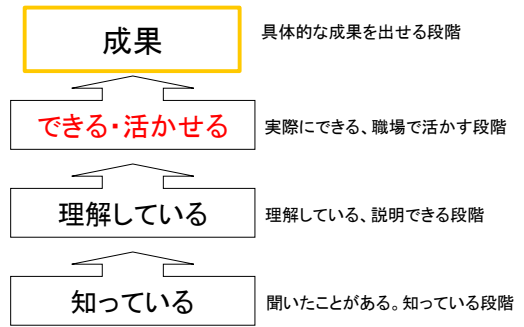
- ゲームでマネジメントの基礎を学ぶ。・・・ゲームを通してチームとは何かを学ぶ。
- 研修を活かす。・・・研修で学んだことを活かす
- 経験と情報の交流の場とする。・・・メンバーと交流し、他力を借り自力をあげる。

2015. 2. 14

日本文理大学 経営経済学科 橋本堅次郎

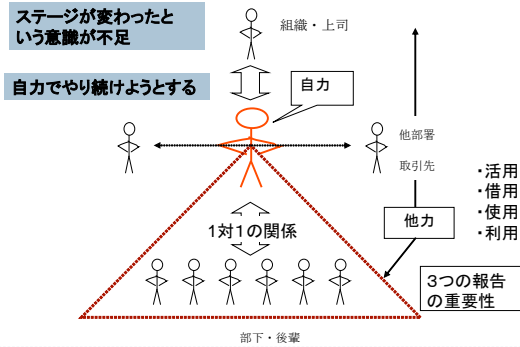
▶

## 研修を活かす



▶ 2

## 自力のパワーアップ、他力の活用



▶ 3

## 協力ゲーム (チームマネジメントゲーム)

目標:バラバラのパーツを使い「同じ大きさで同じ形の図」を、できるだけ早く、陣地内で組み立てます。

### <ルール>

1. パーツを重ね合わせてはいけません。
2. メンバー同士で話し合うのはOKです。
3. パーツは、右または左の人へ順送りにして渡すこと。
4. パーツを渡すときには、陣地に1片以上は残すこと。
5. 他人のパーツに手を出さない。
6. 助言はしてかまいません。
7. 陣地以外でパーツを組み立てない。
8. 座っている場所の移動はできません。

質問5分  
作戦タイム

制限時間

20分

終わったら手を上げる

▶ 4

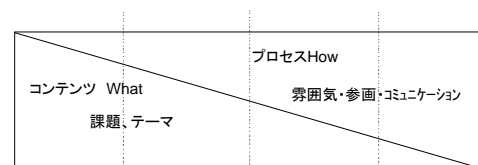
## 振り返りシート

- ▶ 私は今の討議に満足している。
- ▶ 私は今の討議に貢献した。
- ▶ 私は今の討議に熱中した。
- ▶ 私は今の討議でフラストレーションを感じた。
- ▶ 私は今の討議の結果に満足している。

▶ 5

## チームマネジメントの二つの側面

### ▶ コンテンツとプロセス



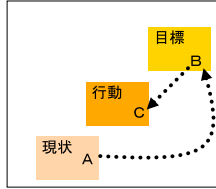
□ コンテンツ 何を課題にするか。何をしゃべるか。

□ プロセス どのように雰囲気をつくるか。どのようにコミュニケーションをとるか。

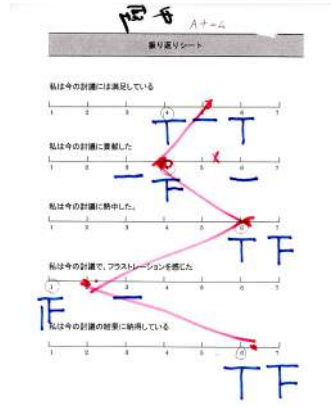
▶ 6

## コンテンツ（課題・テーマ）

目標：バラバラのパーツを使い、同じ大きさの図を、できるだけ早く、陣地内で組み立てます。

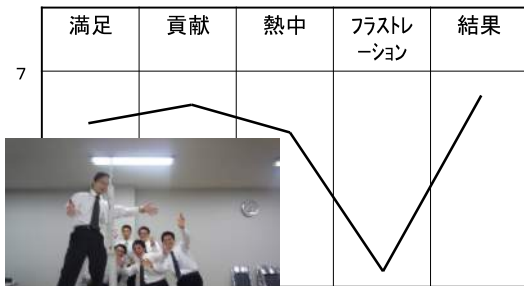


いくつかは2片、4片でできる場合もあります。



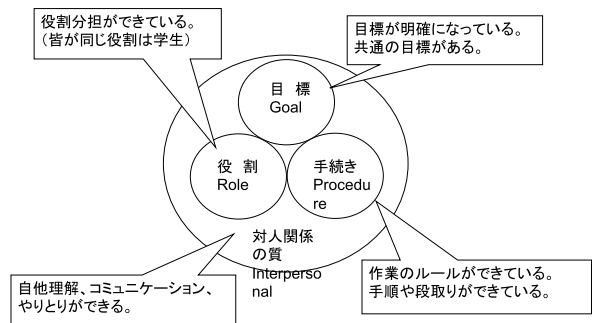
## プロセス（雰囲気・参画。コミュニケーション）

巻き込む



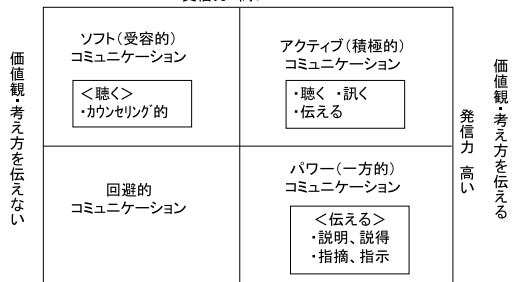
## チームマネジメントのレベルを上げるには

GRIPと覚える



## アクティブ（積極的）コミュニケーション ①

相手の伝えたいことを正確に受けとめる  
受信力 高い

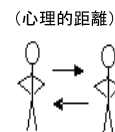


相手の伝えたいことを勝手に解釈する

## 心の距離を縮める

コミュニケーションのスタートは心の距離を縮めることです。

二人の間の相互の信頼関係



## 心理的距離と心理的距離



相手に近づくほど人間関係が増し、相手から離れるほど人間関係は薄くなります。

心理学者 Hall

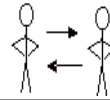
「他者との距離が120センチ以内で親密なコミュニケーションが図れる」

- 密接距離 0～45センチ親密な関係。皮膚接触によるコミュニケーション。
- 固体距離 45～120センチ個人的に親しい人と路上での立ち話ができる程度。
- 社会距離 120～360センチビジネス上の間合いで互いに隔絶されている。
- 公衆距離 360～750センチ以上個人を意識させず、一方的なコミュニケーションになる。

▶ 13

## 心の距離を縮めるには 「聴く」

### 二人の間の相互の信頼関係



・理想の生活 ・休日の過ごし方  
・好きな食べ物 ・熱中していること  
・好きな風景 ・行って見たい場所  
・とてもショックなこと ・私のペット  
・嬉しかったこと

- ▶ 石になる(やってはいけない)
- ▶ アイコンタクト
- ▶ ほめる(相手の存在を認める、挨拶)
- ▶ うなづき・あいづち・はひふへほ
- ▶ オーム返し

▶ 14

## アイコンタクトとコミュニケーション



▶ 15

## チームとは

### 1. サッカーのグループとは言わない。サッカーチームと言う。

チームを強くするには4つの要素が必要です。

チームとは、①人間関係の質を高め、②役割分担し、③手続きを決めて④目標に向かうものです。人が集まっただけの集団ではグループです。

### 2. 一人一人が強いのがチーム。

チームは一人一人が強いことが必要です。

一人一人が強くて初めて強いチームになります。強いメンバーが協力するから強いのです。チームで仕事をするというのは隠れ場所があることではありません。

### 3. リーダーがチームをまとめ、目標・ビジョンを目指す。

目標・ビジョンを示すのはリーダーです。

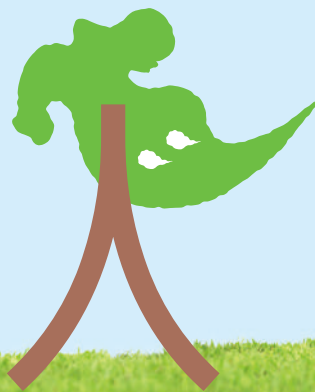
リーダーは高い視点と明確な目標・ビジョンを示し、チームを同じ方向に向けて動かします。

部下を目標達成に参画させ、コミュニケーションをとり、やるぞという雰囲気作りをします。

▶

# 11. チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2015 in 豊後大野

「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」豊後大野キックオフ講座



日本文理大学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」豊後大野キックオフ講座

## チャレンジOITA地域創生活動報告会2015 in 豊後大野

### 【開催趣旨】

日本文理大学は、平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、大分県の「地(知)の拠点」の確立を目指して、「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」をテーマに地域での教育・研究・社会貢献活動を展開しています。

本報告会では、日本文理大学が取り組む地域創生人材育成に向けた「教育・研究・社会貢献(学生正課外)活動」について、今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告します。地域の皆さまに活動へのご理解を頂くとともに、地域創生人材育成の活動重点地域である豊後大野市の現状と今後の発展性について意見交換し、新たな学生生活動の可能性を模索することを目的に実施します。

【日 時】 平成27年2月21日(土) 13:00～15:40 ※参加費無料

【会 場】 豊後大野市役所本庁舎 1階 保健センター (豊後大野市三重町市場1200番地)

【主 催】 日本文理大学

【後 援】 豊後大野市

【テーマ】 豊後大野市での学生教育・研究活動の成果を地域住民と共有し地域の発展性を探ろう！

### 【当日スケジュール】

※進行状況により発表時間は若干前後する場合があります。

- 13:00～13:05 主催者あいさつ
- 13:05～13:15 基調報告 日本文理大学 大学COC事業推進責任者 吉村 充功  
「NBU日本文理大学の今後の地域での教育方針  
～豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材育成の展望～」
- 13:15～13:30 学生研究報告 建築学科 学生  
「河川プールに着目したふるさと体験村の魅力向上策の検討」
- 13:30～13:40 学生研究報告 建築学科 学生  
「河川シミュレータを用いた柴北川におけるふるさと体験村周辺の流域環境調査」
- 13:40～13:55 学生研究報告 経営経済学科 学生  
「大分から始まる地域活性化への道～豊後大野・佐賀関の“祭り”に着目して～」
- 13:55～14:10 教員研究報告 経営経済学部 高橋 淳一郎  
「小規模小中学校における予防的心理教育の導入について」
- 14:10～14:20 休憩
- 14:20～14:35 教員教育報告 工学部 近藤 正一  
「インテリアデザイン科目での取り組みとその周辺」
- 14:35～14:50 教員研究報告 工学部 平居 孝之  
「プライバシーに配慮した高齢者の見守り技術」
- 14:50～15:05 教員研究報告 工学部 稲川 直裕  
「水中観測ロボットの開発と稲積水中鍾乳洞の水中観測」
- 15:05～15:20 正課外学生生活動報告 人間力育成センター 高見 大介  
「犬飼町大寒地区における民泊・農業体験活動報告」  
「おおいたチャレンジアワードにおける豊後大野ジオサイトを巡る旅の実践」
- 15:20～15:30 講評(豊後大野市)
- 15:30～15:40 主催者総括・お礼の言葉

### 【申込方法】

FAXまたはEメールに氏名、住所、所属(お勤めの方or学生)、電話番号をご記入の上、2月19日(木)までに下記までお申し込み下さい。

FAX:097-524-2663 Eメール:coc@nbu.ac.jp

座席に余裕がある場合は当日参加も受け付けます。

(裏面FAX申込用紙)

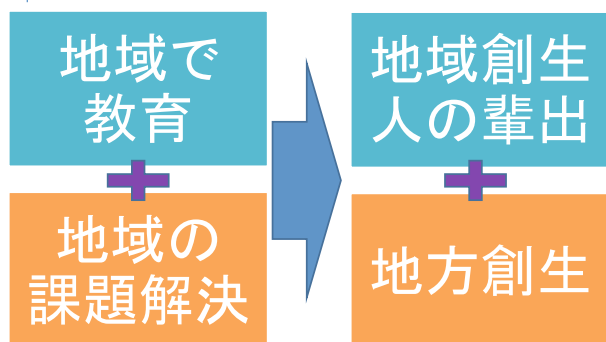


## NBU日本文理大学の 今後の地域での教育方針

～豊かな心と専門的課題解決力を持つおおい  
た地域創生人材育成の展望～

日本文理大学  
大学COC事業推進責任者  
吉村 充功

NBUでは  
人材育成・学生教育と  
地域課題解決に向けた取り組み  
の融合を  
豊後大野市で  
本格化させます！



育成するのは「地域創生人」！

地域への愛着を持ち、  
主体的に課題を発見し、  
専門的なスキルを活用して  
住民や関係者と課題解決に  
取り組むことができる人材

教育  
社会貢献

この実現に必要な科目を「地域志向科目」としてカリキュラム再編を実施

学修サイクルの確立を目指します！

教育

- 「地域創生人材」育成のための学修サイクルの確立



NBUは大分の地(知)の拠点へ！



想いを一つに！

地域で活動し教育  
を行うためには  
地域の皆さまの  
ご理解とご協力が  
必要です！

今日は地域で活動を  
本格化するキックオ  
フとして活動報告や  
展望を学生・教員が  
発表

# 河川プールに着目したふるさと体験村の魅力向上策の検討

日本文理大学 工学部 建築学科 ○武田 健太・塩崎 敦史  
指導教員 吉村 充功

## 1. はじめに

本研究では、豊後大野市大野町土師地区のシンボルである「豊後大野市ふるさと体験村」の魅力向上を目的に、河川プールに着目した調査研究を行った。

## 2. 豊後大野市ふるさと体験村の現状

「ふるさと体験村」は、農村地域の活性化を促進する目的で現在の豊後大野市大野町北部地区の中心部に昭和62年に設置された(図1)。また、敷地内には一級河川大野川の支流である柴北川を活用した河川プールが併設されており、大分県の「豊かな水辺づくり事業」の一環として整備された。

敷地には、木造2階建ての管理棟が1棟あり、2階が会議場兼宿泊所になっている。他にも、ケビン4棟、堅穴式住居3棟、共同炊事場1棟、温水シャワー室1棟、トイレ(冷水シャワー室併設)1棟がある。また、豊後大野市の資料による利用状況を表1に示す。

豊後大野市役所で行ったヒアリング調査の結果、広報に関しては回覧板やイベント時にケーブルテレビを利用して行っていることや、管理人の負担が大きいという問題が指摘された。また、来年度より地元の土師振興協議会への移管が検討されているが、現在は収支のバランスが悪く、存続していくためには改善しなければならないことが明らかになった。

## 3. 大分県南地域の河川プールの現状

ふるさと体験村の特徴を明確にするため、大分県南地域にある河川プール15カ所の現地調査を行った(図2)。その結果を表2にまとめた。調査結果から、大分県南地域にある河川プールの傾向と、ふるさと体験村柴北川河川プールを比較すると、駐車場、シャワー、トイレが備え付けられている点は共通している。一方、ふるさと体験村には宿泊施設と温水シャワーが完備されているのが特徴である。また、他の河川プールと比べて敷地がコンパクトなこともふるさと体験村の特徴と言える。



図1 豊後大野市ふるさと体験村

表1 宿泊者数と使用料収入の推移

	宿泊者数(人)	使用料収入額(円)	宿泊者1人当たりの使用料収入額(円/人)
H16年度	891	546,160	612.97
H17年度	595	432,870	727.51
H18年度	546	338,700	620.33
H19年度	449	377,350	840.42
H20年度	344	326,700	949.71
H21年度	838	523,000	624.11
H25年度	644	479,060	743.88
H26年度	629	414,180	658.47

表2 大分県南地域の河川プール一覧

名前	分類	入場料	宿泊施設	シャワー
河原内河川プール	引込	なし	なし	あり
城ヶ原オートキャンプ場 阿蘇野川河川プール	引込	200円	あり	なし
豊後大野市ふるさと体験村 柴北川河川プール	引込	なし	あり	あり 温水)
井崎河川公園キャンプ場	堰止	なし	あり	あり 温水)
白山川河川プール	堰止	なし	なし	あり
中島公園河川プール	堰止 指定	なし	なし	あり
芹川河川プール	引込	なし	なし	あり
陽目の里キャンプパーク	指定	なし	あり	なし
野津川河川プール	堰止	なし	なし	なし
暁嵐公園	堰止	なし	なし	なし
小半森林公園キャンプ場	指定	なし	あり	なし
小半鍾乳洞前河川公園	指定 堰止	なし	あり	あり
宮ノ越水公園 河川遊水場	指定	なし	なし	なし
直川憩いの森公園 キャンプ場	引込	300円	あり	あり 温水)
青山河川公園 河川プール	引込	なし	なし	なし



図2 調査した河川プールの位置図

#### 4. 県民アンケート調査

河川プールに対する認識を明らかにするため、マクロミルのモニターを対象に大分県内の20~40代の男女にインターネット調査を実施した。回答者は207名である。

設問の内容は、年齢別の子ども的人数、自家用車の保有状況、主な情報源、河川プールの認知度、実施してほしいイベントなどである。

また、どのような判断基準で河川プールを選んでいるかを明らかにするために、コンジョイント分析を想定した設問も用意した。設定した要因と水準は表3の通りである。設定した要因と水準によりプロフィールはL18直交表を用いてアンケート票を作成した。

ここでは紙面の都合上、コンジョイント分析の結果のみを示す(図3)。これより、「駐車場」「入場料」「シャワー施設」の3要因は他の5つの要因と比べると影響度が高いことが分かる。

表3の右欄に要因ごとの影響度(係数)を示すが、数値の大きいものを見ると、「高水敷」「自然豊か」「駐車場無料」「入場料無料」「シャワー温水」「売店あり」「公園・遊具」「ログハウス」の組み合わせとなる。つまり、この条件を備えた河川プールが来場者の求める最高の河川プールである。

また、アンケートの自由記述の意見では、子どもの安全や衛生面なども選択要因になることが指摘された。

#### 5. 豊後大野市ふるさと体験村の魅力と改善点

コンジョイント分析の結果を踏まえると、ふるさと体験村はすでに「高水敷」「自然豊か」「温水シャワー」「ログハウス」は備わっており、県南地域の河川プールと比較すると優位である。一方で「売店」「公園・遊具」が備わっていない。また、自由記述を踏まえると、

表3 河川プール選択の要因と水準

要因	水準	係数	要因	水準	係数
プールの種類	河道内	0.000	シャワー施設	なし	0.000
	高水敷	0.123		冷水	0.439
周辺環境	都会的	0.000	サービス施設	温水	0.833
	田舎的	0.130		なし	0.000
	自然豊か	0.302		売店	0.312
駐車場	なし	0.000	併設設備	食堂	0.305
	無料	1.244		なし	0.000
	100円	1.009		公園・遊具	0.284
入場料	無料	1.219	宿泊施設	BBQ	0.068
	200円	0.630		なし	0.000
	500円	0.000		キャンプ場	0.251
			ログハウス	0.255	

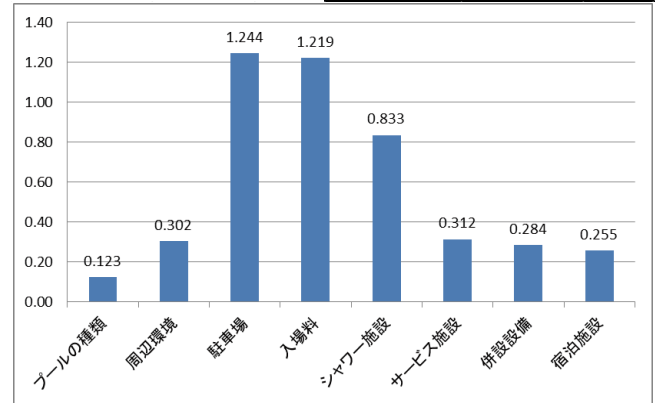


図3 要因の影響度

施設全体がコンパクトにまとまっていることは、監視の目が行き届きやすく、保護者が子供を安心して遊ばせることができるという利点がある。

#### 6. 豊後大野市ふるさと体験村の魅力向上案

以上の結果を踏まえ、ふるさと体験村の魅力向上案として、「学生との連携による施設の充実と運営」を提案する。つまり、「公園・遊具」の充実は、子どもが河川プール以外でも遊べることを期待されていると考えられ、ふるさと体験村で学生が主体となって企画運営を行うイベント等をハイシーズンに継続的に行うことで実現できる。また、情報発信に長けた若者が地域に入ることで、広報を強化することも可能となる。

また、学生と地域の方が共同で地産の物をふるまう物販施設や食堂を設置することで、「売店」「食堂」機能を強化することができると思われる。

#### 7. おわりに

本研究では、河川プールに着目したふるさと体験村の魅力向上案を現地調査と県民アンケートを踏まえ提案した。本研究を行うにあたり、豊後大野市役所担当者様、土師振興協議会の皆様には大変お世話になりました。ここに感謝の意を表します。

# 河川プールに着目した ふるさと体験村の 魅力向上策の検討

日本文理大学 工学部 建築学科  
4年 ○武田 健太・塩崎 敦史  
指導教員 吉村 充功

## 発表の手順

- ふるさと体験村の現状
- 調査の実施内容
- ふるさと体験村の魅力向上案
- まとめ

## はじめに

### 背景

- 過疎化や利用者の減少、維持管理が厳しい
- 1年生のときから「プロジェクト演習」の農林業体験などでお世話になった地区

### 目的

- ふるさと体験村の魅力向上案を提案する

## ふるさと体験村の現状



## ふるさと体験村の現状



## ヒアリング調査

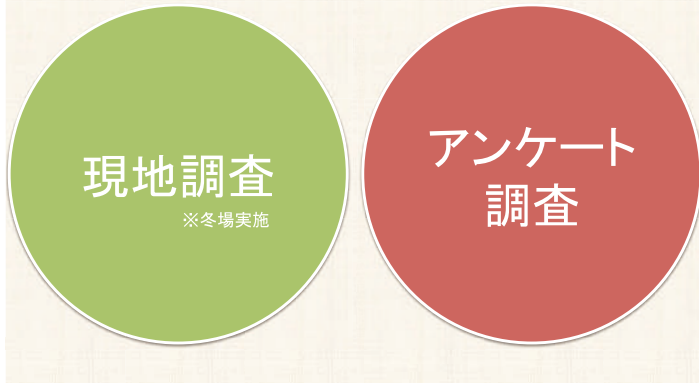
### 広報

- 回覧板やケーブルテレビを使用

### 課題

- 収支のバランスが悪い
- 管理人の負担が大きい

## 調査の実施内容



## 河川プールとは？

### 河川プールの分類

- ・河川の一部を仕切りプールとしたもの(河道内型)
- ・河川の高水敷上に設けられたプール(高水敷型)

### 河川プールの分類

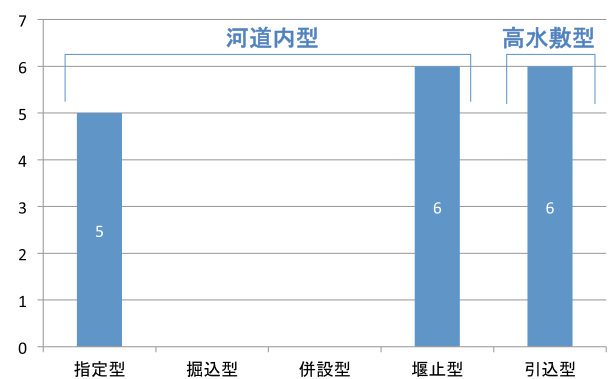


## 現地調査

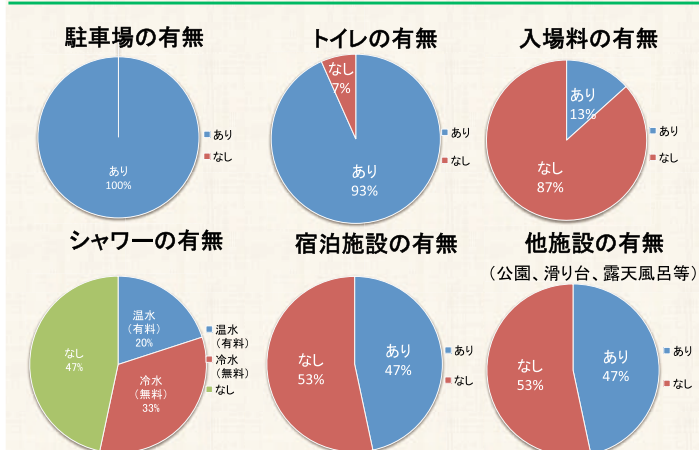


## 大分県南地域の河川プールの傾向

(箇所) 河川プールの形態



## 大分県南地域の河川プールの傾向



## 豊後大野市ふるさと体験村の特徴



## アンケート調査

### アンケートの概要

アンケートサイト「マクロミル」を利用

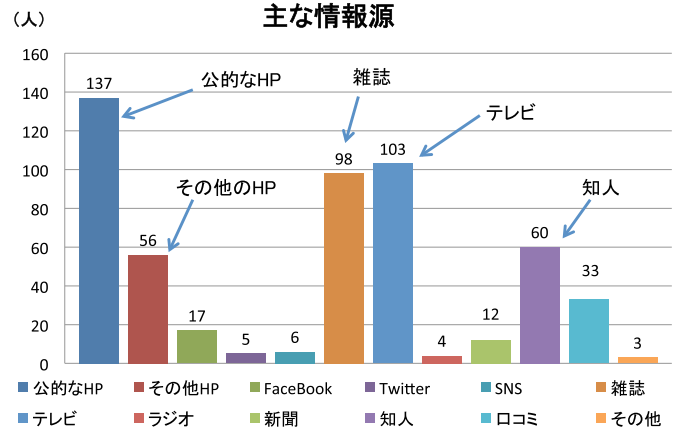
#### • アンケート対象者

大分県内の20~40代の男女207名が回答

#### • アンケート項目

- ・対象者の属性情報
- ・河川プールの認知度調査
- ・コンジョイント分析のための河川プールの評価
- ・自由記述

## アンケート調査



## コンジョイント分析

### ・コンジョイント分析とは・・・

主にマーケティング分野で利用される実験計画法

商品やサービスの持つ要素のうち顧客はどの要素を重視しているか

最も顧客に好まれる要素の組み合わせはどれか

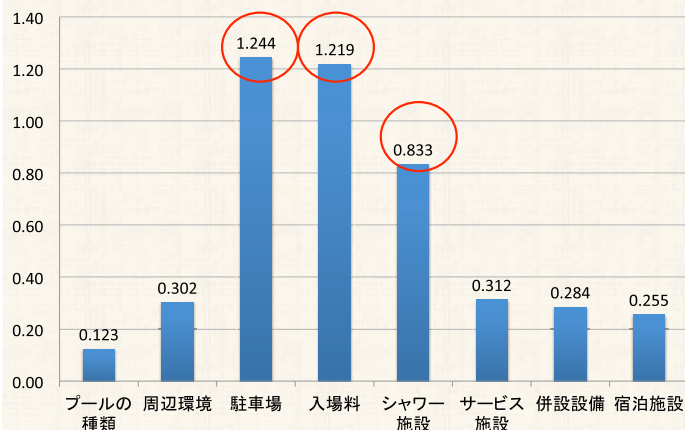
統計的に探ることで明らかにする

膨大な量になる組み合わせを、最小の組み合わせを調査することで結果を求め

## 要因と水準の設定

要因	水準	要因	水準
プールの種類	河道内	シャワー施設	なし
	高水敷		冷水
周辺環境	都会的	サービス施設	温水
	田舎的		なし
	自然豊か		売店
駐車場	なし	併設設備	食堂
	無料		なし
	100円		公園・遊具
入場料	無料	宿泊施設	BBQ
	200円		なし
	500円		キャンプ場
			ログハウス

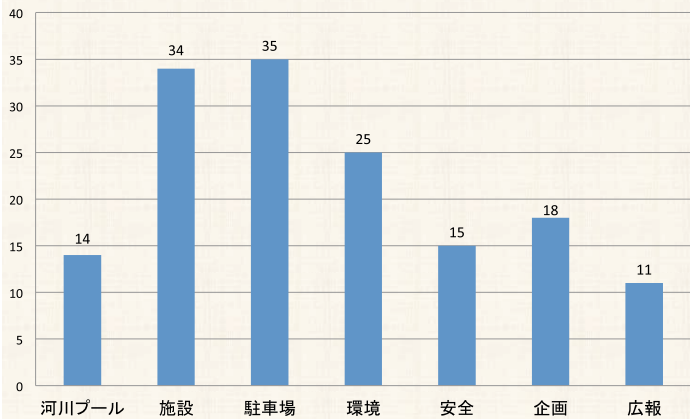
## 要因の影響度



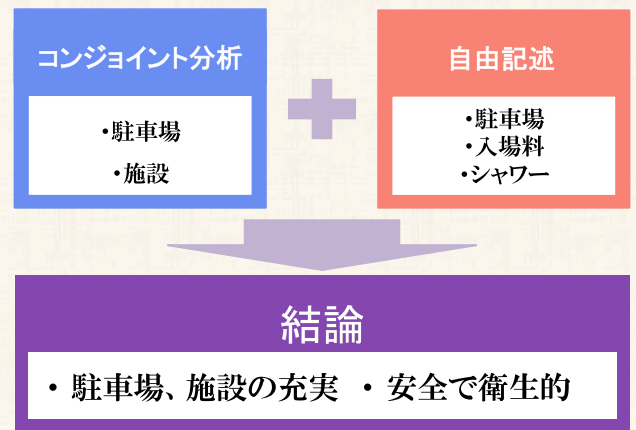
## 水準の回帰係数

要因	水準	係数	要因	水準	係数
プールの種類	河道内	0.000	シャワー施設	なし	0.000
	高水敷	0.123		冷水	0.439
周辺環境	都会的	0.000	サービス施設	温水	0.833
	田舎的	0.130		なし	0.000
	自然豊か	0.302		売店	0.312
駐車場	なし	0.000	併設設備	食堂	0.305
	無料	1.244		なし	0.000
	100円	1.009		公園・遊具	0.284
入場料	無料	1.219	宿泊施設	BBQ	0.068
	200円	0.630		なし	0.000
	500円	0.000		キャンプ場	0.251
			ログハウス	0.255	

## 内容別意見数



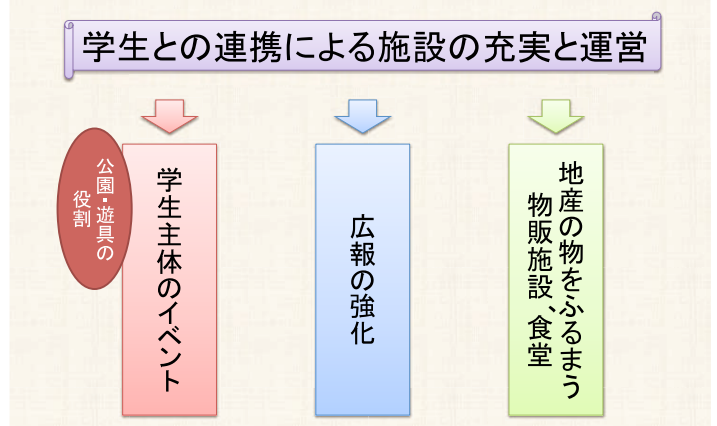
## アンケート調査 まとめ



## 豊後大野市ふるさと体験村の魅力と改善点

魅力	改善点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の水準</li> <li>「高水敷」</li> <li>「自然豊か」</li> <li>「温水シャワー」</li> <li>「ログハウス」</li> <li>・施設全体がコンパクト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・売店が備わっていない</li> <li>・河川プール以外の遊具がない</li> <li>・広報不足</li> </ul>

## 魅力向上案

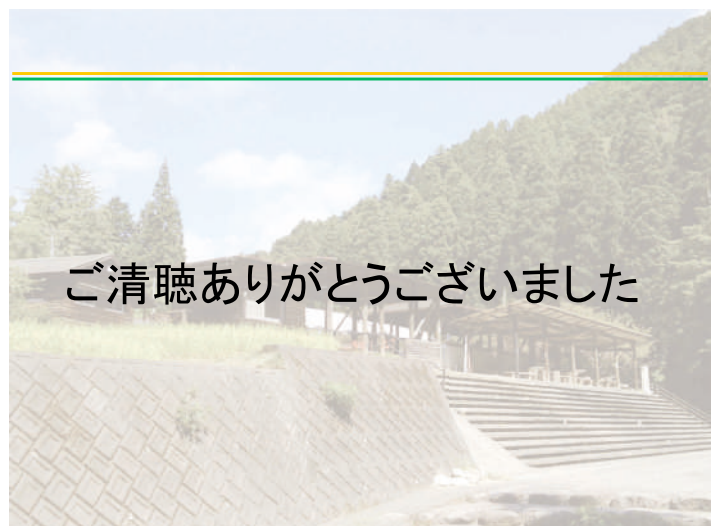


## 最後に・・・

### 本研究の課題

- ・河川プール以外に着目した魅力向上案の検討
- ・競合エリアの設定の妥当性

- ・協力していただいた方々
- ・豊後大野市役所担当者様
- ・土師振興協議会の皆様





## 1.はじめに

建築学科環境・地域創造コースでは、入学時より豊後大野市の旧大野町に位置するふるさと体験村周辺でさまざまな実習をしてきた。このふるさと体験村は柴北川に面しており、その河川敷には河川プールが整備されている。柴北川は、大野川の支流で、御座ヶ岳や光昌寺山などの山に囲まれているため、周辺には溪谷やダムなどがある。河川に流れている水の多くは、安藤・中土師地区から集まる<sup>1)</sup>。

柴北川には、ゲンジボタルなどの水生生物が生息しているが、地域住民の話によると年々個体数が減少しているという。また、河川プールは柴北川の出水時にプール内に土砂が蓄積するため、土砂の除去に多大なコストを要している。

ゲンジボタルの良好な生息環境を創り出し、河川プールへの土砂流入を防ぐには、柴北川の流況を明らかにすることが不可欠である。そこで、河道シミュレータ(iRICNays2DH)によって、流速と水深、土砂流動を求め、さらにその結果からゲンジボタルのHSIを算出した。

## 2.研究方法

調査は2014年10月11日に実施した。河川横断測量は、7.5mおきにトータルステーションで放射法を行う。アメダスデータから犬飼観測所における平成24年7月11日から14日の1時間あたりの降水量のデータ、および河川水文データベースより中土師降雨観測所の1955年～2013年の日最多降水量のデータを引用し、降雨波形を作成した。平均流出係数 $f$ は国土政策局HPより、100m間隔の土地利用メッシュデータと対象流域の流域メッシュデータを用いた。これらのデータから、合成合理式を用いて流量波形を作成した。洪水到達時間については、クラーク式を用いて算定した。

基本流量については、流量情報が得られなかったため、上流にあった堰から、流量公式を用いて実測水位の代替とした。

河道シミュレータによる解析は、2パターン作成した。一つは、基本流量のみで稼働させ、平常時の水深と流速から、SI(Suitability Index: 適正指数)を取得し、HSI(Habitat Suitability Index: 生息環境適正指数)を算出する方法と、九州北部豪雨のハイドログラフを用いた土砂移動のシミュレーションを行った。

水深と流速をSIに変換する際、関根ら<sup>2)</sup>が作成したHSC(Habitat Suitability Criteria: 生息場適正基準)を用いた。

## 3.研究結果

図-2にシミュレーションから求めた $t=2s$ における水深、流速および両者から求めたHSIである。図-2(a)は水深で、図-2(b)は流速、図-2(c)はHSIを示し、河

川は図の左から右方向に流れるように描かれている。

図-2(c)では、堰の上流や河川プール付近において、HSIが不適を示す0の地点が多くあることがうかがえる。考えられる理由として、図-2(a)には、所々水深が深い地点があるが、あまり変化は見られない。ゲンジボタルの幼虫の生息環境としては、良好であると考えられる。しかし、図-2(b)では、堰付近では、流速が早い、それ以降は、少しずつ減速していく。ふるさと体験村の河川プールの側を過ぎたあたりが最も減速し、その後、少しずつ加速していく。ゲンジボタルの幼虫の生息環境としては、流速が早すぎるため、SIが下がっている。

図-3と図-4に土砂移動のシミュレーションから得た結果を示す。図-3には、河川プールに水が浸入した時点での水深と流速を示す。図-4には、ハイドログラフがピークを示した時点の水深と流速を示す。これらの図から、河道が狭いため河川の水が河川プールに浸入している事が分かる。

図-3は、河川プールに水が浸入した時点 $t=10000s$ でのシミュレーション結果である。

図-3(a)は水深とベクトルが示されているが、上流の水深は低く、下流の水深が高くなっているが、これは、上流と下流で川幅が7mほど違うために起こったのではないかと考えられる。

図-3(b)は、流速を示しているが図-3(a)とは違い、上流で早く、下流でやや緩やかな流れとなっている。理由として、河川全体が緩やかな曲線を描いているため、減速したと考えられる。図-4は、ハイドログラフのピーク時 $t=30200s$ における流況である。図-4(a)では、川が氾濫状態にあることが分かる。図-4(b)では、堰のある上流と河川プールのある地点が早くなっていることがうかがえる。

## 4.おわりに

柴北川において、河川横断測量を実施し、様々なデータを用いてシミュレーションを行った。柴北川の流況を明らかにすることができた。その結果からゲンジボタルの幼虫が生息しやすい地点を明らかにできた。そして、河川プールを越流する流れを再現することもできた。

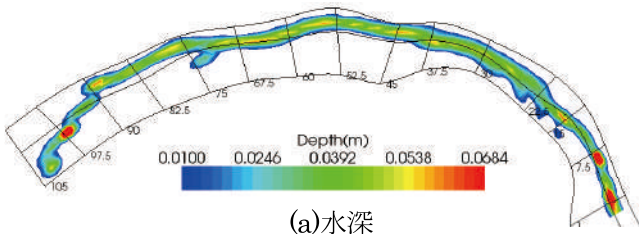
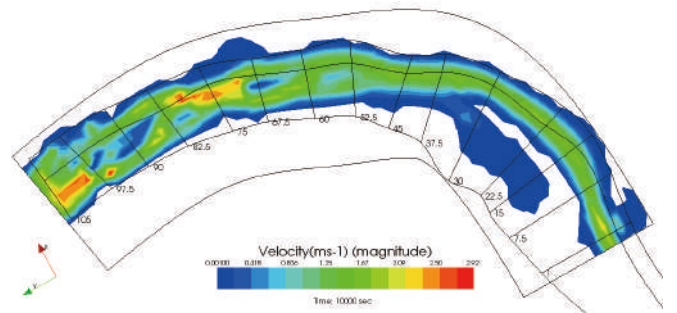
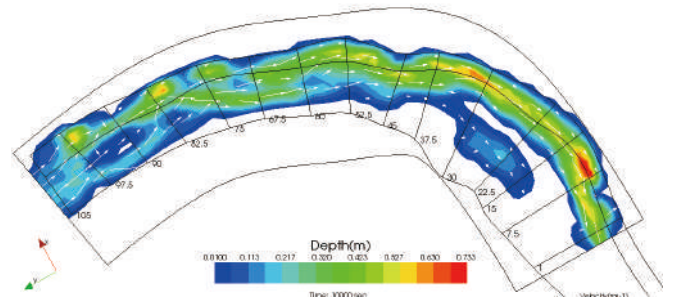
今後は継続的な調査を行うとともに、ゲンジボタルの繁殖地勢を明らかにするなど、実地調査を行うとともに、水深や流量だけではなく、水温や水質などの調査を行い、HSIモデルの正確性を高めていきたい。

土砂移動については、河川プールにどの地点から水が浸入するのかがわかったが、流砂がどれくらい流れてくるのかが、不明である。今後は、ADCPなどを使い、河川の形状を細かく把握したうえで、シミュレーションを行っていきたい。

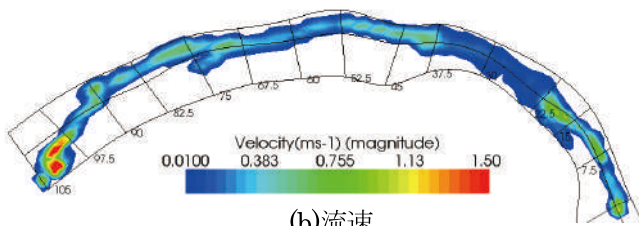
謝辞：調査にあたっては、中土師地区の方々には多大な協力をいただいた。

参考文献

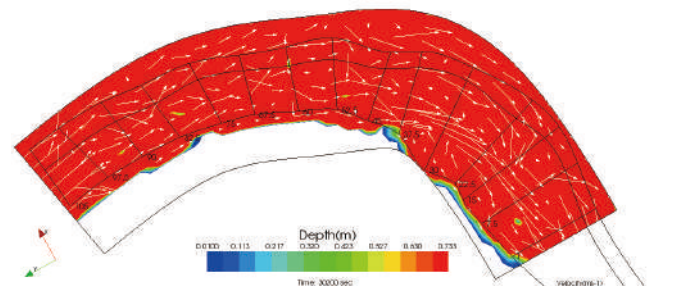
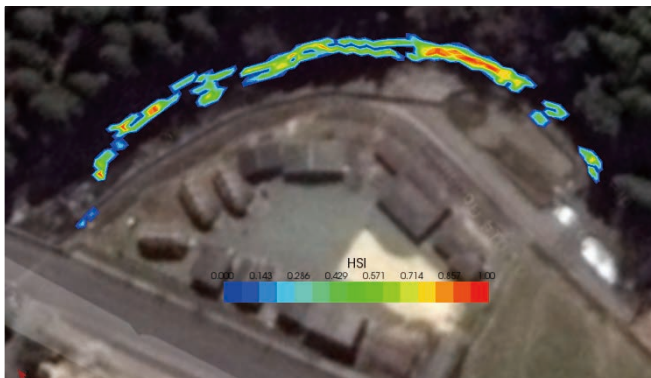
- 1)大野町史編集委員会：大野町史，大分県大野町史編集刊行会，1980，32-38
- 2)関根ら：生息場評価手法を用いたホタル水路の建設，応用生態工学，10(2)，2007，103-116，



(a)水深

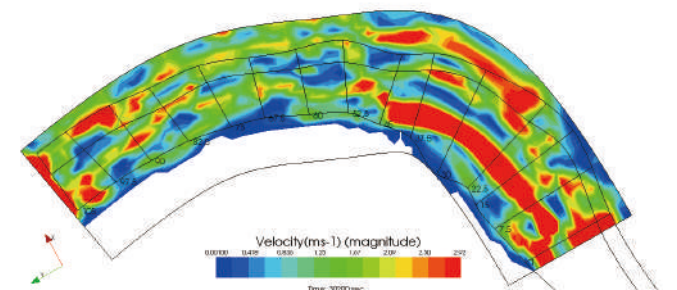
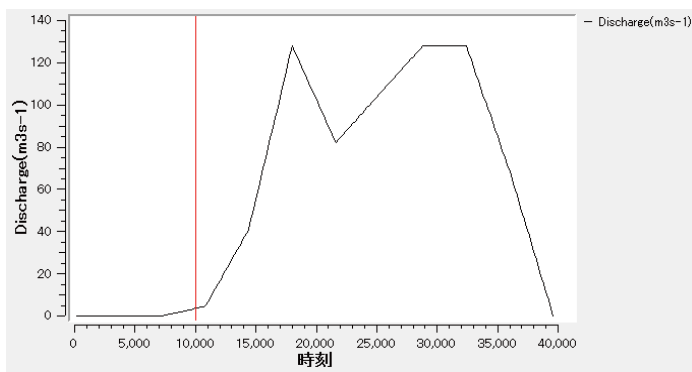


(b)流速



(c)水深と流速から求めたゲンジボタルの幼虫の HSI

図-2 基底流出量における流況(t=2s)



## 大分から始まる地域活性化への道 ～豊後大野・佐賀関の“祭り”に着目して～



経営経済学部 経営経済学科3年  
発表者 三田井沙織・渡口美幸  
指導教員 鍋田耕作・河村裕次

## 地域活性化に取り組むきっかけ

- ・ 講義でDVDを視聴

↓  
地域活性化について調べるように

- ・ 地域活性化のためには？

↓  
地域資源を活用したイベントが必要では...

↓  
そこで思いついたのが... “祭り”

## 地域活性化とは何か？

- ・ 『人口減少に一定の歯止めがかかっており、将来においても定住人口維持が可能』  
→ 活性化している市町村と捉える
- ・ 経済的要素, 社会的要素, 文化的要素, 空間的要素から測ることが重要

(農林統計協会[2010]「平成21年度地域活性化のための農業集落データ分析委託事業報告書」)

- ・ つまり, 地域活性化とは...

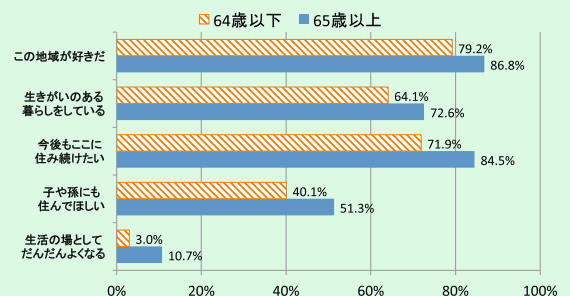


## ○住民にとっての地域活性化とは？

- ・ 地域活性化とは  
→ 地域の暮らしを支えるコミュニティの回復
- ・ コミュニティのあり方を踏まえることなくしては、地域に暮らす人々にとっての地域生活の質向上にはつながらない

(野津彩子[2009]「祭り継承と地域活性化－長野県飯田市南信濃木沢おける霜月祭り継承の実践から」『人間科学研究』, p10)

## 地域意識・生活意識の状況



(出典: 高野和良[2015]「過疎地域のコミュニティを支えるために－小規模化する世帯の増加からみえてくる課題」『月刊福祉2015年3月号』p28)

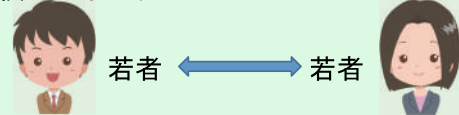
## なぜ祭りなのか？

- 祭りは文化伝承の場

- 伝承  
縦のつながり



- 横のつながり

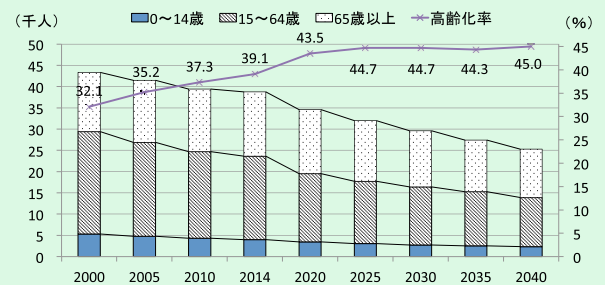


## なぜ祭りなのか？

- 祭りは文化伝承の場
- 伝承を通じ、人間関係・結束力を再認識できる  
→ 共同体を再認識

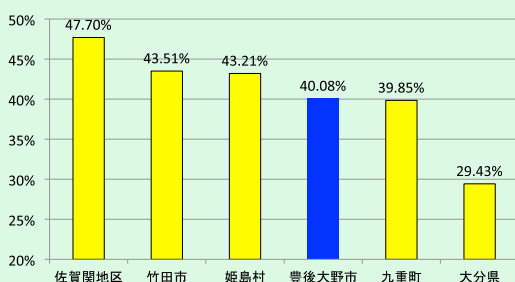
祭りを通じて、日本に昔からある相互扶助、結い等の古き良き習慣を取り戻せるのでは？

## 現状～豊後大野1



## 現状～豊後大野2

高齢化率(2014)



(大分県の人口推計【年報】平成26年版、大分市の統計平成26年9月末)

## 現状～豊後大野3

- 主な祭り  
夏は「らいでん祭り」、冬は「ひょうたん祭り」等

祭りを通じてコミュニティのあり方について一緒に考えていきませんか？

## 今後の調査予定について

- アンケート調査

日時 2015年5月ごろ

対象 住民(豊後大野市及び佐賀関に在住)

内容 祭りに対する意識調査

## 小規模小中学校における予防的心理教育の導入について

日本文理大学経営経済学部准教授  
大分県スクールカウンセラー・スーパーバイザー  
高橋淳一郎

### はじめに

スクールカウンセラー(SC)の立場から見てきた中で、朝地小中学校の児童生徒を取り巻く環境として以下の点が挙げられる。

- ①各学年とも1クラスでクラス替えがないため、人間関係が固定化されている。
- ②人数が少ないため、社会性を学ぶ機会が限定されている。
- ③小学校と中学校が同一の敷地内にあるため、連携が取りやすい。

上記①に関して、児童期において拒否される地位にある子どもはその地位が固定されやすいことが研究で示されており、長期的な不適応の原因になる可能性があります。②に関しては、コミュニケーション能力を含む社会性が未熟となるため、中学校卒業後に大きな集団(たとえば高校入学や就職など)への環境移行の際に課題が生じる可能性があります。事実、私が三重総合高校にてSCとして勤務していた間にも、小規模中学校出身者に不適応の事例が見られました。③に関しては、同学年または同一学校内以外の場にもモデルが存在するという効果があります。

### 実施内容

上記の課題に対応するため、小学校1年生～中学校3年生で以下のような予防的心理教育を導入する。

学年	実施内容	実施頻度
小1～2	SST	2か月に1回
小3	SSTと対人関係ゲームを同程度ずつ	1か月に1回
小4～6	合同での対人関係ゲーム (4年生は3年生と合同も、5・6年生は中学と合同も)	1か月に1回
中1～3	合同での対人関係ゲーム	1か月に1回

※SST＝ソーシャルスキルトレーニング

### 見込める効果

1年だけにとどまらず、継続することによって社会性の発達と対人関係の流動化が起こる。これにより小中学校内での適応力と、卒業後の環境移行後における適応力の向上が見込める。

# インテリアデザイン科目 での取り組みとその周辺

発表者：近藤正一（工学部 建築学科）  
（<http://www.nbu.ac.jp/~kondo/>）

## インテリアデザイン科目での取り組みとその周辺

### 講演概要：

建築学科におけるインテリアデザイン教育では、具体的な敷地、建物の規模や用途などの条件を設定し、個人指導のもとで課題に取り組ませています。これまでに取り組んだ店舗デザイン（スペースデザイン）や家具デザイン（プロダクトデザイン）などの課題について、具体的なテーマと成果、インターネットを利用したスカイプなどの教育手法、その他の関連科目との連携、研究ゼミナール・卒業研究への発展などについて、ご報告します。

## 授業の様子1 （木材・住宅の現場を知る）



## 授業の様子2 （木材による椅子の制作）



## 建築学科の3つのコース

コースの選択は3年次 違うコースの科目も受講できる



## 授業の様子3 （イタリアからの遠隔授業）



## 講義室・CAD室・大判プリンタ・製図室



### コンピュータ を用いて制作 した作品事例

課題例：ミラノの百貨店  
に店舗をデザインする。  
1) スペースデザイン  
販売空間のデザイン  
2) プロダクトデザイン  
販売棚のデザイン

インテリアデザインは、  
「空間のデザイン」と  
「仕物のデザイン」とに  
分けられ、それぞれ特有  
の専門分野があります。







## 「地方大学におけるICTを活用したアクティブラーニング」

日本文理大学  
工学部建築学科 准教授  
(FD委員長・工学部教務委員長)  
近藤 正一 先生



日本文理大学は大分県にある。本校のような地方大学は大都市や他大学などとの「遠さ」が、人的交流や物的交流のネックになっている。例えば有名建築家などを非常勤講師に招いた授業を実施したくても、地方だとなかなか実現しにくい。そこで、これまでICT(情報通信技術)を導入することにより、地方大学の弱点を克服するための取り組みを実践してきた。

また、2005年ごろから「アクティブラーニング」という言葉が話題となっている。アメリカ国立訓練研究所が提示した「ラーニングピラミッド」では、従来の教員から学生への一方通行の講義は記憶率が5%であるが、グループ討論や体験学習、他人に教える経験などの方法を採用すると、記憶率は50~90%に高まる。このように学生が能動的に授業に参加する教育方法をアクティブラーニングと文部科学省では定義している。

これまでの大学は主として「知識を習得する場」だったが、将来の社会が予測困難な現代において、大学はさらに「知識活用能力を養成する場」としても機能しなければならない。つまり勉強の仕方や問題解決の方法を身に付けさせることが必要なのだ。そこでアクティブラーニングの出番となる。

アクティブラーニング型授業は座学に比べて手間がかかり、学生も楽しんで学べる半面、学習のスピードが遅い、概念を知識や経験と関連付けて理解する「ディープラーニング」が十分に行えないという問題もある。アクティブさとディープさを両立させるラーニングが理想だ。

本学では、アクティブラーニングに対応できるように、全科目に「人間力の育成」を明示するとともに毎回学修課題を与えるよう、シラバスを改訂した。さらに授業中に学生からフィードバックを受けられるように「クリッカー」という教育設備を導入した。

クリッカーとは、テレビのリモコンのような装置で、教室の学生全員に配る。「先生が出した問題に答える」「授業中に分からなくなったらボタンを押す」「テストを行う」などいろいろ使い方がある。例えば、講義内容が分からないというボタンが多く押された時刻から、先生は講義のどの部分が分かりにくかったのかを知ることができ、後で教え直せる。

先日、地元の高校生を対象に建築の公開講座を行った。その時、講義の前と後に建築に対する興味について、クリッカーでアンケートを採った。講義前は建築に「少し興味がある」という答えが一番多かったが、講義後は「詳しく勉強してみたい」が一番だった。「かなり好き」「建築にすべてをささげたい」という回答も5割以上増えた。

また、「ビデオ・オン・デマンド」というシステムも導入している。講義内容をビデオに撮って、サーバからインターネットを通じて学生に配信するものだ。大分県には合計8つの大学・短大・高専があり「よのまなびコンソーシアムおおいだ」という教育事業を行っている。各大学がビデオ講座のコンテンツを作り、8大学の間で共有するものだ。

インターネットで映像や音声を送れる「スカイプ」も教育に活用している。例えばイタリア在住の建築家、安田光男氏に3年生向けに「インテリアデザイン」の講義をスカイプで行っていただいている。日本とイタリアの間には時差があるので、安田氏には早朝からスーツを着て講義してもらうなどの負担もあるが、学生一人ひとりに丁寧に教えてくださっている。

スカイプによる授業では、事前に、学生は先生に制作した課題をメールで送らなければならない。そのため、自然にCADの操作が身に付くのも利点だ。また、面識のある先生であればお願いして、世界中、どこからでも授業を行ってもらえる。最近ではインターネットの回線状況もよくなってきたので、地方大学ではスカイプはきわめて有効な教育ツールになっている。

このほか専門教育での活動で、例えば大分県在住のデザイナー、松岡勇樹氏によるVectorworksでオブジェを設計し、レーザーカッターで部品を切り出して組み立てるといった取り組みや、大分県在住のデザイナー、下島啓吾氏による山林体験、工房訪問、付属医療専門学校研修など、ICTを活用しつつ地方大学の地の利を最大限に生かしたプロダクトデザイン教育などを実施している。また、校舎の階段を実測してVectorworksで製図することと同時にBIMで断面構造を理解させるなど、CADの導入教育と建築の基礎製図の授業を合体させる取り組みも推進している。

これらの成果をその他の通常の授業に活用していくことで、さらに全学的かつ本質的なアクティブラーニングが展開できると考えている。これからもアクティブラーニングの手法によりクラフトデザインとCADとを融合した専門教育を進化させ、敷衍(ふえん)し普及させていきたいと考えている。



「クリッカー」を使用した授業の例



「スカイプ」でイタリアと日本をつないで行った授業の例

# プライバシーに配慮した 高齢者の見守り技術

- ・地域の高齢化
- ・見守り支援の技術
- ・プライバシー

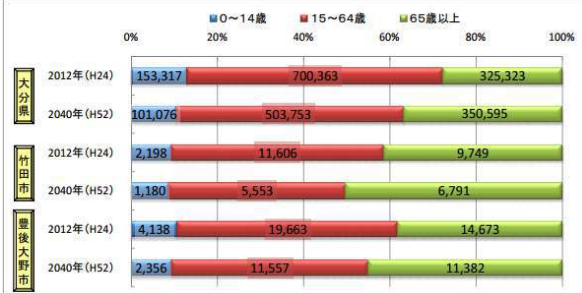
平居 孝之  
 稲川 直裕  
 高見 大介  
 平居 宏康

## 目次

- ・地域をとりまく状況
- ・見守りシステム
- ・試験の内容
- ・試験の結果
- ・まとめ

## 地域をとりまく状況：過疎高齢化

出典：大分県豊後保健所



■高齢化率 26年度  
 大分県全体：29.4%  
 豊後大野市：40%

## 地域をとりまく状況

- ワンボードコンピュータ
- ・小規模開発可能
- 地域で開発
- 地域にあわせたシステム



出典：株式会社KDDI

- 無線インターネット普及
- ・少ないインフラコスト
- 過疎地を繋ぐ
- 継続的な支援

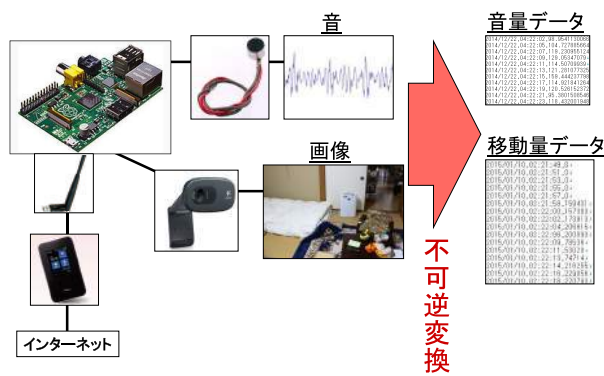
## 地域をとりまく状況

### ■高齢者見守りの現場

- ・人手が足りない
  - ・自動化技術で支援
- ・自動化課題
  - ・プライバシー(聞き取り調査)
  - ・監視されている気がする
- ・コスト
  - ・通信料金が高額

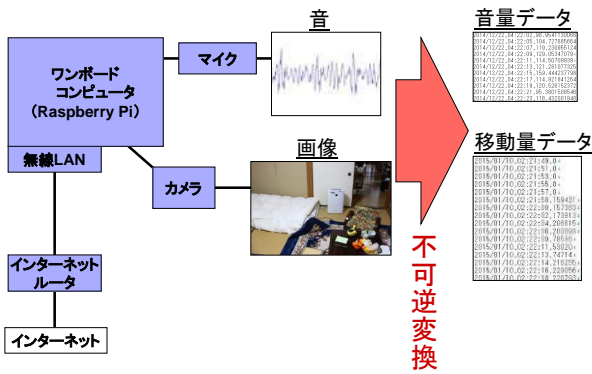


## 見守りシステム



## 見守りシステム

7



## 見守りシステム

8

### ■特徴

- 警告の自動送信
  - 生活パターンが大きく**変化した時**
- 絵、音は残さない
  - 動いた量、音量のみ**
  - プライバシーの保護
  - 少ない通信量
- 通信費を抑える
  - 実験時の通信費は1戸2000円/月
  - 最終的に1戸300円/月を想定

### 音量データ

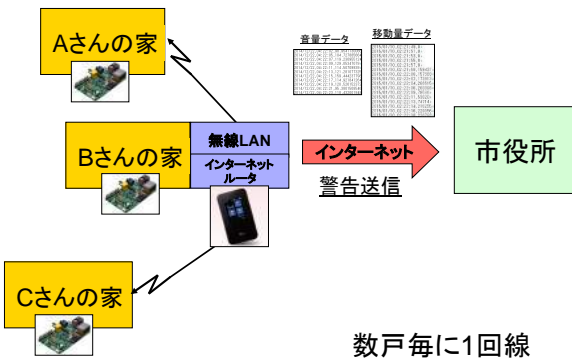
```
2014/12/22,04:22:05,98,8641130060
2014/12/22,04:22:05,104,727856624
2014/12/22,04:22:07,118,230951124
2014/12/22,04:22:09,129,053470761
2014/12/22,04:22:11,114,507098994
2014/12/22,04:22:13,121,281077325
2014/12/22,04:22:15,158,444237768
2014/12/22,04:22:17,114,491941294
2014/12/22,04:22:19,120,528153972
2014/12/22,04:22:21,95,390159846
2014/12/22,04:22:23,116,432001949
```

### 移動量データ

```
2015/01/10,02:21:49,0
2015/01/10,02:21:51,0
2015/01/10,02:21:53,0
2015/01/10,02:21:55,0
2015/01/10,02:21:57,0
2015/01/10,02:21:58,158431
2015/01/10,02:22:00,173959
2015/01/10,02:22:02,173813
2015/01/10,02:22:04,208815
2015/01/10,02:22:06,208060
2015/01/10,02:22:09,28549
2015/01/10,02:22:11,520239
2015/01/10,02:22:13,747141
2015/01/10,02:22:14,216256
2015/01/10,02:22:16,222054
2015/01/10,02:22:18,229705
```

## 見守りシステム

9



## 試験の内容

10

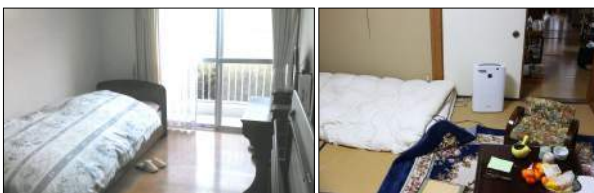
- プライバシーを優先しながら実用できるか
- 実地試験
  - データを収集
  - 実際に高齢者の方を見守りながら**試験** (介護施設、一人暮らしの高齢者宅)
- 動画、音声と変換データが
  - 対応しているか見比べ
  - 対応部分があれば利用可能性**有り**

## 試験の内容: 対象

11

### ■設置

- 生活の中心に設置
- 対象者が**必ず映る**場所



介護施設

二人暮らし

1ヶ月間データ収集

## 試験の内容

12

### ■動画変換の様子



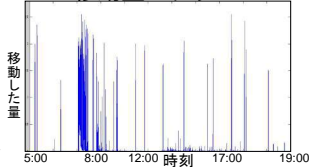
試験の結果:介護施設データ

13

移動量のデータ

2015/01/10 02:21:49	0+
2015/01/10 02:21:51	0+
2015/01/10 02:21:53	0+
2015/01/10 02:21:55	0+
2015/01/10 02:21:57	0+
2015/01/10 02:21:59	156481
2015/01/10 02:22:00	1573953
2015/01/10 02:22:02	1798131
2015/01/10 02:22:04	2088185
2015/01/10 02:22:06	2008095
2015/01/10 02:22:08	1785591
2015/01/10 02:22:11	1630534
2015/01/10 02:22:13	174714
2015/01/10 02:22:14	2162351
2015/01/10 02:22:18	229961
2015/01/10 02:22:19	2297261

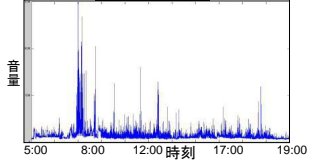
移動量のグラフ



音量データ

2014/12/22 04:22:03	88	9541	189059
2014/12/22 04:22:05	104	32789564	
2014/12/22 04:22:07	119	23985124	
2014/12/22 04:22:09	129	35347079	
2014/12/22 04:22:11	114	50708889	
2014/12/22 04:22:13	121	281077325	
2014/12/22 04:22:15	156	44492798	
2014/12/22 04:22:17	114	921841264	
2014/12/22 04:22:18	109	52015372	
2014/12/22 04:22:21	85	380150848	
2014/12/22 04:22:23	116	452001948	

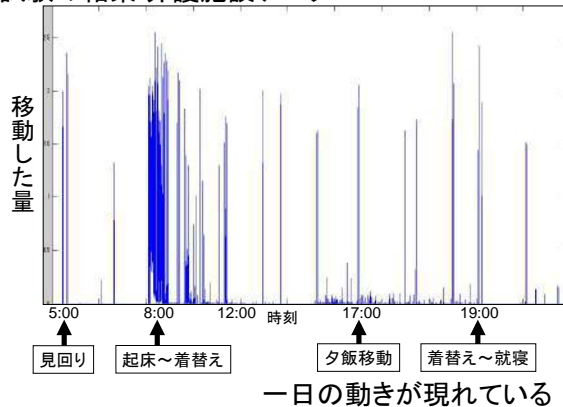
音量のグラフ



分析

試験の結果:介護施設データ

14

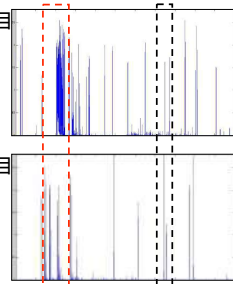


一日の動きが現れている

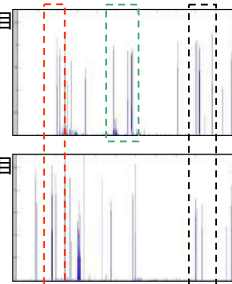
試験の結果:介護施設データ

15

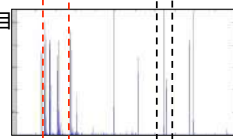
1日目



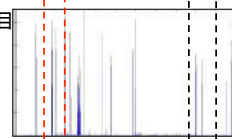
3日目



2日目



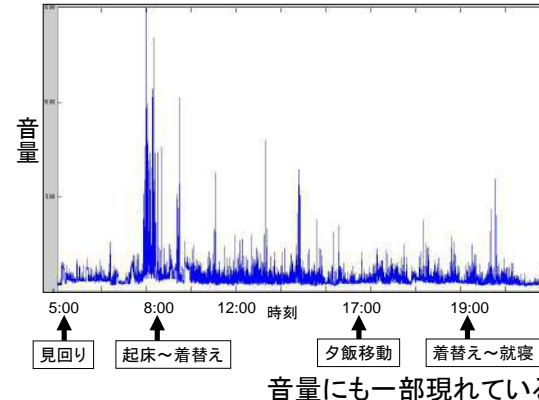
4日目



日常のパターンが現れている

試験の結果:介護施設データ

16

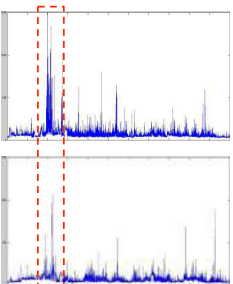


音量にも一部現れている

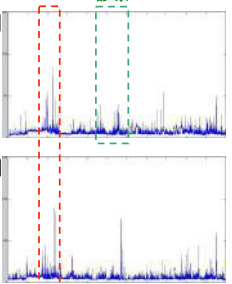
試験の結果:介護施設データ

17

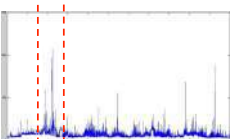
1日目



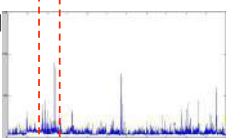
3日目



2日目



4日目



音量にも一部現れている

まとめ

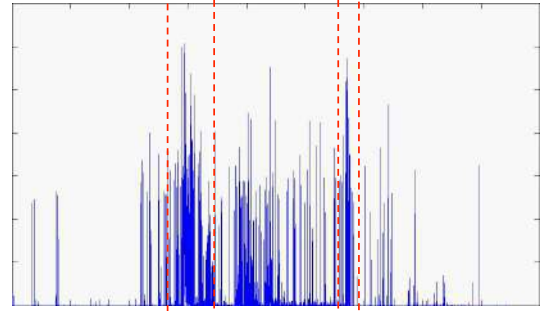
18

■結果

- ・プライバシーを優先したデータを収集
- ・日常の動作パターンを確認できた
- 異常検知可能
- ・1ヶ月間連続運転
- ・安い機材で長時間の画像処理に成功
- 地域発での開発、実用化に向けて

支援の実現可能性有り

質疑: 行動パターン平均



- ・濃い部分  
強くパターンが出ている部分がある  
相互相関を使ってパターン化

質疑: 携帯エリア



出典: 株式会社KDDI  
ピンクが無線インターネット利用可能  
豊後大野市も広い範囲をカバー

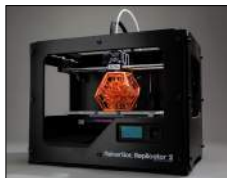
質疑: 今後

- ・警告の送信機能
  - ・多くの実地試験
  - ・送信先のソフトウェア準備  
サーバ、クラウド、セキュリティ
- ・即応性の向上
  - ・突発的な緊急時に即時警告送信はできない  
センサーの追加(気圧、気温、振動)  
アルゴリズムの改善
- ・事業化



質疑: 3Dプリンタ

- 3Dプリンタの活用
- ・学内に3台  
学生が活用中
- ・自分達で試作可能  
小規模開発  
地域で開発



質疑: 端末

■コスト

・開発機材

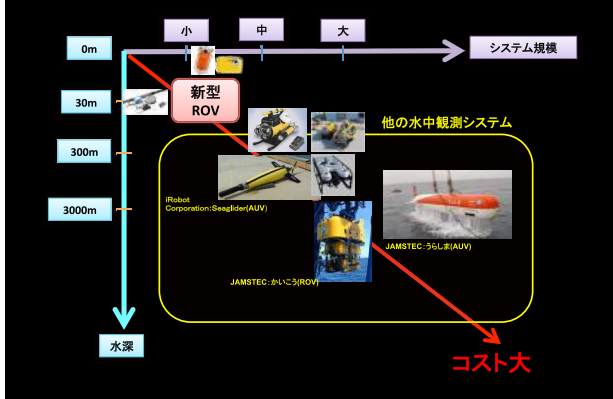
項目	単価	個数	小計
開発ボード Raspberry Pi	4,700	1	4,700
Wi-Fi端末	1,800	1	1,800
PC用カメラ	1,100	1	1,100
USBハブ	1,500	1	1,500
		合計	9,100



- ・中古スマートフォンの活用
  - ・スマートフォン1個に全て内蔵  
3,000円程度で入手可能



## 従来機との比較(住み分け)



## 仕様設計

### ■性能設計

コンパクト性	水中観測機(ROV)本体、ケーブル(信号線、電源線)、基地局トランクケース、GAS発充電機
独自電源	GASエンジン発充電機
稼働時間	カセットコンロボンベ2本で2時間程度
稼働可能水深	約30m
カメラ+LED	水中動画映像リアルタイムモニタリング (video出力)、HD録画、強力な水中照明機能を有する
操作方法	操縦用コントローラ
振揺方向	ジョイスティックによる手動操縦(素人でも操縦可能)
基地局	前後進、左右旋回、浮上、潜航
セットアップ時間	現場到着から本体水中投下までの所要時間 3分以内
運用開始まで	運用開始まで5分以内
最低運用人数	1名

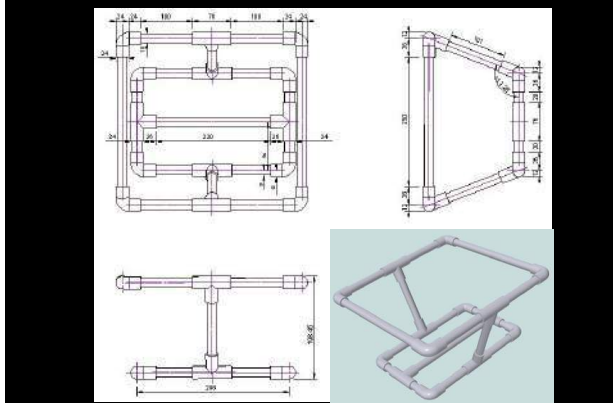
### ■特徴

- ①電源: 900wカセットガス携帯用発充電機
- ②照明: 超高輝度300wLEDアレイ(14000lm)×4unit
- ③録画: Full HDカメラ 視野角170度
- ④操縦: マイコンによる操縦支援システム

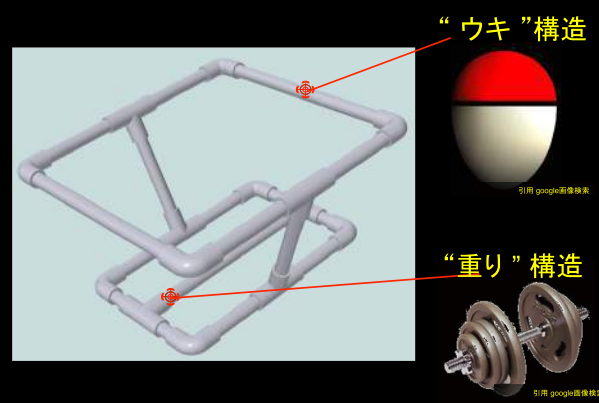
### ■本体仕様

項目	仕様	単位	
本体	縦	350	mm
	横	290	mm
	高さ	200	mm
	質量	2.7	kg
ケーブル	ケーブル長	29.8	m
	筐体材料	耐衝撃性強化ビニール管	
モータ	電圧	2	A
	電圧	48	V
	モータ搭載数	4	個
	映像素子	1/3 SONY SUPER HADCCD	
カメラ	有効画素数	41万画素	
	水中検査速度	NTSC標準	
	TV方式	S401V本	
	カメラ型	照射距離 5m(水中)	
	対水圧	10m以内	m
	レンズ	6	mm
	動作温度	-10℃~50℃	
	動作方式	内蔵同時	
	電流	DC12V 140mA	
	全体寸法	φ30×70(D)	mm
カメラ重量	70	g	
照明	超高出力LED素子 4個	max出力 1200W	
	(通常は200Wで使用)		
移動速度	3w x 10000dpiライオン 388mA電流 GA 北京 14500rpm/min		
		0.5~1m/sec	

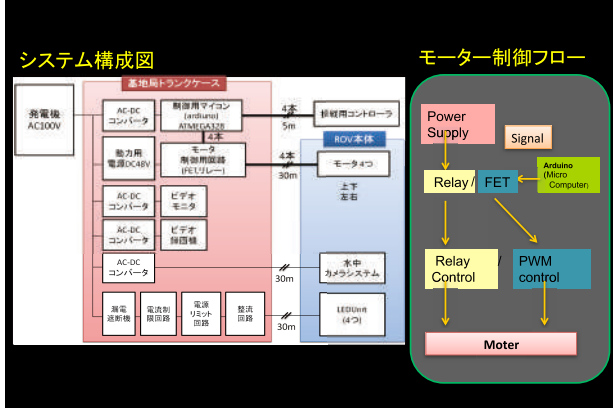
## 3D CADによる構造設計



## 「ウキと重りの原理」による独自構造



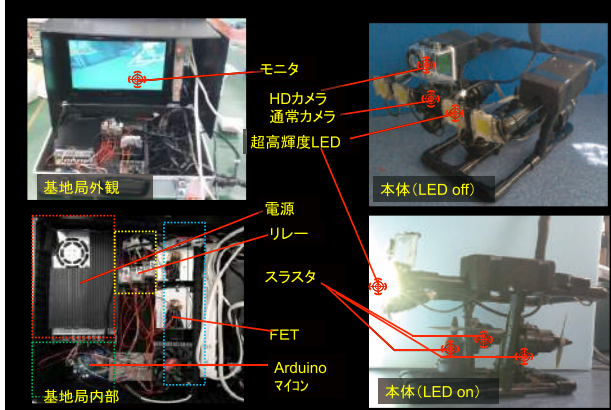
## システム構成



## 製作工程



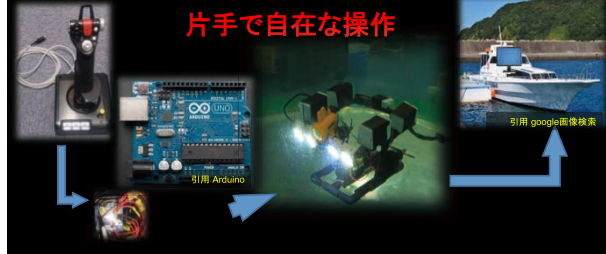
## 基地局とフレーム本体



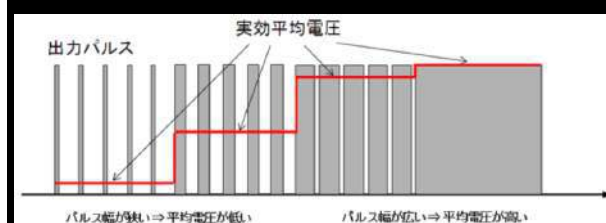
## 組込技術

- ・水深50m潜水可能
- ・強力なLED、フルハイビジョンカメラ搭載
- ・PCレス、起動は1~3秒
- ・基地局にマイクロコンピュータを搭載

片手で自在な操作



## PWM制御

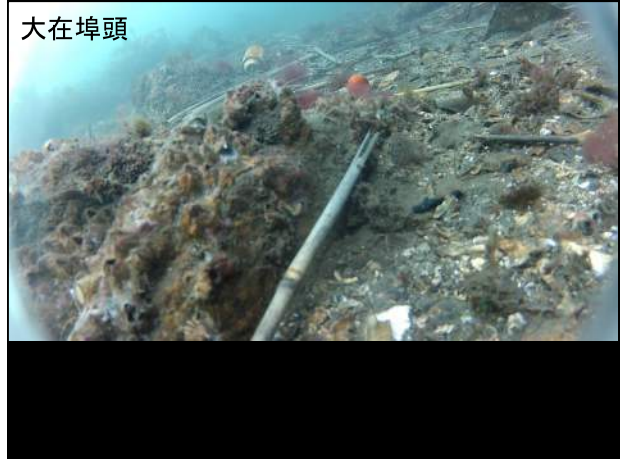
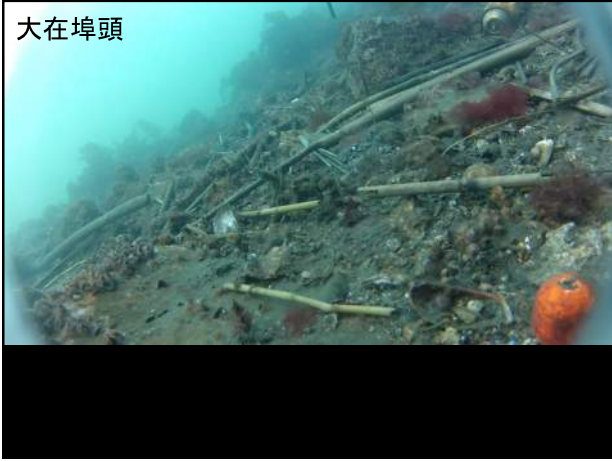


引用  
<http://www.altera.co.jp/products/cpld/functions/pwm.html>

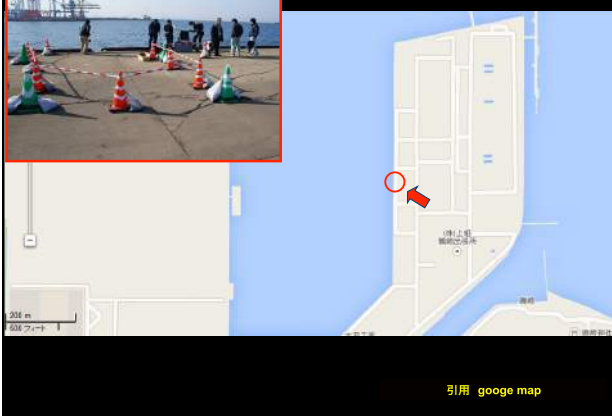
★ 8bit 4ch(PWM) + 1bit 4ch(リレーシーケンス)



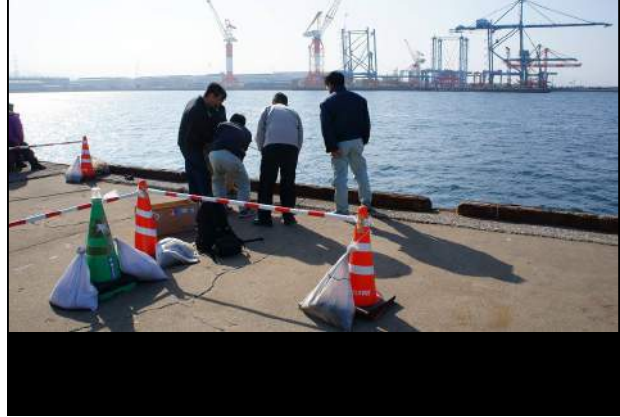




日吉原コンテナターミナル



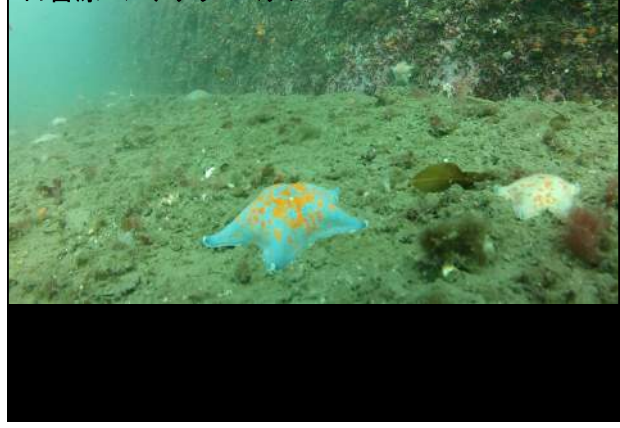
日吉原コンテナターミナル



日吉原コンテナターミナル



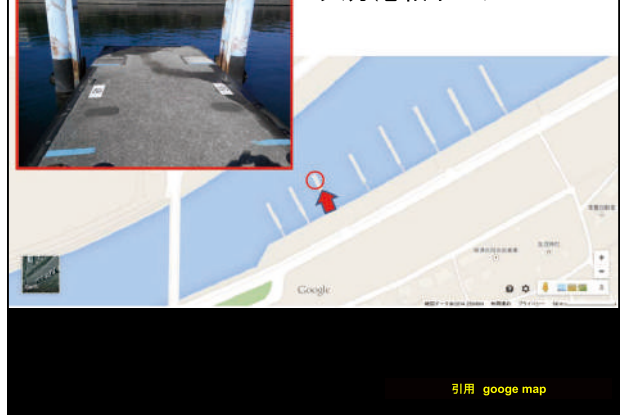
日吉原コンテナターミナル

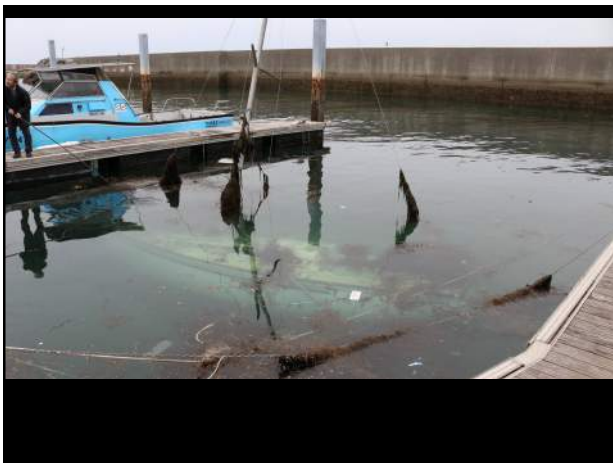
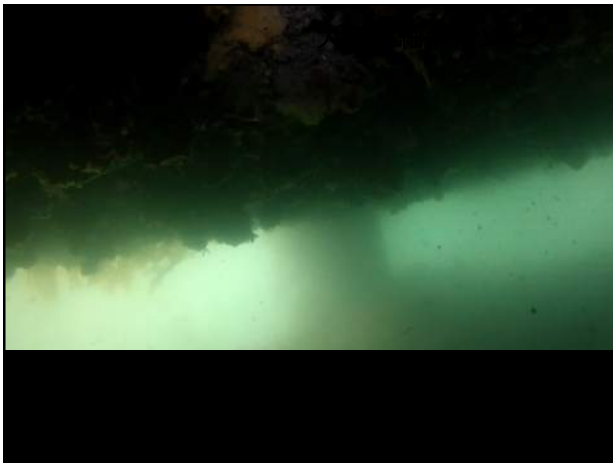


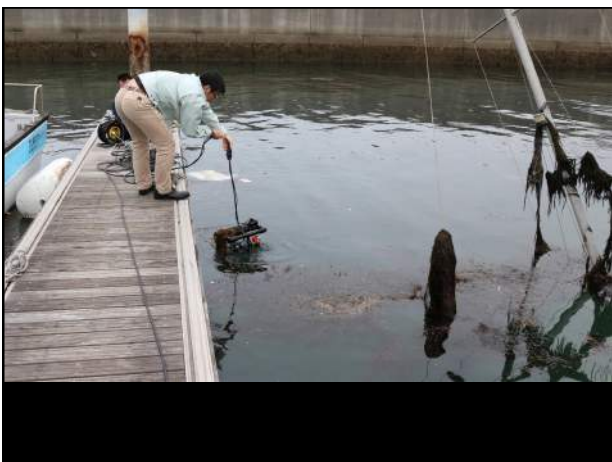
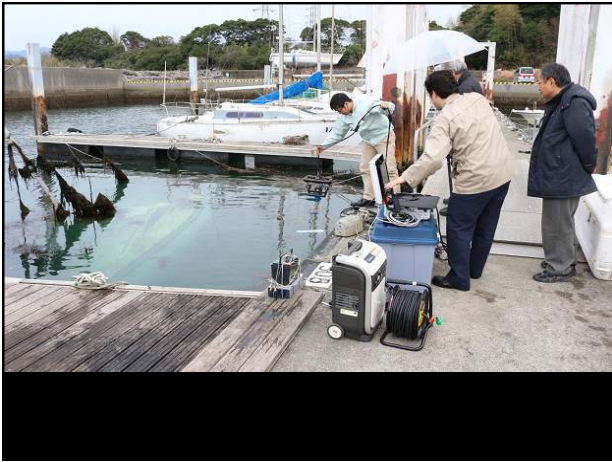
日吉原コンテナターミナル



大分港細ポンツーン







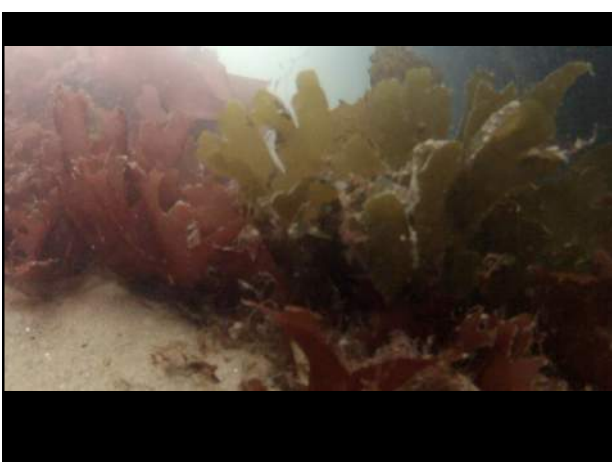
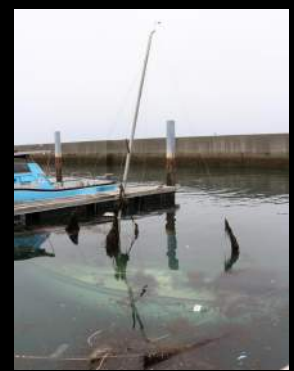
### 寒波によるシケで沈没?

天気 気象 海水温度

2月14日(金)	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23

引用 weather news

The image shows a weather forecast for Japan, including a map of the country with weather icons for various regions. The text '寒波によるシケで沈没?' (Sinking due to a storm caused by a cold wave?) is written in yellow. The forecast table shows dates from February 13th to 23rd. The map highlights weather conditions across different parts of Japan, with icons for sun, clouds, and rain.





### 実証実験・報道実績





8月15日(金)11:00~12:00  
OCT「もぎたて情報局」にて放送

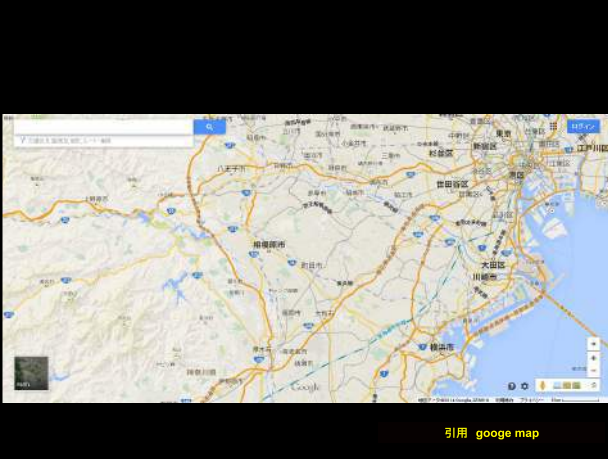
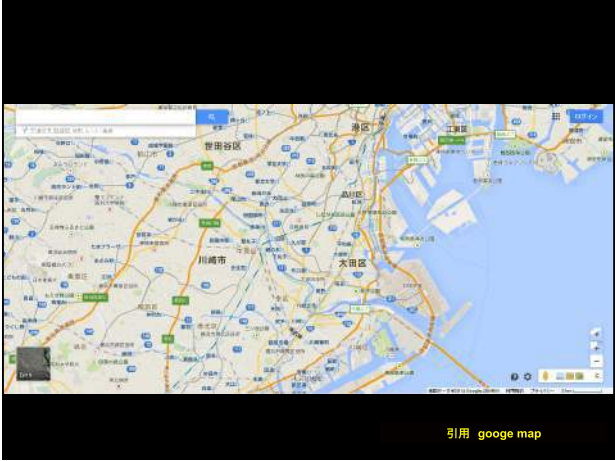
引用 OCT「もぎたて情報局」



# 稲積水中鍾乳洞



# 稲積水中鍾乳洞







本日の流れ

- 1)はじめに
  - ・正課外の必要性
- 2)豊後大野大寒地区における民泊農業体験
  - ・大人の視点、若者の視点
- 3)おおいたチャレンジアワードin豊後大野
  - ・地域社会への帰属意識
- 4)大人と若者の共生
  - ・現在の若者に必要なもの

1)はじめに  
(正課外活動の必要性)

- ・正課授業 ⇒ 単位認定の対象となっている授業
- ・正課外活動 ⇒ 単位認定のない学生の社会的実践活動

・正課外活動の魅力  
社会的・職業的自立を促すための教育活動 文部科学省HPより

仲間とのチームワーク + 学び(専門力)の必要性

社会での自分の居場所

地域社会に興味を持ち、地元の地域社会で輝きたい！  
と心から思える若者をつくる教育を行いたい。

**人間力教育による地域創生人材**

2)おおいたチャレンジアワードin豊後大野  
(大人の視点・若者の視点)

おおいたチャレンジアワード  
・冒険内容  
開催期間 H26. 12月25～26日  
場所 豊後大野ジオパーク  
人数 6名  
活動詳細 ルートマップを作製、自転車で探索

教育効果  
・計画的な行動  
・チームワーク  
・地域の資源や人に対する興味

学生の声  
地域住民の応援が嬉しかった…  
住民の声  
自分も若返ったきがした！

**相互理解**

3)豊後大野大寒地区における民泊農業体験  
(地域社会への帰属意識)

民泊・農業体験  
・活動内容  
開催期間 H26. 9月25～現在  
場所 大寒地区  
人数 20名  
活動詳細 農業・下草刈り・イベント等

教育効果  
・第一次産業への理解  
・地域コミュニティへの参加  
・地域住民と共に生きる事の喜び

学生の声  
幸せって何か…  
住民の声  
子育てでは出来なかった事…

**共生社会**

3)大人と学生の共生地域豊後大野  
(現在の若者に必要なもの)

仲間とのチームワーク + 学び(専門力)の必要性

社会での自分の居場所

☆2つの取り組みで学生が得たもの、芽生えたもの  
・物事の本質をとらえる目・飽くなき探究心

現在の若者に決定的に足りないもの…3つの間

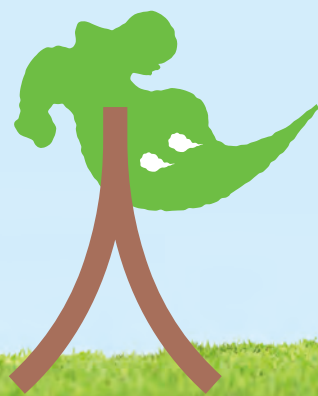
・時間 (チャレンジアワード)  
・空間 (民泊農業体験)  
・仲間 (地域住民)

**若者たちと素晴らしい仲間になって下さい!!**





## 12. 大学 COC 事業関連 メディア掲載・放映情報 一覧



大学COC事業関連 メディア掲載・放映情報 一覧(平成26年度)

放映日時・掲載日	メディア名	タイトル	出演・掲載者名等
10月21日	大分合同新聞(朝刊)	子どもたちの夢膨らむ 文理大で「お仕事体験ランド」	一木祭「お仕事体験ランド」
10月21日	西日本新聞	10種類の職業体験小学生120人楽しむ 日本文理大で催し	一木祭「お仕事体験ランド」
11月1日	大分合同新聞(朝刊)	文理大 全学的カリキュラム導入へ 地域振興 学生も 県、2市と協力	大学COC事業
11月7日	大分合同新聞(朝刊)	ユネスコエコパーク 宮崎県と登録めざせ 県・3市申請範囲広げPR	建築学科 杉浦 嘉雄 教授 (祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会会長)
11月11日 17:53~19:00	TOSテレビ大分「TOSスーパーニュース」	「チャレンジOITA人材育成フォーラム2014」開催	大学COC事業
11月25日	大分合同新聞(朝刊)	地方で活躍できる人材を育てよう 文理大がフォーラム	大学COC事業
12月4日 17:30~18:00	OCT大分ケーブルテレビコム「もぎたてプラス～OITAタウン情報～」	「おおいた人権フェスティバル佐賀関」併設イベント「お仕事体験ランド」	人間力育成センター
1月13日	大分合同新聞(朝刊)	自転車で冒険50キロ 文理大生豊後大野の見学地走破	人間力育成センター
1月16日	ぶんごおおのケーブルテレビ「なないろ情報チャンネル週間！情報トレイン」	豊後大野のジオパークを自転車で巡る旅	人間力育成センター
1月24日	大分合同新聞(朝刊)	人材育成など 文理大と豊和銀が連携協力協定締結	-
1月24日 17:00~	琉球朝日放送「海が僕らのフィールド～海洋ロボット開発に挑む若者たち～」	沖縄海洋ロボットコンテスト・プレ大会	機械電気工学科 稲川研究室
1月26日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビコム「もぎたてプラス」	豊和銀行との連携協力協定締結調印式	-
2月4日	大分合同新聞(朝刊)	身近な環境、理解深める 水中観測ロボ研究発表整備工事 自然と調和を	機械電気工学科 稲川 直裕 准教授
2月5日	大分合同新聞(朝刊)	祖母傾エコパーク 17年の登録目指す 祖母傾ユネスコエコパーク大分・宮崎推進協議会 佐伯で初会合	建築学科 杉浦 嘉雄 教授
2月5日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビコム「もぎたてプラス」	佐賀関公民館「水中観測ロボットの開発」について講演	機械電気工学科 稲川 直裕 准教授
2月9日	大分合同新聞(夕刊)	トマト収穫ロボ文理大全国3位 労働者不足の現場に生かせ！	機械電気工学科 武村研究室、武村泰範 准教授
2月15日	大分合同新聞(朝刊)	佐賀関どう活性化？文理大生と住民が意見交換(「チャレンジOITA地域創生人材講座」)	大学COC事業
2月17日 18:15~18:55	OBS大分放送「OBSイブニングニュース」	「第1回トマトロボット競技会」遠隔操作部門で全国3位	機械電気工学科 武村研究室
2月19日 17:30~18:00	OCT大分ケーブルテレビコム「もぎたてプラス～OITAタウン情報～」	チャレンジOITA地域創生人材講座2015in佐賀関	大学COC事業
2月24日	大分合同新聞(朝刊)	文理大生、豊後大野市で研究活動 体験村の魅力向上策報告	大学COC事業
2月25日 17:54~19:00	TOSテレビ大分「TOSスーパーニュース」	「おおいたものづくり王国総合展」水中観測ロボット	機械電気工学科(稲川研究室)水中観測ロボット

## 大学COC事業関連 メディア掲載・放映情報 一覧(平成26年度)

放映日時・掲載日	メディア名	タイトル	出演・掲載者名等
2月26日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ「もぎたてプラス」	佐賀関クロメ漁ニュース 水中撮影協力:稲川研究室水中ロボット	機械電気工学科 稲川研究室水中観測ロボット
2月27日 7:00~8:00他	ぶんごおおのケーブルテレビ「なないろ情報チャンネル週間!情報トレイン」	「チャレンジOITA地域創生活動報告会2015in豊後大野」	大学COC事業
3月3日 17:30~18:00他	OCT大分ケーブルテレビ「もぎたてプラス」	「第9回関崎シーサイドウォーキング」に人間力育成センター有志学生が参加	人間力育成センター学生
3月17日	大分合同新聞(朝刊)	全国「道の駅」連と文理大 体験実習で協定	-

文理大、11日に人材育成フォーラム

日本文理大学(大分市)は11日午後1時から、人材育成フォーラムを同市のホルトホール大分で開く。参加者を募集している。無料。

文理大は本年度、文部科

京都大学高等教育研究開

学省が地域とともに教育や社会貢献に取り組む大学などを支援する「地(知)の拠点整備事業」に選ばれた。

発推進センターの溝上慎一教授が基調講演。県外の事例報告、同大学の学生や県立高校の教諭らによるパネ

ルディスカッションもある。問い合わせは日本文理大学(☎097・524・2704)。

## 文理大 全学的カリキュラム導入へ

# 地域振興学生も

日本文理大学(大分市、平居孝之学長)は大分県や大分、豊後大野両市と連携し、学生が大学で学ぶ専門知識を地域課題の解決に生かすカリキュラムを全学的に導入する。祭りの継承など住民と協力した取り組みで地域貢献をすることも、地域経済の中核となる「地域創生人材」の育成を図る。2015年度から本格的に展開する。

過疎高齢化が進む大分市

佐賀県と豊後大野市全域が 学生は主に1年時に現地

点づくりも目指す。

対象。▽小規模集落のコミュニティ維持▽地域ブランドの発掘▽商店街と連携した地域振興など七つの研究テーマに、工学、経営経済の両学部で取り組

率は13年度の31・6%から

## 県、2市と協力



第1回連携推進会議であいさつする平居孝之学長(右から2人目)。日本文理大学は専門知識を地域課題の解決に生かすカリキュラムを全学的に導入する

### 地(知)の拠点整備事業

文部科学省が2013年度から、地域とともに教育や社会貢献に取り組む大学などを支援するために始めた。最大5年間の取り組みに補助金を支出する。県内では13年度に

県立看護科学大、14年度に日本文理大が選ばれた。

35%まで引き上げ、地元の役に立つ人材の輩出に力を入れる。

プロジェクトは文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に今年7月に選ばれた。第1回連携推進会議が10月29日に同大学であり、行政関係者を含め30人が出席。参加者からは「大学で育てた人材を地元に残してほしい」「学生だけでなく、地域住民の意識向上につながる取り組みにしてほしい」などの意見が出た。

同大学は「多くの人を巻き込んで地域に根差した取り組みを進め、地域活性化のきっかけにしたい」としている。

(浅田佳奈子)

# 子どもたちの夢膨らむ

## 文理大で「お仕事体験ランド」

大分市の日本文理大学は18、19の両日、同キャンパスで小学生に将来の夢を思い見してもらうイベント「お仕事体験ランド」を開いた。子どもたちの就業意識を育むのが目的。約300人が参加した。

ロボットやゲームのクリエイター、パイロット、インテリアデザイナー、医療技師など10職種を用意。同

大の航空宇宙工学や建築学など各科の教員や学生が仕事の内容などを説明した。

明治小4年の川野壮太君(9)の憧れはパイロット。飛行機の模擬操縦体験などをしながら「将来は大規模機を操縦したい」。空気で動くロボットを操縦した松岡小4年の浜田祥汰君(10)は「赤外線を使ってケ

飛行機の操縦体験をする児童。大分市の日本文理大



# 大分新聞

【大分新聞社】大分合同新聞本社  
097-536-2121 FAX 538-9693

# 由布新聞

【由布新聞社】大分合同新聞由布支局  
0977-85-3120 FAX 28-8073

とことん地域密着

県内18地域それぞれの「地域新聞」が合同して大分合同新聞です。



携帯でピッ!

# FM 87.4

音は風に乗って...  
ゆふいんラヂオ局  
~YUFU in RADIO STATION 87.4~

由布市湯布院町川上1272-175  
Tel.0977-85-3001 http://www.874.fm

チームができるロボットを作りたい」と瞳を輝かせた。

# 自転車で冒険50キロ

## 文理大生 豊後大野の見学地走破

日本文理大学(大分市)の2年生6人が昨年12月、豊後大野市の冒険旅行に挑戦した。1泊2日の日程で、日本ジオパークに認定された同市のジオサイト(見学地)を自転車で巡り、歴史や文化を学びながら約50キロの道のりを走りきった。



大野川に架かる沈み橋を自転車で渡る学生たち―豊後大野市犬飼町

## 自然の魅力 歴史体感

同大は、文科省が教育支援人材認証協会(東京都)に委託している「青少年体験活動奨励制度」に参加している。制度は学力以外の面でも青少年を評価しようと設けられたもので、過去には同大の学生が防犯パトロールボランティアへの参加やスリランカでの自然体験に取り組んでいる。

本年度は、学生に大分県ならではの体験をしてみらおうと自転車での冒険旅行を企画。「おんせん県」の中で温泉の無い地域だが、自然や歴史の見どころの多い同市を舞台に選んだ。

初日は普光寺磨崖仏(朝地町)を出発。用作公園(同町)、原尻の滝(緒方町)を経由し、沈墮の滝(大野町)へ。犬飼町の農業、岡本静さん(61)方に民泊し、2日目は近くの犬飼石仏か

ら、手取蟹戸(千歳町)、菅尾石仏(三重町)、虹瀾橋(同町)を巡り、ゴール地点の市役所に到着した。各ジオサイトでは、担当の学生がそれぞれ解説役になり、他の学生に見どころや歴史を説明した。

日野満之さん(20)「経営経済学部」は「移動距離が長く大変だったが、豊後大野の歴史や成り立ちが勉強になった」。小森巧さん(20)「工学部」は「温泉は無いが自然が魅力的だと気付いた。他の人にもこの感動を伝えたい」と話していた。学生たちは今後、「経験を基に、同市を巡る冒険マップを作製したい」としている。

(平尾将俊)



協定書に調印した平居孝之学長(左)と権藤淳頭取

人材育成など  
文理大と豊和銀が  
連携協力協定締結

日本文理大学(平居孝之学長)と豊和銀行(権藤淳頭取)は23日、連携協力協定を結んだ。共同で地域経済の活性化に向けた人材育成などに取り組む。

協定は▽地域企業と連携した教育研究活動の促進▽研究成果の普及と人材育成の促進▽地域住民や子どもたちへの学習機会の提供▽中小企業への創業・新事業支援の4項目。新年度から学生の実践教育や子ども向けの職業体験教室などに取り組む予定。

大分市の同大学であった調印式では権藤頭取が「地域に密着した金融機関として、地元企業と人材の橋渡しの役割を果たしていきたい」とあいさつ。平居学長は「枠にはまらずに自由な活動を展開し、地域発展への成果を挙げよう」と話した。同大学は昨年7月、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に選出され、行政と連携した「地域創生人材」の育成を進めている。

環境について考えよう

30日は佐賀県 講演や学習報告  
31日は鶴崎で

大分市の鶴崎と佐賀県両地域で環境について考える集いが開かれる。いずれも入場無料。有識者の講演や地元の児童生徒による環境学習の報告がある。

▽環境を考える集い:30日午後1時半から、市内佐賀関の佐賀関公民館集會室で。関崎海星館の川田政昭館長が佐賀関の夜空に見える天体について講演。日本文理大学工学部の稲川直裕准教授は水中観測ロボット開発について話す。

佐賀関中学校1年生は学校近くの古宮海岸の清掃で集めた漂着ごみについて、同2年生は災害時の避難路などの工事と自然環境の共生について発表。佐賀関小学校4年生は「環境のため地球学習観測プログラム

ム」の取り組みを報告する。NPO法人福祉コミュニティイコウザキ(こうざき)の稲生亨事務局長は神崎海岸の自然保護と地域活性化の取り組みを話す。問い合わせは佐賀関公民館(☎097・575・2557)へ。

▽第10回つるさき環境フォーラム:31日午前10時半から、市内東鶴崎の鶴崎市民行政センター大会議室で。大分生物談話会の日野勝徳会長が「両生類の仲間と周りの環境について」と題して基調講演する。

鶴崎地域の3小学校の各4年生が学習報告。松岡小と高田小は大野川でのポイント体験や魚の放流、河川敷清掃などについて話す。別保小学校は乙津川の水質や

三佐地区の干潟の生物がテーマ。鶴崎小学校の「鶴崎エコクラブ」児童の発表もある。

会場では顕微鏡による生物の観察や川にいる生物の実物・パネル展示がある。問い合わせは鶴崎公民館(☎097・527・2671)へ。



# 祖母傾エコパーク 17年の登録目指す

## 祖母傾ユネスコエコパーク 大分・宮崎推進協議会

### 佐伯で初会合



登録を目指す大分、宮崎両県の6市町の首長ら＝4日午後、佐伯市役所

大分、宮崎の両県と県境の6市町が協力して登録を目指す「祖母傾ユネスコエコパーク」の推進協議会第1回会合が4日、佐伯市役所であった。関係自治体の首長、有識者ら11人が出席。2017年の登録を目指すし、コンセプトの決

定と申請書の作成を進めることを確認した。

**ユネスコエコパーク**  
国連教育科学文化機関(ユネスコ)が認定する自然と人間の共生を目指す生物圏保存地域の名称。国内では屋久島(鹿児島)や志賀高原(長野、群馬)など7カ所が登録されている。ユネスコ国内委員会が審査してユネスコ本部に推薦。同本部が決定する。

大学教授)が「エコパーク登録を通して生物資源と文化を守り、人材を育成して持続可能な地域をつくっていこう」とあいさつ。  
エコパーク認定の国内審査にも携わる酒井暁子横浜国立大学准教授(生態学)が講話。「この制度は自然

と人間が共生できている地域の成功事例を世界に発信することが目的」と意義を説明した。  
認定を目指すのは両県境の祖母傾国定公園を中心とした地域。九州本土としては最大の原生林が残り、標高に合った多様な植物やニホンカモシカなど希少な動物が生息している。各自治体は今後申請のために必要な、環境を守る「核心地域」や人が生活する「移行地域」などの地域設定を実施。自然環境の調査を進め、8月末をめどにユネスコ国内委員会へ提出する申請概要をまとめる。

## 労働者不足の現場に生かせ!

トマトロボット競技会で3位になった日本文理大学の研究室チーム



# トマト収穫ロボ 文理大全国3位

トマトを収穫するロボットの性能を競う「トマトロボット競技会」が昨年12月、北九州学術研究都市体育館(北九州市)であり、日本文理大学工学部の武村泰範准教授の研究室チーム(遠山善貴リーダー)工学部機械電気工学科4年、7人が3位になった。遠山リーダーは「今回のノウハウを生かして、農業の現場で活躍できるロボットの開発を進めたい」と話した。

トマトロボット競技会は、人口減少や高齢化で労働者不足が予想される中、日本のロボット技術の研究成果を生かして農業や福祉の現場で活躍するロボットを造ろうと九州工業大学社会ロボット具現化センターが初めて開催した。全国の大学や高専から5校、計9チームが参加した。

## 実情に合わせ開発を



アームの先に付いた切り取りばさみを使い、トマトを収穫する日本文理大学のトマトロボット

競技は難易度別に3ステージあり、制限時間(10分)内に収穫したトマトの数に仕上げた。収穫するトマトは遠山リーダーが選び、他、選んだトマトの色や形、収穫時に傷を付けていないかなどを各ステージごとに点数化して競った。順位は、実際に農場を想定し、プランターに植えたトマトの房から収穫する最終ステージの点数で決めた。ロボットの規格は自由で、収穫機能に特化したシンプルな構造や人型ロボットなどさまざまなロボットが参加した。

武村研究室は、アーム部分の先に切り取りばさみを付けたロボット「NBUI-AIH Ver.0」を開発。アームの動力源には、圧縮空気で動かすため消費電力が小さくて済むコンプレッサーを使用。トマトの幹に沿ってレールの上を平行移

動しながら収穫するタイプに仕上げた。収穫するトマトは遠山リーダーが選び、

リモコン操作でアームを動かして摘み取った。遠山リーダーは「宮崎県西都市の実家が農家だったこともあり、作業の手伝いができるロボットを開発したくて挑戦した。トマトを選ぶ自動認識機能の開発などこれからの課題も多いが、先輩がさらに研究を進め、成績を上げていくことを期待したい」と話した。

武村准教授は「少子高齢化で働き手が減る中、作業現場で活躍するロボットの開発は重要になっていく。実用化に向けて、農家や介護スタッフなど現場の意見を聞いて、より実情に合わせた開発を進めていくことが重要になる」と話した。

# 佐賀関どう活性化?

## 文理大生と住民が意見交換



佐賀関地区の活性化について意見を出し合う住民や学生=14日、大分市佐賀関の佐賀関公民館

日本文理大学は14日、大分市佐賀関地区の活性化をテーマにした「チャレンジOIT A地域創生人材講座」を佐賀関公民館で開いた。住民と協力して地域の課題解決に取り組む、地域社会の核となる人材を育成する、本年度始めたプロジェクトの一環。プロジェクトは豊後大野市、佐賀関地区を対象として、新年度からの本格的な展開の前に「どう取り組みをば活気づくか、どんな魅力が眠っているか地域と考える」と開催した。

地域住民や学生ら約30人が参加した。5班に分かれ、佐賀関を元気にする取り組みを検討。持続可能な視点を意識しながら、活性化のアイデアについて意見を出し合った。

ある班は木造建築や工場

跡の見学、空き家を改装した研修所の開設、漁業体験などを提案。「地域の人と触れ合いながら歴史を感じ、海を見ておいしいものを食べ、若者から発信していく仕組みを考えたい」とまとめた。この他、若者のデートコースの提案や空き

た。地元の人だからこそ知っている歴史などを生かしていきたい」。佐賀関校区自治委員連絡協議会の後藤淳夫会長は「超高齢化時代に危機感を抱いている。若い人の知恵を借りながら一緒に取り組むため、地域とのつなぎとなりフォローしていく」と話した。



家での料理教室など、主に若い世代をターゲットに据え、豊かな海や関アジ・関サバといった資源を利用するさまざまな案が出た。

経営経済学部3年の三田井沙織さん(21)は「当事者の立場の話が聞けてよかつ

文理大生、豊後大野市で研究活動

### 体験村の魅力向上策報告



学生の研究発表を聞く参加者

日本文理大学(平居孝之学長)は21日、本年度、豊後大野市内で取り組んだ学生教育や研究活動の成果を報告する「チャレンジOIT A地域創生活動報告会」を同市役所で開いた。

大学が取り組む「地域創生人材」育成の一環。過疎高齢化が進む豊後大野市と大分市佐賀間で、地域住民と協力して課題解決に取り組みながら地域の核となる人材を育てている。

報告会には学生、市民ら

約60人が出席。学生や教員が8件の活動を報告した。

大野町中土師で地域貢献活動に取り組んだ学生たちは、河川プールがある「ふるさと体験村」の魅力向上策や、体験村のそばを流れる柴北川の環境調査結果を報告した。

魅力向上策は、PRを強化する他、学生がイベントを企画して人を呼び込むことを提案。川については水

深や流れの速さをコンピュータで解析。昔より数が減ったというホタルの成育に適した環境づくりや、増水時に土砂がプールに流れ込まないようにする方法の研究が今後の課題とした。

この他、水中観測ロボットによる稲積水中鍾乳洞(三重町)の観測や、自転車で市内のジオサイトを巡る旅の報告などもあった。



協定書を手握りする平居孝之学長(左)と西嶋泰義会長。16日、佐伯市役所

## 全国「道の駅」連と文理大 体験実習で協定

全国「道の駅」連絡会と日本文理大学(平居孝之学長)は16日、西嶋泰義市長と平居学

長が協定書にサイン。西嶋会長は「道の駅は地域の拠点となっている。学生の感性やスキルを生かし、活力を与えてもらいたい」、平居学長は「若い人の成長には実体験が必要。地方創生に役立つように成果を挙げたい」とあいさつした。

道の駅は県内に23、全国で千以上あり、地域資源や魅力を発信する場となっているが、人材不足が課題となっている。協定締結後は学生が実践的に学習し将来の可能性を探るとともに、道の駅活性化に取り組む。

学生を受け入れる道の駅「原尻の滝」(豊後大野市)の吉野裕一駅長は「地域の人だけでは発想がマンネリ化してしまう。学生の知恵やパワーに期待している」と話した。

【大学COC事業】連携推進会議を開催

(2014/11/01)

NBUは、文部科学省平成26年度「地(知)の拠点整備事業(Center of Community:大学COC事業)」に選定され、自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として様々な取り組みを行っていくこととなります。

10/29事業の推進にあたって、本学と連携自治体である「大分県」「大分市」「豊後大野市」の各部署との実質的な連携協力体制の構築が不可欠であるため、その第1回目となる会議が本学にて開催されました。



平居学長(写真左)から開会にあたり、挨拶と出席された方々へ今後の協力のお願いが、吉村学長室長(写真右)から、本学大学COC事業の概要説明や達成目標、今後のスケジュール等について説明が行われました

その後行われた意見交換では、各自治体の出席者から今後の活動にあたり示唆に富んだ意見や期待を多数頂戴することができ、本格的に地(知)の拠点としての動きが始まりました。今後の取り組みについては随時お知らせして参ります。

また、大学COC事業キックオフシンポジウムとなる「チャレンジOITA人材育成フォーラム」が11月11日(火)ホルトホール大分で行われます。詳しくは[こちら](#)をご覧ください。→ [チャレンジOITA人材育成フォーラム](#)

【大学COC事業】キックオフシンポジウム開催のお知らせ

(2014/11/12)

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」キックオフシンポジウム  
 チャレンジOITA人材育成フォーラム2014

**地方の高校・大学で求められるアクティブラーニング  
 ～ 地域で活躍できる若者を育てるために必要な教育改革 ～**

少子高齢化に伴う社会の活力低下や地域コミュニティの衰退、都市と地方の格差拡大、さらにはグローバル化による産業構造の変化や自然災害の脅威など我々を取り巻く情勢は刻々と変化しています。

そのような中、日本文理大学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(Center of Community:大学COC事業)」に選定され、様々な地域課題を乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」の育成を地域との実践的協働活動により目指しています。

大学COC事業キックオフシンポジウムとなる本フォーラムでは、「地方創生」を先取りし、地方の課題が山積する中で活躍できる若者を育てるために、高校や大学の現場で必要となる“教育”を理解し、その教育を実現するための取組みや教育手法を議論することで、高校・大学・社会が接続していくための教育改革の方向性を共有することを目的とします。



## 【プログラム】

### ◆主催者挨拶13:00

平居 孝之(日本文理大学 学長)

### ◆基調講演13:10

「教育に求められている変容:若者を育てるアクティブラーニング

溝上 慎一氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)

### ◆基調報告14:25

「熊本における地域と協働した高校生教育の可能性」

八木 浩光氏(一般財団法人 熊本国際交流振興事業団 事務局長)

### ◆パネルディスカッション15:05

「これからの地方の人材に必要な中等・高等教育と社会の接続をどう実現するか？」

コーディネーター:成田 秀夫氏(学校法人河合塾 教育研究開発本部 開発研究職)

パネリスト:

溝上 慎一氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)

佐藤 茂氏(大分県立大分豊府高等学校)

吉村 充功(日本文理大学 人間力育成センター長)

日本文理大学 代表学生

### ◆閉会16:40



【大学COC事業】 キックオフシンポジウム開催

(2014/11/12)

11/11「チャレンジOITA人材育成フォーラム2014」が大分市のホルトホール大分で開催され、地域住民、産業界、教育関係者など約200名の方々が熱意溢れる基調講演、報告、ディスカッション等を聴講されました。

NBUは、文部科学省「平成26年度 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に選定され、そのキックオフシンポジウムとして、「地方の高校・大学で求められるアクティブ・ラーニング～地域で活躍できる若者を育てるために必要な教育改革」をテーマに、『地方創生』を先取りし、地方の課題が山積する中、活躍できる若者を育てるために、高校や大学の現場で必要となる“教育”を理解し、その教育を実現するための取り組みや教育手法が議論されました。



主催者を代表して挨拶をされる平居学長「少子高齢化、グローバル化の進展等、これから変化する社会構造に対して重要なことは『人間力教育』であり、主体的学習教育の中にどのように取り入れていくか、地方創生人材育成を切り口に、大分での地方創生、高校、大学、社会が協働しての教育について、若者と共に未来を生きるためどのような意識を持ち、行動を起こしていくか考えたい。」と開催主旨が述べられました。



基調講演「教育に求められている変容：若者を育てるアクティブラーニング」と題して、京都大学高等教育研究開発推進センター教授 溝上 慎一氏が講演され、日本が近代化するにあたって学校教育は第二ラウンドに入り、その具体的なイメージとして廃校寸前だった離島の高等学校に今は生徒たちが多く集まってきている事例が紹介され、「学校」は職業選択をするうえで重要な媒体であり、地域創生の鍵となることを、豊富な情報と調査を基に講演していただきました(写真上左)。

基調報告「熊本における地域と協働した高校生教育の可能性」では、一般財団法人熊本市国際交流進行事業団 事務局長 八木 浩光氏から、熊本県における地域と協働した取り組み「国際ボランティアワークキャンプ in ASO」の概略、歴史、成果について、参加した高校生が“先生から教えてもらう”姿勢から“自分たちで考える”姿勢へ意識の転換が見られる等の報告がありました(写真上右)。



パネルディスカッション「これからの地方の人材に必要な中等・高等教育と社会の接続をどう実現するか」のテーマでは、高校、大学現場で行われている取組みが紹介され、それを踏まえたディスカッションが行われました(上写真)。NBUからは、実際に地域での様々な活動に参加している工学部情報メディア学科2年川口 顕さんから自身が参画したプロジェクトと、そこから学んだこと、活動に参加することで地域に対する意識が変わったことなどを力強く報告しました(下写真)。



閉会にあたり、参加した方々への謝辞を述べる橋本経営経済学部長(写真上左)

今回のフォーラムで基調講演、パネルディスカッション等に参加していただいた方々。(写真上右)  
左から平居学長、成田 秀夫氏(学校法人河合塾教育研究開発部 開発研究職)、八木 浩光氏(一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 事務局長)、溝上 慎一氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター教授)、川口 顕さん(工学部情報メディア学科2年生)、佐藤 茂氏(大分県大分豊府高等学校教諭)、吉村 充功 人間力育成センター長

NBUは、大学COC事業で掲げた目標に向け、地域を志向した教育カリキュラム体系へと全学的な再編を行い、社会貢献活動との有機的接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点として、地域力の向上につながる取り組みを今まで以上に推進していきます。

「“大地”と“生きもの”シンポジウム」に教員、学生が参加

(2014/11/19)

11/19のおおのエイトピア(豊後大野市総合文化センター)で開催された「“大地”と“生きもの”シンポジウム」に教員、学生が参加、聴講しました。

第一部「ジオパーク」の可能性を考えると第二部“生物多様性”と“地域経済”を考えるで構成され、ジオパークに認定された豊後大野市の取り組みや、工学部建築学科 杉浦教授がコーディネーターを務めたパネルディスカッション「生物多様性と持続可能な地域づくり」が行われ、生物多様性保全と地域経済の関わりについて熱心な議論が交わされました。



「 おおいた豊後大野ジオパーク※認定後の取り組み」、バーチャルジオツアーでは、豊後大野市の認定ジオガイドや姫島村の職員から地域の特色、歴史、見所などを方言も取り入れられながらユニークな語り口で報告され、大分県立三重総合高校・農業クラブ代表「豊ジオ探検隊」から次代を担おうとする意気込みが感じられる発表がありました。(写真上)

※おおいた豊後大野ジオパーク:ジオパークとは地球科学的に見て重要な地形、地質を含む自然に親しむ公園の意。大分県では「おおいた豊後大野」、「おおいた姫島」が日本ジオパークに認定されています。



基調講演「生物多様性保全と地域経済の関わり」では、アメリカ・イエローストーン国立公園で現地コーディネーターも務めるスティーブ・ブラウン氏が自身の体験から、豊後大野市における地域資

源の活用、経済波及効果等を、流暢な日本語と絶妙な語り口で紹介されました。(写真上)



シンポジウムのコーディネーターを務めた建築学科・杉浦教授。(写真上左)NPO法人おいた水フォーラムの運営委員、祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会会長でもあり、持続可能な地域づくりのための実践的研究に携わっています。

パネルディスカッション「生物多様性と持続可能な地域づくり」では、基調講演を行ったブラウン氏をはじめ、各地で様々な取り組みを実践されているパネリストの方々から、事例をはじめ、体験にもとづいた意見が交わされ、豊後大野市の方々は勿論、本学学生たちにとっても、今後の取り組みに多くのヒントをいただくことが出来たようです。(写真上右)



閉会の挨拶をされる橋本祐輔 豊後大野市長(写真上)。長時間に渡ったシンポジウムに最後まで参加していただいた会場の皆様への謝辞と、西ナイル熱を媒介する蚊が天敵とする微小な虫が、30年前祖母傾山系で発見されている事例を紹介し、貴重な生物資源がねむる自然生態系を宝として情報共有を図りながら次世代に繋いでいくこと、市民の方々と共に街創りを進めていく決意を述べられました。

NBUは今年2月、[豊後大野市と包括連携協定](#)を締結し、工学部建築学科ではワークキャンプ等を同

市で実施。地域の保全活動等に従事することで、地域が抱える諸問題の改善、解決のため、学生たちが学ぶ専門分野をどう活かしていくのか考え、実践に移す取り組みが始まっています。

又、「[平成26年度地\(知\)の拠点整備事業\(COC\)](#)」に選定されたことに伴い、地域志向科目、「地域づくり副専攻、正課外活動等の取り組みを推進し、地域の方々の協力もいただきながら、様々な課題解決型の学修を行うことになっています。

「おおいた版チャレンジアワード」 地域資源（自然・文化）を教育に

(2014/12/19)

文部科学省が推奨する※「青少年体験活動奨励制度」。その大分版としてNBUでは、大分の恵まれた自然環境をフィールドに人間力育成を目的とした「おおいた版チャレンジアワード」を実施しています。

「おおいた版チャレンジアワード」には自然体験、運動体験、教養体験、奉仕体験の4領域の体験活動があり、夫々の活動を一定期間継続した実績に応じて、その達成を記念する修了証(アワード)が授与されることになっています。NBUの学生有志は、既に様々なボランティア活動や地域活性化プロジェクト等に携わることで、地域の活動に参加する意義や、歴史を背景として培われてきた伝統・文化に目を向ける意識が芽生えてきています。⇒ [地域活動紹介イベント紹介](#)

①今回は自然体験活動として2泊3日(12月24日～26日)のスケジュールで、世界農業遺産にも登録された国東半島の歴史的文化遺産を巡り、地域に根付いた伝統・文化を肌で感じ、その歴史的意義を感じ取ってもらう内容となっています。活動に参加している学生と本活動奨励制度アドバイザー資格をもつ職員2名が照恩寺をかわきりに、某飲料メーカーのCMにも登場した富貴寺や両子(ふたご)寺を経由し、最終目的地である宇佐神宮まで1日約30kmを自転車で走破する予定です。

②①と同じく自然体験活動として、1泊2日(12月25、26日)の日程でおおいた豊後大野ジオパークに認定された豊後大野地域を巡るコースも実施される予定です。

クリスマスの真っ只中、師走の風を受けながらも、あえて自転車での国東半島、豊後大野の地域を巡る自然体験活動に挑戦する学生たち。通常では得られない貴重な体験を積んでほしいものです。

※青少年体験活動奨励制度:青少年(対象14～25歳)の様々な体験活動へのチャレンジを奨励するための仕組み。文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」として一般社団法人 教育支援人材認証協会が受託し、制度設計が進められています。「自然体験、運動体験、ボランティア体験、教養体験」の4領域の体験活動を総合的に一定期間継続した実績に応じて、修了書(アワード)を文部科学省から青少年に授与される制度です。

若者が地域を考える“おおいた版チャレンジアワード”を実施

(2015/01/09)

身につけた知識を如何に活用できるか。その能力が重要視されている中、文部科学省は「青少年体験活動奨励制度」を推奨しており、委託事業として『体験活動推進プロジェクト』の制度設計が一般社団法人 教育支援人材認証協会によって進められています。

「青少年体験活動奨励制度」には自然体験、運動体験、ボランティア体験、教養体験の4領域の体験活動があり、夫々の活動を3ヶ月又は6ヶ月、1週間に1時間以上実施し、継続した実績に応じてブロンズ、シルバー、ゴールドの3段階で、その達成を記念する修了証(アワード)が授与されることになっています。

今回NBUで実施した自然体験活動には、ブロンズの認証取得条件である1泊2日(12/25~26)の行程で豊後大野市の普光寺磨崖仏をスタートし、原尻の滝、沈墮の滝、手取蟹戸(てどりがんど)等を経て、豊後大野市役所をゴールとするおおいた豊後大野ジオパークを自転車で巡るコースと、シルバーの認証取得条件である2泊3日(12/24~26)の行程で、国東の照恩寺をスタートし両子寺、富貴寺等を経由し、国宝・宇佐神宮をゴールとする六郷満山文化を肌で感じるコースがあり、両コースに参加した学生たちは、1日約25kmに及ぶ行程に耐えうる体カトレーニングや、事前調査、準備は勿論のこと、地理、歴史、文化的背景から訪れる地域を考え、臨みました。

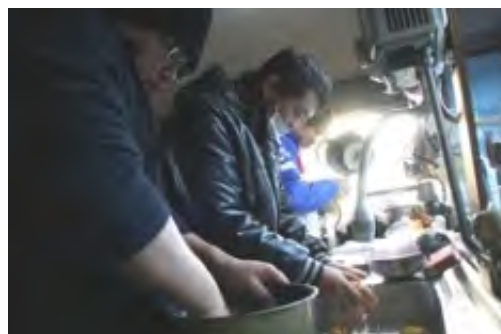
豊後大野のジオパーク※を自転車で巡る旅(H26.12/25~26)



普光寺・磨崖仏にて(写真上)



原尻の滝にて(写真上)





神楽会館にて。迫力のある神楽写真の前で(写真上左)。夕食時:宿泊場所にて、自炊の様子。(写真上右)



ポイントで休息を取る学生たち(写真上左)。ゴールの豊後大野市所にて、市役所の方々が出迎え下さり、労いの言葉を頂きました(写真上右)。

ジオパーク※:ジオパークとは地球科学的に見て重要な地形、地質を含む自然に親しむ公園の意。大分県では「おおいた豊後大野」、「おおいた姫島」が日本ジオパーク委員会から日本ジオパークに認定されています。

国東の歴史を感じる寺を自転車で巡る旅※(H26.12/24~26)



初日、照恩寺をスタートした学生たちは、国宝両子寺を目指し走りました。昼食はポイントで取っていききました。温かいお茶が疲れを癒してくれます。(写真上)



急勾配の坂道を登る。事前のトレーニングが役立ちます(写真上左)。富貴寺にて(写真上右)



寒風にもめげず疾走する学生たち、もう一息!(写真上左) 最終日のゴール国宝・宇佐神宮でのショット。一人ひとりに役割を達成した満足感が伺えます。(写真上右)

国東半島宇佐地域※:近代化の進行により、消失しつつある伝統的農業や農村文化、土地景観、生物多様性などの保全を目的として、国連食糧農業機関(FAO)から世界農業遺産に認定されています。

参加した学生からは「寒い中での体験活動でしたが、自転車での移動ですぐに体も温まり、汗をかくほどでした。途中足がつる状況が生じて、歩いたりすることもありましたがゴールしたときには、皆が夫々の役割を分担して完走できた達成感で一杯になりました。」との感想が聞かれ今回の自然体験活動を通して、事前準備を含めた行程計画、実際の時間配分、移動経路の確認、記録とそれらを統括するリーダー等夫々の役割を分担し、所期の目的を達成できたこととして、自分たちが生活を営む大分県の自然、文化遺産等を巡りながら得ることのできた“気づき”が、これからの学修を深めるための貴重な経験となったようです。参加者のこれからの成長が楽しみです。

## 株式会社 豊和銀行と連携協力協定締結

(2015/01/26)

1/23「地域のための大学」「地(知)の拠点」としての大学づくりを進めるNBUと、「地域に貢献し、真に必要とされる銀行」として取引先に対する円滑な資金供給と良質な金融サービスを充実させ、地域経済の活力向上と地域の発展に貢献しようとする『株式会社 豊和銀行』は地域発展に向けた人材育成の取り組みを中心に、中小企業事業者の創業、新事業や経営改善の支援等について相互に連携を強化し、地域経済の活性化に寄与することを目的として、連携協力協定を締結。その調印式が執り行なわれました。



連携協力協定にあたり堅い握手を交わす株式会社豊和銀行 権藤取締役頭取(右)と平居学長(左)



平居学長から「地域の企業と協力してこそ、地域に役立つことができると思っています。我々には大分県下での組織力をもって、ご支援をいただき、今後の取り組みが地域文化になるように連携、協力して育んでまいりたい。宜しくお願いします。」との挨拶に続き、権藤取締役頭取から「地方創生の根本は人材育成と思っています。中小企業の方々と取引がある私たちのプラットフォームを如何に学生の人材育成に結びつけるか、そして地域の方々の人材育成、事業への貢献につなげられるか、ある意味橋渡しを行い、地域事業の発展に寄与するため重要な役割を担っていくことに身の引き締まる思いです。宜しくお願いします。」との力強い挨拶をいただきました。

この度の提携を契機に、地域密着型金融機関である株式会社 豊和銀行と、地域をフィールドに教育を実践す NBUの双方の強みを活かし、学生教育をはじめ、地域発展に向けた人材育成の質的な充

実につながることが期待されます。

**【今後期待される連携取り組み】**

- ・地域企業と連携した、実践型教育による学生教育による学生教育や教育研究活動の推進。
- ・研究成果の普及と地域発展に資する人材育成の取り組み促進。
- ・公開講座・体験教室の開設など地域住民や子ども達への学習機会の提供。
- ・中小企業事業者への創業・新事業支援及び共同技術研究の実施。

【工学部】ものづくり魂“もの魂（コン）”発揮！

(2015/01/27)

NBU工学部では学生たちが、各種コンテスト、競技会に挑戦することで、ものづくりへの情熱を持ち、目標を達成する毎に技量やものづくり魂“もの魂（コン）”を高めていけるよう、内容を審査した上で助成を行う「[ものづくりコンテストチャレンジ](#)」を行っています。

「ものづくりコンテストチャレンジ」にエントリーしたチーム中、昨年12/5～6沖縄海洋ロボットコンテスト・プレ大会（小型高機動ROV部門）に長崎大学工学研究科との合同で出場した機械電気工学科・稲川研究室の小型高機動ROVチームが最優秀賞、12/20,21北九州学術都市体育館で行われた第1回トマトロボット競技会に出場した機械電気工学科・武村研究室のNBU農業ロボット開発チームが3位入賞と夫々成果を収めました。



写真上：各々のコンテストに出場にあたり、昨年11/20学内で開催された「ものづくりコンテストチャレンジ」でプレゼンテーションを行う稲川研究室・小型高機動ROVチーム(左)と武村研究室・NBU農業ロボット開発チーム(右)。

【小型高機動ROVチーム】

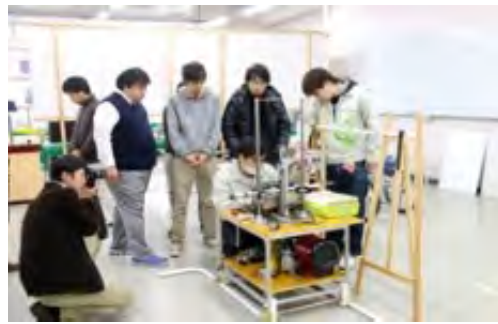


写真上：沖縄海洋ロボットコンテスト・プレ大会で最優秀賞を受賞した小型高機動ROVチームメンバー(左)とコンテストに出場したROVとコントローラー(右)。



写真上:水中で稼働中のROV(遠隔操縦型水中ロボット)同タイプの小型水中観測機が国土交通省次世代社会インフラ用ロボット現場検証委員会が公募した「ロボット技術・ロボットシステム(水中維持管理)」に於いて「現場検証対象技術として決定」され今後の研究の進展が期待されています。⇒詳しくは [コチラ](#)

#### 【NBU農業ロボット開発チーム】



写真上:第1回トマトロボット競技会三位に入賞したNBU農業ロボット開発チーム(左)。地元新聞社の取材も受けました。(右)



写真上:トマトの模型を収穫するトマトロボットアーム部。エアーコンプレッサーを使用しクリーンエネルギーでアームを動かすのが特徴。農業用ロボットは、人の労働の補助的役割を果たす上で自律化が課題になっていて、今後は自律化に向けてその機構の導入を図る予定で、どのように手が加えられるか注目されます。

この他にも、昨年夏、 [第10回能代宇宙イベントで初優勝](#) を飾ったCANSATプロジェクトチームが3月種子島で行われる競技会に、電気自動車の [Pico-EV大会で2連覇達成中](#) のPico-EVチームが3月東京で行われる大会に向けて準備を進めており、情報メディア学科学生で構成されたチーム「Mak-iSIM」が、ビジネスプランとしても有望であれば事業費も提供されるというTech Planグランプリに、又唯一女子学生のみでチームを組んだ航空宇宙工学科「チーム航空」がロボット相撲競技に夫々出場を予定しています。

各種コンテスト、競技会に挑戦することで、ものづくりへの情熱がかき立てられ、更にその輪が拡大していくことを願ってはじめられたこの試み、“もの魂(コン)”の発揚が技術立国ニッポンの伝統を守り続けるに違いありません。あなたもNBU工学部でものづくり魂、そして腕に磨きをかけてみませんか？

【大学COC事業】キックオフ講座・活動報告会を開催

(2015/02/06)

NBUは、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、地域課題である少子高齢化社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決能力を兼ね備える「地域創生人材」を地域実践を通じて育成すると同時に、地域課題解決による地域力の向上を目指した事業展開をしています。

今回の講座、報告会では、新年度から本格化するNBUの両地区での住民の皆様と学生との協働で地域づくりを可能性あるものへと模索してまいります。

【佐賀関地区キックオフ講座】詳しくは [コチラ](#) チャレンジOITA地  
域創生人材講座2015in佐賀関  
日時:平成27年2月14日(土)13:00~16:00  
会場:佐賀関公民館2階 研修室1・2  
(大分市佐賀関1407番地の27 佐賀関市民センター内 TEL097-575-2557)  
主催:日本文理大学  
テーマ:地域創生人材の育成で佐賀関地区を元気に!

【豊後大野キックオフ講座】詳しくは [コチラ](#) チャレンジ  
OITA地域創生活動報告会2015in豊後大野  
日時:平成27年2月21日(土)13:00~15:40  
会場:豊後大野市役所本庁舎1階 保健センター(豊後大野市三重町市場1200番地)  
主催:日本文理大学  
テーマ:豊後大野市での学生教育・研究活動の成果を地域住民と共有し地域の発展性を探ろう!



【大学COC事業】 地域創生人材講座を佐賀関で開催

(2015/02/27)

2/14大分市佐賀関公民館で「地域創生人材の育成で佐賀関を元気に!」をテーマに地域住民、学生が参加した地域創生人材講座が開かれました。



①



②



③



④

①ワークショップに先立ち、「地域の魅力・資源を学生たちの教育に活かし、地域の課題解決に取り組む大学改革を行っていくにあたり、佐賀関地区を一つのフィールドとして様々な取り組みを行わせていただきたい。地域の方々と学生たちとの思いを共有して、今日は地域で活動する最初の場とさせていただきます。」と人間力育成センター長 吉村教授から開催にあたり、挨拶が行われました。

②、③佐賀関地区のこれからについて議論する前に、「ゲームで学ぶマネジメント入門」と題して、経営経済学部長 橋本教授が、参加者の緊張をほぐすワークショップを交えたレクチャーを行いました。④参加者は、自己紹介をニックネームで行い、名札を作成しました。



⑤



⑥

⑤、⑥ 橋本教授から「チームとは何なのか?この研修の後必ず活かしていただきたい。理解した知識を実際にいかせるかがポイントです。」とワークショップの狙いが話され、チームで何事かを行っていくためには、他のメンバーの力を借りることが大前提となり、その人は一体何ができるのか、相手の専門性や知識を理解した上で協力を求める、それを実体験できるチームマネジメントゲームが行われました。

ゲームの後は、感想を記録する振り返りシートを各自で記入をしていきましたが、チームに貢献できた、熱中できた、結果に満足している等の項目でポイントが高いことが“強いチーム”の表れと聞き、思わず納得です。又、物理的距離、心理的距離についても触れ、チームマネジメントのレベルを上げるための4つのポイント、目標、役割、対人関係の質、手続き等も紹介され、チームで事を成していくために必要なことを実感していきました。



⑦



⑧

⑦、⑧第一部でグループ内の雰囲気も和んだところで第二部のワークショップでは、「これからの佐賀関地区の活性化を考えよう」をテーマに、吉村教授からNBU学生が佐賀関地域で行ってきた事例の紹介や、実際に地域資源を活用しての自由な発想で、佐賀関地区を元気にするアイデアをグループ内で出し合うことを促され、地域住民、学生の皆さんはアイデアを付箋に書き留めて地図上に張り出していく作業を行っていきました。



⑨



⑩

⑨地域の地図上に張られたアイデア満載の付箋。⑩夫々のグループから、地域活性化のアイデアを発表。今ある地域の資源、海、施設、食べ物、史実等を活用した案やSNSを使った情報発信について、多くの意見が奔出した感がありました。

最後のまとめとして、吉村教授は、「時間が限られていて、不十分な点もあったと思いますが、学生目線でのアイデアを聞いていただけたのではないのでしょうか。今回で終わりということではなくて、今後いろいろな活動を行っていく糧になればと考えています。これからも教職員含めていろいろなことを教えていただきたい。」と語り、橋本教授は「事を始めるためには、核となるチームが必要で、そこにはリーダーがいてメンバーがいる。そこで何かをやろうとする雰囲気を形成していくことが大切です。そこから周囲に運動の輪を広げていく流れが生まれてきます。ベースとなるのがコミュニケーション。本日、ここから動きがはじまったわけですから、地元の方々とともに地域活性化を進めることができればと思います。宜しくお願いします。」と結びました。

佐賀関地区でのCOC事業※のキックオフとして位置づけられ開催された今回の講座でしたが、これから佐賀関地域の活性化のために、わくわくするような取り組みがはじまってきそうです。

【大学COC事業】 豊後大野キックオフ講座を開催

(2015/02/27)

NBU日本文理大学では、平成26年度 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、取り組み課題である“地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な、豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」の育成”に向けて、選定された7月以降、今年度も数々の取り組みを行ってきました。(取り組み内容は⇒ [こちら](#))

その事業におけるキックオフの位置づけとして、2月21日(土)に連携自治体の一つである豊後大野市(市役所本庁)を会場に、「チャレンジOITA地域創生活動報告会2015in豊後大野」と題し、住民の方々へ学生・教員から教育・研究・社会貢献(学生正課外)活動についての報告会を行いました。

はじめに平居学長より、豊後大野市には、本学航空宇宙工学科の実習施設となる大分県県央空港エクステンションキャンパスもあり、NBUの第2のキャンパスでもあること、また、今回の大学COC事業の連携自治体としても、今後ますます学生の活動の場となることが予想されるなど、“大分県”を学びのフィールドとして今後本学の活動が深まっていくことや、報告会開催の御礼も含め、主催者として挨拶がありました。

その後、NBU大学COC事業推進責任者である吉村教授より、地域に愛着を持ち住民の方々と助け合いながら地域の課題に取り組み、解決方法を見つけて行く人材を、地域と協働で育成したいことなど、大学COC事業の目指している方向性などについて、基調報告が行われました。



〔主催者挨拶をする平居学長〕



〔基調報告する吉村教授〕

続けて、学生・教員から合計8件の豊後大野の地を取り上げた研究・活動の成果発表報告が、1回約20分(15分発表、5分質問・回答)サイクルで行なわれました。(報告内容・テーマ等については⇒ [こちら](#))

最初に学生が報告した、河川プールがある「ふるさと体験村」の魅力向上策については、実地調査や外部アンケート集計結果・分析と、学生たちが考える改善策・魅力向上案の提案(学生主体のイベント実施、プール隣接公園の遊具設置など)がありました。

それに対し、河川プール管理運営に携わる方から具体的な実施案(どんな学生イベントが良いと思うか?遊具とはどの年齢を対象としたものが良いか集計等で分かっているか?など)について質問があり、「今後も若者の意見を参考にしたい。」といった言葉もありました。



〔活動内容を発表する学生〕



〔地元市民の方をはじめ、約60人が参加〕

成果発表の後には、大学の正課外(授業以外の時間を活用した)学生活動の報告として、人間力育成センター・高見副センター長より、文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト:青少年体験活動奨励制度(チャレンジアワード)」における、豊後大野での”おおいた版チャレンジアワード”について報告がありました。

その体験活動内容と、それが学生たちにどのような影響を与えたか。活動を通して住民との相互理解が深まることや、頭で考えるだけでは得られない様々な気づきなど、これからますます活動が進む中、地域の方々が生徒にとって「良き空間と時間を与え、仲間となっていただける存在」であることなど報告しました。



〔活動報告する高見副センター長〕

最後に豊後大野市長・橋本氏より講評をいただき、「連携自治体として学生が様々な体験をしながら育つことで、地域住民も得るものが多いと思います。また若者が居場所を見つけ、生きる力をつける場として豊後大野をフィールドにしてもらえることを嬉しく思っています。」とのお言葉をいただきました。

そして、大学から島岡大学教育長より、研究等に関してデータ提供等をいただいたことなどに対する御礼と、今後、今回の研究等を地域に還元できるように更に発展させていくためのご協力をお願いし、報告会を終了しました。



〔講評をいただいた豊後大野市長・橋本氏〕〔御礼とご協力をお願い:島岡大学教育長より〕

今回、豊後大野市役所本庁の講座会場までの廊下には、本学の人間力教育や大学COC事業に関するパネル(新聞記事等)の掲示をさせていただき、報告会の参加者以外の市役所を訪れた方にも大学COC事業等の活動を知っていただける機会となりました。



今年度キックオフフォーラムや講座を行っているNBUの大学COC事業は、来年度(2015年度)から本格的に展開をしていき、地域で育てた学生を地域の発展のために返すよう取り組んでいきます。

「道の駅」連絡会と基本協定を締結

(2015/03/16)

旅先で、ふと立ち寄ってしまう「道の駅」。今や全国で1,000駅を超える規模となっています。行く先々での特産品や、農産物等の発見、人々との触れあいは、またとない地域資源・魅力の情報発信源となっています。様々な人や物が行き交う地域での重要拠点「道の駅」、今後地域の活力の担い手となる人材育成の場としても期待が高まっています。

全国「道の駅」連絡会が中心となり、全国の各大学と各「道の駅」を、つないでいくことによって、お互いのニーズにあった取り組みが実施され、地域外の学生との交流も進み、新たな価値の創造が図られることが期待されています。3/16大分県では初の締結となる 『「道の駅」就労体験型実習に関する基本協定締結式』が佐伯市役所で開かれ、全国「道の駅」連絡会会長の代理として九州・沖縄「道の駅」連絡会会長である西嶋 泰義佐伯市長と平居孝之学長が協定書に署名。協定が締結されました。



(写真上)協定が締結され、堅い握手を交わす西嶋 泰義 佐伯市長(右)と平居 孝之学長。これから、大分県内の「道の駅」とNBUとのマッチングが図られ、様々な取り組みが進捗していくことで、全国の「道の駅」への展開へと活動の拡がり期待されます。

## 大分県信用組合と連携協定締結

(2015/03/24)

平成27年3月24日（火）、本学情報センター7階 第2会議室において、大分県信用組合と連携協定を結びました。



これまで本学と大分県信用組合は、ともに「けんしん大学」運営やインターンシップ、キャリア教育など、様々な面で互いに協力しながら地域経済の発展に向けて取り組みを進めてきました。

今回の連携協定は、「地（知）の拠点」としての大学づくりを進める本学にとって、従来の産学連携に地域に密着した金融機関を加えた「産学官金」との連携が重要と考え、「地域密着型金融機関」として大分県全域に支店網があり、幅広い活動を通じて地域の発展に貢献されている『大分県信用組合』と実質的・発展的連携をさらに進めるために協定締結を行いました。



挨拶をする平居学長



挨拶をする吉野理事長

大分県信用組合・吉野理事長から「大分の地域を興す仕事を一緒にできることに職員一同、感激しています。大分の地域発展のために寄与したい。」との挨拶に続き、本学・平居学長から「地域に貢献している大分県信用組合と連携できることは大変ありがたい。実際に効果ある取り組みにつなげたい。」との力強い挨拶をしました。

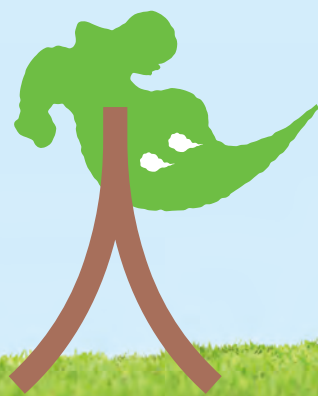


今回の連携を契機として、地域密着型金融機関として企業や行政機関とのネットワークを持たれている大分県信用組合と、地域をフィールドに恵まれた教育環境を活かした教育を実践する日本文理大学の双方の強みを活かし、本学学生教育をはじめ、地域発展に向けた人材育成の質的な充実につながることを期待できます。

**【今後の連携取り組み】**

地域発展に向けた人材育成の取り組みを中心に、地元中小企業の創業・経営革新支援・専門家派遣、地域資源を活用した観光振興並びに新事業支援・定住促進支援等について相互に連携を強化し、地域経済の活性化を目的に実施。

## 13. 大学 COC 事業関連 購入図書 一覧



## 【購入図書リスト】

1. 『ロングテール - 「売れない商品」を宝の山に変える新戦略』アンダーソン・クリス (著)・Chris Anderson (著)・篠森 ゆりこ (翻訳) (2014) 早川書房
2. 『政策リサーチ入門—仮説検証による問題解決の技法』、伊藤修一郎 (2011) 東京大学出版会
3. 『グラミンのソーシャル・ビジネス 世界の社会的課題とどう向き合うか』大杉卓三/アシル・アハメッド (著) (2012) 集広舎
4. 『エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する』小田博志 (著) (2010) 春秋社
5. 『地域を変えるデザイン——コミュニティが元気になる 30 のアイデア』寛 裕介 (監修)・Issue+design project (著) (2011) 英治出版
6. 『ソーシャルデザイン実践ガイド—地域の課題を解決する 7 つのステップ』寛裕介 (2013) 英治出版
7. 『ソーシャルデザイン (アイデアインク) 』 グリーنز (編集) (2012) 朝日出版社
8. 『イノベーションの最終解』クリステンセン・クレイトン・M (著)・スコット・D・アンソニー (著)・エリック・A・ロス (著)・櫻井 祐子 (翻訳) (2014) 翔泳社
9. 『イノベーションの達人!—発想する会社をつくる 10 の人材』ケリー・トム (著)・ジョナサン リットマン (著)・Tom Kelley (原著)・Jonathan Littman (原著)・鈴木 主税 (翻訳) (2006) 早川書房
10. 『リバーズ・イノベーション』ゴビンダラジャン ・ビジャイ (著)・クリス・トリンブル (著)・渡部 典子 (翻訳) (2012) ダイヤモンド社
11. 『ソーシャルデザイン 50 の方法 - あなたが世界を変えるとき』今一生 (著) (2013) 中央公論新社
12. 『スモール イズ ビューティフル』シューマッハー・F・アーンスト (著)・小島 慶三 (翻訳)・酒井 懋 (翻訳) (1986) 講談社
13. 『THIS IS SERVICE DESIGN THINKING. Basics - Tools - Cases — 領域横断的アプローチによるビジネスモデルの設計』スティックドーン ・マーク (著)・ヤコブ・シュナイダー (著)・長谷川敦士 (監修)・武山政直 (監修)・渡邊康太郎 (監修)・郷司陽子 (翻訳) (2013) ビー・エヌ・エヌ新社
14. 『FabLife —デジタルファブリケーションから生まれる「つくりかたの未来」 (Make: Japan Books) 』田中浩也 (著) (2012) オライリージャパン
15. 『世界を巻き込む。—誰も思いつかなかった「しくみ」で問題を解決するコペルニクの挑戦』中村俊裕 (著) (2014) ダイヤモンド社
16. 『貧乏人の経済学 - もういちど貧困問題を根っこから考える』バナジー・アビジット・V

- (著)・ エスター・デュフロ (著)・山形浩生 (翻訳) (2012) みずず書房
17. 『政策立案の技法』バーダック・ユージン (著)・白石 賢司 (翻訳)・鍋島 学 (翻訳)・南津 和広 (翻訳) (2012) 東洋経済新報社
  18. 『コ・イノベーション経営: 価値共創の未来に向けて』プラハラード・C・K (著)・ベンカト・ラマスワミ (著)・有賀 裕子 (翻訳) (2013) 東洋経済新報社
  19. 『ラーニング・レボリューション——MIT 発 世界を変える「100 ドル PC」プロジェクト』ベンダー ・ウォルター、チャールズ・ケイン (著)・ジョディ・コーニッシュ (著)・ニール・ドナヒュー (著)・松本 裕 (翻訳) (2014) 英治出版
  20. 『インサイドボックス 究極の創造的思考法』ボイド・ドリュウ (著)・ジェイコブ ゴールデンバーグ (著)・Drew Boyd (原著)・Jacob Goldenberg (原著)・池村 千秋 (翻訳) (2014) 文藝春秋
  21. 『世界一大きな問題のシンプルな解き方——私が貧困解決の現場で学んだこと』ポラック・ポール (著)・東方 雅美 (翻訳) (2011) 英治出版
  22. 『なぜデザインが必要なのか——世界を変えるイノベーションの最前線』ラプトン・エレソン (著)・カーラ マカーティ (著)・マチルダ マケイド (著)・シンシア スミス (著)・北村 陽子 (翻訳) (2012) 英治出版
  23. 『システム×デザイン思考で世界を変える 慶應 SDM「イノベーションのつくり方」』前野隆司 (著)・保井俊之 (著)・白坂成功 (著)・富田欣和 (著)・石橋金徳 (著)・岩田徹 (著)・八木田寛之 (著) (2014) 日経 BP 社
  24. 『「ソーシャルデザイン」の教科書』村田智明 (2014) 生産性出版
  25. 『ソーシャルインパクトー価値共創(CSV)が企業・ビジネス・働き方を変える』玉村 雅敏 (著, 編集)・横田 浩一 (著)・上木原 弘修 (著)・池本 修悟 (著) (2014) 産学社
  26. 『実践ソーシャルイノベーション - 知を価値に変えたコミュニティ・企業・NPO』野中 郁次郎 (著)・廣瀬 文乃 (著)・平田 透 (著) (2014) 千倉書房
  27. 『世界で最もクリエイティブな国デンマークに学ぶ 発想力の鍛え方』クリスチャン・ステューディル (著)・リーネ・タンゴー (著)・関根光宏 (翻訳)・山田美明 (翻訳) (2014) クロスメディア・パブリッシング
  28. 『ワーク・シフト — 孤独と貧困から自由になる働き方の未来図』リンダ・グラットン (著)・池村 千秋 (翻訳) (2012) プレジデント社
  29. 『CEO から DEO へ - 「デザインするリーダー」になる方法』マリア・ジュディース (著)・クリストファー・アイアランド (著)・坂東智子 (翻訳) (2014) ビー・エヌ・エヌ新社
  30. 『続・百年の愚行』小崎 哲哉 (著)・Think the Earth (著) (2014) Think the Earth
  31. 『誰が世界を変えるのか ソーシャルイノベーションはここから始まる』フランシス ウェ

- スリー (著)・ブレンダ ツィンマーマン (著)・マイケル クイン パットン (著)・エリック ヤング (著)・東出 顕子 (翻訳) (2008) 英治出版
32. 『問いかける技術——確かな人間関係と優れた組織をつくる』エドガー・H・シャイン (著)・金井 壽宏 (監修)・原賀 真紀子 (翻訳) (2014) 英治出版
33. 『OCICA ～石巻 牡鹿半島 小さな漁村の物語』一般社団法人つむぎや (著) (2012) つむぎや
34. 『OLIVE いのちを守るハンドブック』NOSIGNER (編集) (2011) メディアファクトリー
35. 『街角で見つけた、デザイン・シンキング』竹原あき子 (著) (2014) 日経 BP 社
36. 『デザインマネジメント』田子 學 (慶應義塾大学大学院特任教授/エムテド代表) (著)・田子 裕子 (著)・橋口 寛 (著) (2014) 日経 BP 社
37. 『地域の魅力を伝えるデザイン—Design for local paper media in Japan』齋藤あきこ (編集) (2014) ビー・エヌ・エヌ新社
38. 『なぜ繁栄している商店街は 1%しかないのか』辻井 啓作 (著) (2014) CCCメディアハウス
39. 『ビジネスモデル・ジェネレーション ビジネスモデル設計書』アレックス・オスターワルダー (著)・イヴ・ピニユール (著)・小山 龍介 (翻訳) (2012) 翔泳社
40. 『Value Proposition Design: How to Create Products and Services Customers Want』Alexander Osterwalder (著)・Yves Pigneur (著)・Gregory Bernarda (著)・Alan Smith (著)・Trish Papadakos (デザイン) (2014) Wiley
41. 『描きながら考える力 ～The Doodle Revolution～』Sunni Brown (著)・壁谷さくら (翻訳) (2015) クロスメディア・パブリッシング
42. 『未来を發明するためにいまできること スタンフォード大学 集中講義 II 』ティナ・シーリグ (著)・高遠裕子 (翻訳) (2012) CCCメディアハウス
43. 『問題解決ができる、デザインの発想法』Ellen Lupton (編集)・郷司 陽子 (翻訳) (2012) ビー・エヌ・エヌ新社
44. 『日本をソーシャルデザインする (idea ink(アイデアインク)) グリーنز (編集) (2013) 朝日出版社